
漂流ゲノム

彪峰イツカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漂流ゲノム

【Nコード】

N1058BA

【作者名】

彪峰イツカ

【あらすじ】

「この世界に疑問を持つ者こそ、偽物のこの世界の中での唯一の真実だ」

世界を信じない少年少女は「現実」と「ヴァーチャル」の狭間で果てない戦闘を繰り広げる。

長編現代SF小説。

オリジナル創作サイト「Never-never Land」より転載。

プロローグ

もう、駄目かもしれない。

直接脳髓を揺さぶられているような衝撃に耐えながら、彼はそう思った。聴覚は複数のアラーム音で埋め尽くされ、視野も半分以上が欠損している。機体は破滅的なダメージを受けていたが、痛みがないのが救いだった。機体の損傷が「コア」の痛覚に連動していなくて良かった。彼はぼんやりとそう思う。そうでなければ、きっと今頃は精神に異常を来たしてしまっていただろう。

「おい」

音声シグナルは、奇跡的にまだ生きていた。他の機体との交信は不能でも、彼にはまだ呼びかけたい相手がいる。「エイアイ」。彼は「コア」に選ばれてから、ずっと側にいた存在。彼に「コア」としての全てを教え、そして肝心なことは何も教えてくれなかった。それでも、「それ」が彼の戦友であることにはわりはない。

「もし、おれたちが負けたら　どうなるんだ？」

『負けはしないさ』

「……?!」

聞き覚えのない声だった。彼の「エイアイ」の、それではない。『ああ、ごめん。きみの「エイアイ」は既に壊れてしまったので、代わりにぼくが答えたんだ』

「エイアイ」が壊れた。その言葉に戦慄する。もうすぐ、おれも壊れてしまう……！

その声に悲愴感はまるでなく、彼の運命になど全く興味がないようだった。

『心配は要らない。この舟には、まだ切り札が残されている　だから、まだ、「ノア」は終わりはしないよ』

だが、おれは、終わるのだ。彼は思った。ある日突然、彼の目の前に現れた「エイアイ」。「ノア」を守れ、と。「コア」とし

て「アーク」に乗り、敵と戦えと。何が何だかわからないままに、
彼はここまできてきて。そして。

『さようなら、リニア・レイ』

瞬間。ひとつの「夢」が、終わった。

第一章 ハジマリハユメ

1

「輝也かくやさんって、幽霊信じる？」

「……………」
時任輝也は、反応に二秒半ほどを要した。やがて彼はパソコンの画面を見つめたままキーボードの上を走る指だけを止め、

「その質問には意味がないな」

と答えた。そっけないが、別に機嫌が悪いわけではない。いつも通りだ。

輝也はちらりと彼女を見遣った。質問をした彼の従妹は、ソファに寝転がってコーヒーを啜っている。彼女専用のマグカップの奥から、大きな眼がじつと彼を見つめていた。

「僕の言ってる意味、分かるね」

「うん」

輝也の従妹 北原透海ほつみはうなずき、ソファの上に起き直って座った。肩を少し越える程度に伸びた黒髪を、指先で軽く整える。彼の十歳年下の従妹は、今年高校一年生。偶然にも、彼の勤める高校に進学している。

輝也の言った意味はこういうことだった 幽霊が存在しているかどうかの答えは一つで、それは存在しているか否かのいずれかであり、同時に双方を満たすことはあり得ない。だから、個人レベルで存在を信じるかどうかという議論は、存在の論証には何の役にも立たない。だから、質問に意味がない、と。

そもそも存在を信じるとはどういうことだ、と輝也は思う。犬の存在を信じるのか？ 猫の存在を信じるのか？ それではひとは自分の存在を信じているのか？ 存在を信じるかという質問が意味を持つことがあるのだろうか。信じれば、存在しないものが存在

するようになるでもいうのだろうか。まあ、そういう場合もなくはないけれど……たとえば神、とか。

透海はとりとめない思考に没入しかけている輝也の方を見ながら、「私もそう思う」

とつぶやいた。輝也はため息と共に言葉を吐き出す。

「じゃあ、どうしてわざわざ尋ねたの？」

「輝也さんがどう答えるかに興味があったからよ」

「でも最初から答えは予想していたらどう？」

「まあね」

透海は肩をすくめた。輝也が両親を事故で亡くして以来、兄妹同然に育ってきた年月は伊達ではない。

ふたりが他者に与える印象はさほど似ていないのだが、輝也の思考の型と透海の型はどこか似通っているらしい。アウトプットされてくる言葉がしばしばぴつたりと重なって、透海の両親らを驚かせるのだった。

透海は軽く鼻息を漏らした。

「それにしても、幽霊って何をさす言葉なのかしら。定義が良くわからない」

「人間の霊魂が可視状態にあること、かな……。でも心靈写真って見えないのに写っているとか、そういうやつでしょう。写真フィルムは基本的に感光だから、そりゃあ人の不可視領域の光線が写りこむこともあるかもしれないけど。それが霊魂っていうのは、ちょっと短絡的に過ぎるかな」

「人魂って、実際はリンなんでしょ？」

「うん」

輝也は透海の言葉を肯定した。

「墓地で目撃されることが多いのは、人骨にリンが含まれているせいだね」

リンの引火点は低いし、墓地には線香や蝋燭などの火気もある。条件がそろっているのだ、と輝也は言った。教師という職業柄、説

明し始めるとどうも講義をしているような口調になる。

輝也は、少し言葉を切った。

「……それに、墓地つて人魂を見たいと人々が思う場所でもあるよね」

透海は眼を軽く閉じて考え、輝也の言う真意を汲もうとする。彼は彼女の思考を待たずに言葉を継いだ。

「僕はね、葬式とか、そういうものって生きている者の為にあるんだと思う」

「お墓も？　つまり『故人が未だそこに居る』もしくは『かつては存在していた』ことを外界に対して主張する拠り所ってことかしら」

透海 of 言葉に軽く頷きつつ、

「外界……とは限らないね」

輝也はついにパソコンの電源を切ってしまった。どうせ急ぎの仕事ではない。彼の作っていた一学期の期末試験は、まだ二週間ほど先だ。今日でなくてもいい。今は、透海と話をしたい。

「むしろ自分に対して……じゃないかな。ほら、去る者日々疎して言うじゃない？」

「そうね」

「僕だって、もう両親の思い出はそう多くないんだよ」

「……………」

透海は口をつぐんだ。

輝也の両親が死んだのは十年前、輝也が十五歳で、透海が五歳のときだった。父母と彼と、三人が巻き込まれた交通事故で、生き残ったのは一人だけ　輝也だけだった。言葉を選んでいる透海の横顔を見遣り、輝也はふっと表情を緩めた。

「ごめん。気を遣わせた」

「そんなこと……………」

顔を上げる彼女に向かい、言葉を重ねる。

「故意に、だよ。だから謝った」

「……………」

透海は微笑んだ。

「気を遣うことは嫌いじゃないの」

「そう？ 僕は面倒だと思うけれど」

「でも、気を遣うのは意味のあることだと思うわ」

透海の言葉に、輝也も少し微笑した。

「確かに、客観的視点の導入は人格の成長の第一歩だと思う。……

それで、さっきの質問だけど」

「幽霊？」

「そうそう。それ」

透海は少し躊躇うように視線をさまよわせた。輝也は問いを重ねる。

「どうしてそんなことを聞こうと思ったの？ さっきと同じ答えを欲しているわけじゃないよ……まあ、質問を変えてもいいけどね」

どうしてそのことに対する自分の見解を聞こうと思ったのか。

輝也の言いたいことはそれである。透海は深呼吸の途中で息を一瞬止め、やがて大きく吐いた。

「まあ、大したことじゃないんだけど、ね」

「何が？」

「私の周りの子がみんな見たって言うの」

「幽霊を？」

「幽霊っていうか……同じ人を。それがちょっと、おかしくて」

「どういうことかな。もう少し整理して話して欲しい」

輝也は身を乗り出した。透海の歯切れが悪いのが印象的だった。

彼女はいつも言われなくても理路整然と話す性格なのに。

「うん……」

透海は一つ頷き、椅子に座りなおした。

「最初は、体育の授業中だったのよ……」

グラウンドで、点呼を待ち並んでいたときのことだ。不意に、隣の友人が小さく叫んだ。

「あ、あれ見て！」

「え？」

透海は怪訝そうに彼女の指差す先を見遣るが、驚愕を引き出すだけのものは何もなかった。その指先は校舎の屋上の少し下くらいを指し、細かく震えている。彼女は青ざめ、指を差していない方の腕で透海を揺すぶった。

「あれよ、見えないの?!」

「えーっと、何のこと？」

透海は瞬きを繰り返すが、何も特別なものは見えない。

「あ……あ、消えていく……」

彼女はつぶやいた。

「消えたわ……!!」

「何があつたの？」

彼女は青ざめて透海を見た。

「透海は見えなかつたの?!」

「ええ」

「じゃ……じゃ、あれは幽霊……?」

彼女の見たのは、銀髪に赤い瞳の男子生徒だという。透けるように白い肌で、服は高校の学生服を着ていたらしい。異常だったのは彼が宙に浮いていたこと。彼女と眼が合ったその少年は、静かに微笑みかけてきたというのだが……。

輝也は首を傾げた。

「随分フレンドリーな幽霊だね。幽霊はみんな現世に怨念を残しているものかと思っていたけど」

「でもその子だけじゃなかったのよ、それを見たの」

「その話を聞いた子が、そういう気分になっちゃったんじゃないの? ほら、よくあるじゃない。集団幻覚とか」

「うん、そうかもしれないけど……、それぞれ違う場所で見ているし、それに細かい特徴まで一致しているの。背丈とか、いろいろね」

「ふうん……。でも、君は見ていないわけだ」

「そうなのよ」

「変だね」

「変でしょう？」

「君だけが見ていないの？」

「……私とそれなりに仲のいい子ばかりが見ていて、私は見ていない」

「それ、新手の嫌がらせじゃない？」

「まさか。それはさすがに気付くわよ」

透海は嘖き出した。あながち冗談を言ったつもりでもない輝也は、複雑な表情をした。

幼い頃から、周囲の人間が驚くほど利発で聡明な少女だった透海だが、かつての透海は他人の悪意に鈍感で、時に素直すぎるほどに真っ直ぐな子供だった。同年代の子供と自分が少し違っていることに、彼女だけは気付いていなかった。いつ頃彼女は気付いたのだろう。「違う」ということが、他人から悪意を向けられるきつかけになるのだということ。 「浮く」ということが、集団生活においてどれほど危険なことか。 何度か彼女は傷つき、やがてその原因に気付いた。自分が、少しばかり他の子供たちと違っているということに。 気付いてしまえば、彼女は持ち前の頭の良さで速やかに対処する術を覚えた。自分と他者との間に高い壁を作りあげたのだ。目立たないように、注目されないように。彼女は細心の注意を払って生きている。それが悪いとはいわない。むしろ、透海が傷つかないために必要なことなのだろうと思う。だが、自分は彼女にとって壁の必要のない存在でありたいし、実際そうだと思っている。

彼自身も、彼女と同じような経験をしている。周囲と自分とは違う。だが、彼は彼女よりも早くに気が付いて、他者をそれなりにやり過ぎることができた。幼い頃の透海のような真っ直ぐなまなざしは、きつと自分にはなかったものだ。今でも彼女が時折見せるその光は、ひどく眩しくて、愛しい。

「……結局、よくわかんないってことね」

透海のつぶやきに、輝也はうなずいた。

「うん、今の話だけじゃ何とも言えないな……。力になれなくて悪いけれど」

「そうね……。ごめん、変なこと言って」

「いや、何も謝ることはない」

輝也は透海の肩をぽん、と叩いた。

「もし君にも見えるようになったら、その方が心配だし。何か変化があつたら教えて欲しい」

「分かった」

透海は微笑んで立ち上がった。そろそろ自分の家に帰るのだろう。かつては彼も住んでいた家だ。

「時間も遅いし、送っていこう」

透海に続き、輝也も腰を上げた。彼女を送り届けるついでに、彼女の両親　彼の育ての親に顔を見せよう。

「輝也さん」

玄関を出る前、先に靴を履いた透海がぐるりと振り向いた。

「輝也さんは、幽霊見てないよね？」

茶化すような調子の割に、瞳は真剣だ。輝也はきっぱりと断言する。

「うん、見ていない」

銀髪に赤い眼……。アルビノか？　空中を浮いて？　愛想笑いを浮かべる？

輝也は首をひねった。

「幽霊つて長い黒髪なんだと思っていただけけど」

白い浴衣を着て、うらめしやとつぶやく。そういったイメージしか浮かばない。

「別にそれは決まりじゃないんじゃない？　最近は茶髪だつて多いかもしれない」

透海は首をすくめた。輝也はあくまで真面目だった。

「足はあつたの？」

と尋ねた。透海はぷつと小さく吹き出す。

「あつたらしいわ」
それはきつと、幽霊ではないだろう。その、輝也の予想は当たっていた。だが肝心な点についてはなにひとつ わかるはずもなかったのだった。

2

久遠啓くよんあきらはひどく怯えていた。目の前に立つその少年が、たまらなく怖い。銀色の髪。瞳は赤。真っ白な肌。一分の狂いもない造形はひどく美しいが、逆に無機質な酷薄さをも感じさせた。

少年は淡々と、彼にとつては訳のわからないことを口に出している。「どういうわけか、今回の『コア』に対する『ノア』のセキュリティは厳しいな。僕でさえなかなか『彼女』に接触できないなんてね。こんな非常事態だつていうのに、どういふつもりなんだか。『彼女』に僕の姿を見せるのさえ一苦労だ。……まるで、『ノア』は『彼女』を『コア』にしたくないみたいだ。自分が選び出したのにな？」

自分と変わらぬ年齢の少年なのに、この威圧感はどういうことだろう。彼はがたがたと震える。

「くどう、あきら」
少年が自分の名を呼び、にこりと笑った。それでも、研ぎ澄まされた刃物のような鋭い印象は変わらない。

「申し訳ないのだけれど、これから君のデータを抹消させてもらう。少しも申し訳ないなどと思っていない口調で、少年はそう言った。……えっ？」

「これからは僕が久遠啓になる。そういうことだ」
彼はいとも簡単にそう言ったのけ、啓の額に手をかざした。

「君は『ノア』の作り出した擬似人格の一つでしかない。しかも君のデータを保管して運用しているメモリは『ノア』のメインコン

ピュータの中ではきわめて辺縁な場所にある。きつと君のメモリ一つが僕の階層に移動したって、『ノア』は見逃してくれる」

「な、何を言ってる」

「時間がない」

少年はきつぱりと言った。

「急がないと我々は宇宙の藻屑となってしまうんだから」

「……………」

啓が何か言うよりも早く、少年は啓の顔をくしゃつ、と握りつぶした。大して拳に力を込めた様子もない。血も肉も骨すらも何も残らない、それは久遠啓のあつけない消滅だった。

少年は　今や新しく「久遠啓」となった少年は、ぼそぼそと咳いた。

「僕が『彼女』と接触するためには、このメモリを利用するのが一番いい……彼は転校以来ずっと自宅に引きこもっていたし、両親もほとんど彼には干渉しない」

いや、なんとも思えるはずがないのだ。銀褐色の髪で赤眼という、ふつうならひどく目立つであろう風貌にも関わらず、彼の周りのほとんどの人間たちはそれを何とも思わないだろう。

少年はにやりと笑った。

「擬似人格は僕には干渉できない。僕は擬似人格よりは高次の存在だから、擬似人格のディレクトリに干渉できるけれど、その逆は成り立たない。『彼女』の眠るディレクトリは、さらに高次にあるわけだが……。実存人格でもなく擬似人格でもない、そもそも僕というプログラムに人格があるといえるのかな？」

一人でつぶやき続けながら、本物の久遠啓のものだった部屋を歩き回る。ふと窓際で足を止めた彼は、勢い良く窓を開いた。「彼女」がいると思いき方向に視線を定め、口元を引き締める。

「早く『彼女』を　ディープブルーを投入しなければ、我々は負ける……………」

そうなれば、全てが終わる。この途方もない旅の全てが。

「啓」は夜空をじっと見上げていた。そこにある星を睨みつけるように。

3

二か月前に転入して以来一度も姿を見せなかった転入生が、今日ようやく登校してくる。そう、嬉しそうに語っていた学年主任が、件の生徒を伴って職員室に入ってきた。

彼をちらりと一瞥した輝也はおや、と思った。銀褐色の髪、赤い瞳、透けるような白い肌。透海の言っていたおぼけ。否、幽霊とそっくりの外見ではないか。

「偶然か。それとも……」

「何だ？ 時任」

顔を突き出してきたのは浅川という教師で、輝也の同窓生である。現在は透海の担任でもあった。

「何でもないよ」

「お前らしくない言い訳だな」

「そう？」

浅川は輝也に構うのを止め、背後に立っていた転校生を振り返った。

「さあ、教室に行こうか」

「はい」

どうやら、彼は透海と同じクラスらしい。少年 久遠啓は微笑み、輝也に会釈をした。軽く礼を返した彼の耳に、啓のものと思しき声が届く。

「……これは、何だ？」

「……？」

「これ」、というのが何を指しているのか分からずに彼は眉をひそめた。啓は輝也に自分の声が聞こえていることに気付いていない

かのように、ぼそぼそと小さな声で呟いている。

「『ノア』の作り出している擬似人格ではないな……しかし、実存人格でもない……『彼女』の存在と無関係であるはずはないが……」

「彼女」の、従兄なのだから。その言葉を聞き取って、輝也ははつと顔を上げた。彼に透海以外の従妹はいない。今の言葉が自分に向けられていたのだとしたら、「彼女」というのは透海のことか……？

「行くぞ」

浅川に声をかけられ、啓は頷いた。その表情に、先ほどの台詞は全く痕跡を残していなかった。

啓は廊下を浅川について歩きながら、なおも呟いている。浅川は、彼の呟きには気付いていないようだった。

「『リニア・レイ』が破壊されてから、戦闘が激化している。早くしないと『ノア』に致命的なダメージを与えられてしまう……」

彼は半ば眼を伏せた状態で、

「あと僕に許される時間は数ナノセカンド。残された『アーク』はあと三機だ。どこまで彼らの攻撃に耐え切れるか……」

啓は尽きることなく、言葉を連ねていた。

4

いよいよ自分にも幽霊が見えるようになったのだろうか。透海はそう思ったが、啓は幽霊ではなく生身の人間であるらしい。彼女の友人が見かけたのも、転校先が気になって学校を訪れていた彼だろう、という結論に落ち着いたようだ。じゃあ、宙に浮いていたって話はどうなるの。彼女は疑問に思ったが、周りの友人たちはあまりそのことについて気にしていないらしい。まあ、いいか。透海はあっさりと気持ちを切り替え、深くは追求しないことにした。友

人たちの見間違いなのかもかもしれない。現に今、自分に啓は見えて
るわけだし……。

浅川の隣に立っている啓が、不意に透海の方を見た。眼があつた
ことに気付いたのか、にこりと微笑む。

「……………」

透海は無表情のまま彼を見返した。彼は笑みを崩さぬまま彼女を
じっと見つめている。変な人。透海が眼をそらしたとき、耳元で声
が響いた。

「デーパーブルー」。

「え？」

小さな声で呟く。「デーパーブルー」。確かにそう言われた。け
れど、誰に……？

「久遠啓です。よろしくお願いします」

頭を下げてそう言う啓の声に、どこか似ていたような気もする。

しかし透海は確証がもてなかった。そもそも、あの声は耳元で聞こ
えたのだ。数メートル離れて立っている啓であるはずがない。

「席、そこ空いてるな」

浅川が指さしたのは透海の左隣。

「久遠、そこ座ってくれ」

「はい」

彼は軽く靴音を立てながら透海の方へと歩み寄り、会釈した。

「はじめまして、北原透海さん」

「……………」どうして私の名前を知っているの？」

挨拶には返答せず、透海は聞き返す。啓は黙って微笑んだ。だが
その赤い瞳は彼女を見据え、少しも瞬くことはない。先に目を
逸らしたのは、透海だった。まるで、彼の視線は彼女に標的を合わ
せているかのようで、落ち着かない。ひどく胸騒ぎがした。

「……………」

授業を受けながらも、透海は隣の啓が気ではなかった。しか
し、それは友人たちがひそひそ騒いでいるように彼が美形であるか

らとか、そんな理由ではない。「ディープブルー」。それが何なのか、気になって仕方がないのだ。やはりさっきの声は彼のものだったような気がする。それにしても、何故その一単語がこんなにも気になるのだろう。考えても仕方がないものは考えない、気にしなくていいものは気にしない。それが自分のモットーだったはずなのに、
だめだ。やっぱり気になる。彼女は授業が一段落ついた頃を見計らい、思い切って啓に声をかけた。

「久遠君」

「何？」

啓は振り向いた。透海は躊躇しつつ、尋ねる。

「さっきね、何か言わなかった？ ああ、席に着く前なんだけど」

「僕、何か言ったかな」

啓の瞳が赤く輝いている。警告灯のようだ、と思った。

「言ったわよ。あ、」

透海は一瞬言いよどんでから、その言葉を口にした。

「『ディープ・ブルー』、って」

5

三機の「アーク」のうちの、「ポップ・アイス」はふと母船「ノア」を見遣った。正確には頭部を囲んで三百六十度方向にとりつけられているセンサーのうち、「ノア」に向いているものの情報を優先的に選択受信した、ということになる。

『どうした、ポップアイス？』

友軍の「アーク」、「トール・グラス」からの通信に、「ポップ・アイス」は曖昧に答えた。

「今、何か……」

『よそ見をするな、ポップ・アイス』

焦りをにじませたこの声は、「フレイア・ボトム」だ。「ポップ・アイス」は白、「トール・グラス」は深緑、「フレイア・ボトム」は赤色に塗装された、人型宇宙空間戦闘機であり、その機体は「アーク」と呼ばれている。彼らはその「アーク」のパイロットたる「コア」なのだった。

彼らは今、敵と戦っている最中である。しかも先ほど「リニア・レイ」を撃墜され、かなり苦しい状況に置かれている。

「ポップ・アイス」は「ノア」から意識をそらし、迫り来る敵機に向かい爆雷を打ち出した。闇の中ではじける細かい光はひどくさやかだが、実際はすさまじいエネルギーが空間に放出されているはずだ。

「残り何機だ？」

目標のうち手こずっていた一機を破壊したことを確認し、「ポップ・アイス」は問う。

「分かん。しかし、こちらよりは多い」

「……………」

答える「トール・グラス」。一方、「フレイア・ボトム」は沈黙している。

敵機は友軍の「アーク」と同じような姿と大きさをしていて、細かい部分の形状が違っていただけに見える。操る武器も、その威力さえもが良く似ているのだが、敵が一体何者なのか、「アーク」を操る彼らは知らない。彼らが「コア」となった時に現れた、彼ら専属の「エーアイ」人工知能たちも、そのことに関しては頑として口をつぐんだ。つまり、誰も教えてくれない。気にならないといえは嘘になるが、気にしても仕方がない。向こうが全力で襲ってくるのだから、こちらもやり返すしかない。

「おい」

不意に「フレイア・ボトム」が口を開いた。

「「アーク」が起動したぞ！」

「何だと？」

「ノア」を戦闘から隔離し、守っていた超電磁波シールドがゆっくりと下ろされ、そしてずっと「コア」不在のままに保管されていたはずの、最後の「アーク」がゆっくりと搬出されてくるのが見えた。その色は、深い深い青。

「……『ディープ・ブルー』?!」

「ポップ・アイス」は叫んだ。虚空と同じ、闇色の機体。今はまだ、微動だにしていない。

『しかし、通信に「コア」が応答しない。どういっわけだ?』

「フレイア・ボトム」がつぶやいた。

『回線はオープンになっているはずなのに……』

『戦闘を続行しよう』

冷静な「トル・グラス」の言葉に、他の二機は体勢を立て直した。そうだ、敵は目前に迫っている。

『コンタクトは後でもとれる』

「了解」

「ディープ・ブルー」は沈黙を守ったまま浮遊するようにこちらに向かって進み、やがてゆっくりと身を起こした。眼に当たるサーチ・ライト部分が白く発光している。間違いなく起動している、と「ポップアイス」は思った。

途端、青い稲光が疾走した。

「?!」

少なくとも彼らにはそう見えた。敵機との距離をあっという間に詰め、至近距離でエネルギー弾を連射する。

『な……?!』

息を呑む彼らの目の前で「ディープ・ブルー」はさらに身を翻し、搦め手から掴み掛ってきていた敵機の腕を力任せに引きちぎった。真空中とはいえ放電が発生し、視界が白くスパークする。

「なんだっていうんだ?!」

「ポップ・アイス」が叫ぶ。

「『ディープ・ブルー』の『コア』は、一体何を考えて……」

片腕のなくなった敵機は旋回しながら分解し、やがて真空で破裂した。破片が雨あられと降り注ぐ。これでは友軍機にまで傷をつけられかねない。

「……ちっ」

「アーク」たちは一端退いた。ちょうどそのとき、
「やあ、はじめまして」

彼らの回線に、年若い少年の声が入り込んだ。

「君が「ディープ・ブルー」のコアか?!」

「トール・グラス」が詰問すると、少年の声は違う、と言った。

「僕は「ディープ・ブルー」用の「エアアイ」だよ」

「それなら……あの「ディープ・ブルー」の様子は一体何なんだ？
説明してくれ」

「フレイア・ボトム」が尋ねる。

「正直、常軌を逸しているとしたか思えないぞ」

息をひそめるかのように動きを止めている彼らの目の前で、「ディープ・ブルー」はまるで獣のように暴れ狂い、次々と敵機を撃破していった。うかつに近づけばこちらまで爆破されてしまいそうだ。その勢いは凄まじく、これがその「コア」にとって初めての戦闘だとは思えなかった。彼らが「コア」に選ばれた当初は、「エアアイ」に導かれつつ「アーク」を操ることで精一杯だったというのに……。
「……そのことなんだけれど」

少年の声が曇った。

「彼女は「ディープ・ブルー」はまだ目覚めていないんだ」

「何だつて？」

戦闘は既に終結しつつあった。状況を不利だと判断したのか、敵機は徐々に撤収し、「ノア」の周りには静寂が戻ってきている。

敵が去ったのを悟ったのか、「ディープ・ブルー」も攻撃をやめて静かに虚空を漂い始め、「ノア」による回収を待つ体勢に入った。先ほどまでの暴走が嘘のようなおとなしさだ。

「トール・グラス」が苛立ちもあらわに声をあげた。

『どういうことだ。「コア」が目覚めていないのにどうして「アー
ク」が起動する?』

『わからない』

少年は言った。

『彼女が「ディープ・ブルー」の名を口にすることが、彼女の「コ
ア」としての覚醒の鍵だったはずなんだけれど、何故か上手くいか
なかった。彼女の意識の本体はまだ「ノア」の中にあるよ』

『それでは、今の「ディープ・ブルー」の「コア」は……』

『手っ取り早く言うと、彼女の大脳皮質を流れているパルスが断片
的に送られてきた、ということ。彼女は戦闘中でも意識の途切れを
感じることなく生活しているだろう。ただ、今回の戦闘にせよせい
ぜい十ナノセカンドだから、「ノア」の中に居ればほんの一、二秒
にしか感じられない。結果的には君たちとたいして変わらないね』

『……………』

彼らが誰も答えを返せないうちに、少年はあっさりと話をまとめ
に掛かった。

『連携は不可能だが、当分戦闘にはこの形で参加することになる。

それでは、よろしく』

『お、おい!』

『ポップ・アイス』が声をかけたときには、既にその「エアイ」
は彼らの回線からオフしてしまっていた。

『何だっというんだ、一体……』

『コア』も『コア』なら、「エアイ」も「エアイ」だ。「ポ
ップ・アイス」は首を左右に振って嘆息する。

『もし「ディープ・ブルー」の「コア」に異常があるのなら「ノア」
が調査させるだろうさ』

そもそも「アーク」の「コア」は「ノア」が選り出すものだ。何
故、「ノア」はこの「コア」を選んだのだろう。だが、そんな
ことは彼らにわかるはずもない。

『まあ、しばらくは仕方がないか』

『一機少ないよりはました』
三人の「コア」は互いに同意し合い、やがて沈黙した。ぼんやりと意識が薄れ始める。そして三機の「アーク」の「コア」たちは、「ノア」内部への帰還を遂げた。

6

何となく、思い出していた。あれはまだ、透海が小学生になったばかりの頃のことである。当時から彼女は活字中毒者で、一日数時間の読書が当たり前の生活をしていた。輝也は高校生くらい。そのころは彼とまだ同じ家で暮らしていて、まるで彼らは兄妹のように育っていた。

「ねえ、お兄ちゃん」

多分、輝也をそう呼んでいた頃のこと。

「何？」

輝也は読んでいた新聞から眼を上げて問い返す。透海は読み終えた本を膝に抱えて床に座ったまま、椅子に腰掛けている輝也を見上げた。

「この『世界』って 本物なのかなあ」

「……どうということ？」

「うん、あのね」

透海は説明した。……この頃には、誰かに自分の考えを語るということを、彼女はあまりしなくなっていた。彼女の思考する内容を話しても、大抵の友達は「わからない」「むずかしい」と答えるだけだったからだ。そして、何か気味が悪いものを見るような目で彼女を眺める。だから、彼女は他人に自分をさらけ出したりしないように気を付けている。

ただ、例外は、輝也だった。透海は言葉を選んだ。

「本を読んでいる時、思ったんだけれど。本を読んでいるとね、私

の頭の中にその本の『世界』ができるでしょうか？ 登場人物がいて、いろんなことが起こって、いろんなことを考えて、感じて」

「そうだね」

「でも、私の頭の中にいる登場人物って、自分が小説のキャラクターだなんて思ってもみないのよ」

「うん」

「私たちもそれと同じなのかもしれない」

「……………」

輝也は少し考え込むように視線を落とした。透海は身を乗り出して力説する。

「私たちも本当は誰かの頭の中の『世界』にいる、キャラクターなのかもしれない……………」

「……………」

たっぷりと黙り込んだ後、やがて輝也は静かに頷いた。

「否定できない。僕らがそれを知覚できないという前提の元での、君の仮定だから」

透海は表情を曇らせ、輝也を覗き込む。

「…………私、変かな」

「どこが？」

「…………わかんない、けど」

多分、学校の友人たちはこんなことを考えたりしない。自分は、皆が言うとおり変なのだろうか。

「変じゃないよ」

輝也はそう言って微笑む。彼らしい短い返答でも、透海は嬉しかった。

「それで 透海ちゃんは不安になったの？」

「……………」

輝也は黙り込んだ透海の心を読んだように、くすりと笑う。

「『世界』が本物じゃなければ、いつか僕たちは消えてしまつかもしれないものね」

「……だって、そうでしょ？」

透海は手にしていた本をかざす。

「さっきまで私はこの本の『世界』を作ってたけど、今はもうないもの。消えちゃったんだ」

「そうだね」

輝也は頷く。

「でもね、透海ちゃん。本物って何かな」

「え……？」

「たとえば、僕らは眼に見える色は本物だと思いがちな。ポストは誰が見ても赤い。みかんは黄色い」

「うん」

「でも、本当にそうだと思う？ 透海ちゃんの見ている赤と僕の見ている赤が同じだという保証はある？」

「……………」

透海はしばらく考え込み、やがて首を横に振った。

「無理だと思う……………」

「色は、眼にある異なった種類の色覚細胞が電氣的に興奮した割合で決まる。わかる？」

透海は首を傾げた。

「シキカクサイボウって何？」

「光を受け取って、その波長から色を読み取る細胞といえればいいかな。波長っていうのはね、光は波だから、その波のこう、うねってるところ一つ分の長さのことだよ」

指先で、虚空に図を描く。

「うん」

幼い透海は真面目くさった顔で彼の話に聞き入っていた。彼の言うことは難しかったが、決して彼女の理解の範疇を超えてはいなかった。

「僕らは色という情報をそのまま得ているんじゃないかって、ある決まった光の波長で興奮する細胞が送り出す電気信号を、脳で色の情報

に変換しているんだ」

「私たちは、間接的に色を感じている？」

「そうそう。そういうことだよ」

輝也は彼女が理解していることを感じ取ったのか、満足げに微笑んだ。

「だから、君が見ている色と、僕が見ている色が同じかどうかはわからない。特に人間以外の生物は僕らとは違った種類の色覚細胞を持っているものもいるから、余計にそうだね。犬なんかはほぼ白黒の世界だっていうよ」

「……わかった」

透海は素直にこくりと頷いた。それを横目で見遣り、輝也はつぶやく。

「僕は思うんだけど……本物なんて、どこにもないんじゃないかな」

「え？」

「本当って何だろう？ 僕らが知るニュースだって、自分の眼で見たものじゃない。自分の眼で見たって、錯覚ってことも先入観のせいってこともあり得る。何も本物じゃない」

「……でも」

透海は輝也を見上げた。視線が交差すると、彼女はにつこりと笑う。

「私たちが感じたり、想ったりしたこと、それは本物だと思う」

「……」

「嬉しいとか、悲しいとか、それは本当のことだもの。その原因が勘違いだったとしても、そう感じたことは事実でしょう？」

「……そうかもしれないね」

輝也も頷き、透海の髪にそつと手を伸ばした。

「それに……本物じゃなくなっただっていいのかもしれない」

「え？」

「偽物とかイミテーションも、悪くないと僕は思う」

透海のさらさらした髪に指を滑らせて、

「ただ……、それに騙されたくはないな。騙す方はいいけどね」

「結構いい性格してるよね、お兄ちゃん」

「誉めてもらって光栄だな」

ませた透海の言葉に、輝也はそう言っただけで微笑んだ。

何故か、透海はそんなことを思い出していた。何故か。

第二章 ユメハカゲロウ

1

彼女は虚空を舞っていた。

何物にも繋がれず、何物にも縛られない。

自由だ。自分は、こんなにも自由。

遮るものを破壊し、そらを拓く。

軽い。

どこまでも上っていく。どこまでも、どこまでも

だが、

光は、

やがて闇に変わった。

「……………?!」

気が付くと、透海は数学の授業を受けていた。

「あれ……………」

思考が一度断ち切られた後に繋ぎ直されたような、そんな不自然な感覚が頭の中にぼんやりと残っていて、透海は眼を瞬く。誰かに何かを話しかけたはずなのだが……………彼女の左隣では転校生の久遠啓が手早くノートを取っている。彼女の視線に気付いたのか、啓が眼を上げた。

「どうしたの？ 北原さん」

「え、うつん、別に」

手元に眼をやると、写した覚えもない数式が並んでいる。

「……………」

透海はたまに授業中でもぼつっと自分の思考にふけっていることがあるから、これは特に驚くことではない。驚くことではないのだが……………。

この世界って「本物」なのかなあ。

自分がかつて投げかけた問いが、脳裏に蘇ってくる。結局その問いの答えは見つからずじまいで今に至っていた。 どうしてこんなことを突然思い出したのかしら。透海は苦笑を浮かべた。そんなこと、どうだっというはずなのに。偽物だって本物だって、現実に変わりはないのに。この現実から、私は逃れられないのに……。

「北原」

眼を上げると、数学教師が彼女の目の前に立っていた。

「はい？」

「次の問題を当てたんだが」

苦笑しながら促され、透海はノートに眼を落とす。難しい問題ではない。透海はうなずいた。

「……はい」

立ち上がり、黒板の側へと歩み寄った。手にしたチョークが黒板とぶつかり、ぽきりと折れる。光を浴びて、ひらひらと舞い散る白い粉。

「…………」

透海はその破片をしばらく眺め、新しい白いチョークを手にとった。数式を幾つか書き連ね、答えを算出する。透海は自分の書いた式を一通り確認し、やがて身を翻した。

「…………」

彼女はどこか疲れたような表情をしているが、数学の問題ひとつを解いたためではないだろう。その様子を眺めていた啓は、小さくつぶやいた。

「彼女はとても不安定だ。……何故だろう？」

「アーク」の「コア」となる人格には、精神的に安定していることが非常に重要とされる。非現実的な戦闘シーンに突然送り込まれるのだから、当然のことだった。しかし、彼女の精神は繊細で、どこか不安定だ。何故、「ノア」は彼女を選んだのか 選んだにも関わらず、なかなか「コア」に据えようとしなかった理由は、何なのか。

気になる点は、もう一つ。彼女の従兄、時任輝也だった。

「何故、僕に彼のデータソースが見えない……？」

啓は苛々とした口調でつぶやいているが、周りの人間には聞こえていない。聞こえるはずがない。

啓は嘆息した。

「全く、この『世界』というやつは……」

矛盾とレトリックに満ちたこの虚構の「世界」。「ノア」はただただそれを維持し続けている。それが本当に意味のあることなのかどうか、啓には分からなかった。「ノア」そのように設計されているから、といえばそれまでなのだろうが。啓自身、そう作られているからというだけの理由で「デューブ・ブルー」の「エイアイ」になったのだから。

「落ちたわよ」

啓の手を離れて足元に転がった消しゴムを、席に戻る途中の透海が拾い上げた。

「はい」

「……ありがとう」

啓はにつこりと微笑むと消しゴムを受け取った。そっと、透海の指に触れる。透海は明らかに眉をひそめ、その指先を見遣った。やや過剰に接触を嫌うんだな、と啓は思った。

「随分冷たい手だね」

啓が囁くと、透海は肩をすくめた。

「冷え性なの」

「へえ」

指先の残像を味わおうというように、啓は唇に触れる。一瞬感じた冷たさは、もはやどこにも残っていないかった。

放課後、職員室に戻った浅川に輝也が声をかけた。

「浅川、ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「何だ？」

デスクの上にどさりと重たげなファイルを置いて、浅川が振り向く。

「透海ちゃんなら元気にしてるぞ」

「北原つて呼べ」

輝也は眉を顰めた。

「僕だつてここじゃ北原君つて呼んでるんだから。変に目立つことになったら彼女が可哀相だ」

「わかつたわかつた」

いつになく強い口調の輝也に、浅川は両手を挙げて降参のポーズをとった。

彼は担任になる前から透海のことを知っている。というのも、輝也の数少ない友人の一人である浅川は、何度か彼の家に　それは未だ輝也が北原家と共に住んでいた頃であつたが　遊びに行ったことがあるからだ。大人びた眼差しと子供っぽい瞳の輝きのコントラストが印象的だつた彼女は、そのときまだ小学校低学年だつた。知的で、好奇心に満ち溢れていて、頭の回転が素晴らしく早い。成長が楽しみだな、と思つたのを覚えている。

その後はしばらく会わなかつたが、その間に何か　彼女を変え何かがあつたのだろう。高校に入学し、教え子として再会した透海。その眼は、変わつていなかった。そして頭の良さも相変わらずだ。しかし、普段の彼女の表情には色がない。自分を必死で押し隠している、本来の自分を閉じ込めている、そんな風に見えた。教室で見る透海は大抵窓の外を眺めていて、そんな時は大抵無表情だ。友達と話しているときは自然な表情と物腰だが、それなりに生徒を見てきた浅川はすぐにその嘘に気付いた。まるで作り物だ。彼女はいつも、心の底から笑っていない。

こいつはそれにちゃんと気付いてやつてるんだろつな？　そ

んなことを思いながら浅川は輝也の顔をじろじろと無遠慮に眺めた。

「……で？ 聞きたいことって何だ？」

「今日来ていた転校生のことなんだけどね」

「転校生？ ああ、久遠か？」

「そう。あの子の申し送りを見せて欲しいんだ」

転校前の学校から送られてきているはずの書類は、担任の浅川が持っているはずだ。

輝也はあの少年が気になっている。通りすがりに投げかけられた訳の分からない言葉も勿論だが、その他にも 何となく理由のつかない胸騒ぎ、と言えはいいだろうか。

「ほらよ」

浅川はデスクの中でも一際乱雑なエリアから、意外なほど早く目的の紙を引つ張り出した。そういえば大学時代に輝也が浅川の下宿を訪ねたときも部屋の中はひどい有様だったが、しかし彼は驚くほどそれぞれの物の在処を把握していた。

「……ありがとう」

輝也はそれに眼を通すが、大したことは書かれていない。成績はいたって普通、やや欠席が多いが、そのことについて特に言及はない。眼を引いたのは彼の両親のことだった。父親は海外に単身赴任中。母親は東京に生活基盤を持つインテリアデザイナー。高校入学後すぐに転校したのは、それまで啓の面倒を見ていた母方の祖母が亡くなったせいだった。現在は、以前家族で暮らしていたマンションに戻り、一人暮らしをしているらしい。高校生にしては珍しい境遇だろうが、だからといってどうということはない。輝也はそう思った。

家庭環境がその家庭の構成員に影響を及ぼすのは事実だ。だが、その影響の及ぼされ方は各個人による。全く同じ家庭環境で育った一卵性の双子でさえ、別の性格を持ち得る。それならば結局のところ、個々のキャラクタこそが本人のアイデンティティといっているのではないか。バックグラウンドやステータスや、そんなものはキ

ヤラクタに比べれば大した意味はないと思う。むしろ、全ての要素はキヤラクタに包含されているとっていい。

たとえば、両親の死が輝也に与えた影響など彼にはわからない。それは他人が彼を見て判断することだし、もし自分の中に欠陥があるとしてもそれは自分のせいだと思う。決して両親を失ったからではない。そんな同情は彼には許し難い。

「ありがとう」

輝也は書類を浅川に返した。浅川はそれを受け取り、悪戯っぽい表情で微笑む。

「久遠つて、すごい美男子だよなー」

「……そうだっけ？」

顔　あの銀髪と赤い目に気を取られて、顔立ちまでは気が回らなかった。

浅川はわざとらしくため息をつく。

「嫌だねえ自分も顔がいい奴は」

「何を言ってるの？」

輝也は苦笑した。学生時代、女性に圧倒的に人気があったのは人当たりの良くまめな浅川だった。それだけ、浅川は努力をしているのだとも思う。今も浅川にはずっと交際している女性がいるが、輝也にはいない。何故かと聞かれても良くわからない。あまり他人に執着しない性質なのだろうと思っている。人は、いつかいなくなるものだ。自分も、他人も、それは同じ。すべては陽炎の揺らぎのように、儚いものだ。

浅川は椅子に深く腰掛け、背もたれをぎしぎしときしませた。

「女子たちは目をつけてるみたいだぜ？」

「気が早いね。皆、今日初めて彼に会ったばかりで、どんな人かなんてわからないんじゃないの？」

「顔なんて見たらその瞬間わかるだろ？」

「評価基準が単純でいいね」

淡々と言う輝也に、浅川はわざとらしく顔をしかめた。

「嫌味なコメントだなあ。……あ、そうそう」

「何？」

「この久遠啓つて子な。とう　北原の隣りに座ってるんだぜ」

「……そう」

輝也は特に表情を変えることはなかった。ただ、胸騒ぎが少し強くなったような気がする。　息苦しさをおぼえて窓の外を見遣った。グラウンドではサッカー部や野球部が練習をしている。その横を帰宅していく男子生徒の集団。

「……」

輝也はそれを見るともなしに見ていたが、ふと一点で視線が止まった。一際目立つ銀髪。それは学生服と綺麗なコントラストを成していた。

輝也の視線の先で、彼はゆっくりと振り向く。直線距離は百数十メートルはあるだろうに、彼は輝也をその赤い瞳でじっと見つめていた。確実に、輝也をとらえている。

「……」

一瞬対処できずに輝也がそのまま彼を見ていると、彼の方から視線を逸らした。　次の瞬間、

「え？」

驚きが小さく声に出る。いない。一瞬前までは確かにあの男子生徒の集団の中にいたはずなのに、いない。周りの者も誰も気がついていないのだろうか。誰も啓を探そうとする様子もなく、戸惑う様子もない。

「……」

見間違いだっただのだろうか。輝也は窓から離れた。彼のことを考えていたせいで、何となく彼の姿が見えてしまったのだろうか。それだけだろうか……。

「ま、いいか」

輝也は肩の力を抜いた。少し疲れているのかもしれない……。ふと、透海のことを思う。今日、彼女は家に来るだろうか。来て

欲しい。何でもいい、他愛のない話をして、一緒にコーヒを飲んで過ごしたい。そして、もし聞くことができれば あの少年のことを、聞いてみたい。いや、聞きたくない。一体、自分の本心はどこらなのだろう。わからない。

彼のことを、暴いてはいけない。彼の脳裏で誰かがそう、警告した。

3

スーツに身を包んでオフィス街を闊歩していた帷沙代子^{かたひつじなよこし}は、進行方向に佇む少年に気付き、軽く眉を寄せた。少年は黒い学生服を着ていて、それは銀髪と白い肌にとてもよく映えていた。彼女は内心思う 本当は、色素をまとうことだってできるはずなのに、わざとらしい。

沙代子は勤め先の銀行からちょうど帰宅するところだった。彼の目前数メートルに立ち止まり、長い髪をゆっくりと手で払う。

「こんなところでどうしたの? 『エーアイ』 十三号?」

「その呼び方はやめてほしいな」

少年は苦笑して進み出た。

「僕にはもう、久遠啓っていう名前があるんだからね」

「……そう」

沙代子は無表情に啓を見つめる。

「それで、何の用?」

啓はもまた、表情を消した。冷ややかな声で、事務的に告げる。

「管理プログラム一三四二にデータ検索の依頼だ」

「……お互いさまね」

沙代子は呟いた。

「私にも、帷沙代子っていう名前があるのよ」

啓は彼女の台詞を無視して言葉を継いだ。

「検索して欲しいデータの名称を言っよ」

「ええ」

沙代子は頷く。

「名前は時任輝也。年齢は二十代後半で××市在住」

掌に収まるほどの小さな機械を取り出した沙代子は言われたとおりの情報をノアに送り、データの送出手を依頼した。彼女のようにこの世界の随所に配置された管理プログラムは、こうしてノアに保管されているデータを時と場合に応じて検索することができる。

「……『エーアイ』の貴方がコンタクトできないデータなの？」

信号を送信した沙代子は、眼を上げて不思議そうに尋ねた。啓は軽く肩をすくめる。

「そういうことになる。僕にもよく分からないから、わざわざ君に検索を依頼しているんだよ」

「貴方、今は『ディープ・ブルー』付の『エーアイ』でしょう？」

その人と貴方にどういう関係が？」

「彼はその『コア』の従兄なんだ」

「……そういうこと」

沙代子は頷き、手の中の機械を見つめた。

「検索が終了したわ」

「そう。それで？」

啓の赤い瞳が鋭くきらめく。しかし、沙代子は首を左右に振った。

「『ノア』にデータ送信を拒否された」

「え？」

啓の眉が顰められる。

「何だっつて？ どういうこと？」

「分からないわ。私もこんなこと初めてよ」

沙代子は額を軽く指で押さえる。

「でも……『ノア』に拒否されたのは確実。データが存在しないわけではないみたいだけれど、私たちに見せたくはないってことみたい」

「ノア」はコンピュータであるが、非常に複雑かつ精密な構造を
しており、それは人間の脳にも劣らないどころか、むしろそれを超
えた存在といわれている。人間の精神というものが脳神経回路とそ
れに打ち出されるパルスによって形作られるものだとするならば、
「ノア」が人間と同じような もしくはそれ以上に複雑な 精
神構造を持ち合わせたとしても全く不思議はない。「ノア」の回路
の一部である「エーアイ」、つまり人工知能や、他の管理プログラ
ムまでもが擬人化され得るということは、それだけ「ノア」の精神
機能階層が多重構造をなしていることを示している。

何しろ、「ノア」は人類を運ぶ方舟なのだから。

「そう。それならいいよ」

啓はそうつぶやくと沙代子に背を向けた。

「『ユダ』！」

沙代子は啓の背中に声をかける。

「『ディープ・ブルー』はちゃんと使い物になるの？」

「……………」

啓は振り返った。唇を笑みの形に歪める。そこから生み出された
声は、ひどく無機的だった。

「さあ、ね」

彼らの周囲にいた人々は、彼らの会話の異常さに全く気づくこと
がなく、ただ普通に 呆れるほど普通に、日常が流れていった。

4

真空を漂う機体の残骸。それは、先の戦闘で「ディープ・ブルー」
によって粉碎された敵機のものである。その細かな破片が不意に、
意思を持つ生物であるかのように動いた。目指す方角は 「ノア」
。

星すら見えない常闇の中、巨大な宇宙船が進んでいく。虚無の洪

「いや。空耳じゃないの？」

「いい加減、そろそろ勉強するのよ」

「うん」

和臣は 和臣の姿を保った「それ」はゆっくりと立ち上がった。自分の体を確かめるようにじろじろと見て、やがて会心の笑みを浮かべる。

「辺縁のメモリにある人格で、こんなに『コア』に近いものがあったとはね」

口の中でぶつぶつとつぶやく。

「『ノア』のセキュリティも大したことはないな」

和臣は窓から夜空を見上げた。そこには星は一つも見つからず、それに満足したように彼はにっと笑う。

未だ、誰もこの異変には気付いていなかった。

7

青く煌く機体が軽やかに動く。どこか懐かしい感覚 彼女の四

肢末端が徐々に浸されていく。

深緑の機体、それが敵だということは何故か分かった。それらが襲いかかってくるのを冷静に見据え、彼女はそれらの破壊を願う。

彼女のまとう青い機体は、彼女自身の肉体以上に思い通りに動いた。闇の視界の中、彼女は機体を縦横無尽に操る。 守らなきゃ。何を守らなければならないのか、彼女は分からない。ただ、何かを彼女は守らなければならないのだった。今感じているこの暖かな感覚が、守るべきものなのかもしれない。

目の前を時折横切る赤と白と緑の機体は、友軍機らしい。時折、彼女の戦いをサポートしてくれる。何度目かの「夢」のとき、彼女は彼らを覚えた。

だが、彼女の五感は相変わらずぼんやりとされていて、またこの「

夢」の終わりも唐突で。

「透海ちゃん？」

不意に掛けられた声に、透海は体を起こした。

「え？」

髪をかきあげて辺りを見回す。上を見上げたところで輝也と眼が合った。

「輝也……さん」

「どうしたの？ ぼうつとして」

「うつん……ちょっと、ね」

学校帰りに透海は輝也の家に寄り、コーヒーを飲んでいるところだった。透海は例のごとく熱いコーヒーが適温に冷めるまで待っていたのだが……。

透海は大きくため息をついた。数日前から一度相談したかったことを、ようやく言葉にするのに成功する。

「なんか、最近白昼夢……っていうのかな、そういうのを見るの」

「白昼夢？ ……どういうのだろう」

輝也は眉を顰めた。

「良かったら、話してくれない？」

「うつん……」

透海はぼつり、ぼつりと語った。その視線は下を向いているが、特に落ち込んでいるような様子はない。淡々と、ただ事実を語っているだけといった調子だ。

だが、話の内容はとても事実とは思えないようなものだ。

青い人型の機体、

敵機による攻撃と迎撃、

赤と白と緑の味方、

果てしない虚空中で繰り広げられる戦闘。

ひととおり聞いた輝也は、ほう、と深い息をついた。

「……透海ちゃんってロボットアニメ好きだったけ？」

「ううん、別に。ほとんど見たことない」

「そうだよね」

輝也は首を捻った。

「何か変な夢だな」

「そう、変なのよ。妙にリアルだし……」

「つまり、君はそのロボットのコックピットにいるのかい？」

「ううん、そういうんじゃないの。私そのものが動かしている感じ」

「……かぶりもの？」

「違うけど……でも、感覚としては似てるかもしれない」

「いつも同じ夢なのかい？」

「そう。敵は違うけれど、大体は同じね」

「その戦闘の舞台って、やっぱり宇宙なのかな？」

「うーん……どこかな」

透海は首を傾げた。

「そうね、宇宙かもしれない。とにかく真っ暗で。でも、そういえ

ばちょっとだけ光の粒が見えたような……」

「そう」

透海 of 言葉はどんどん曖昧になっていく。そのことに気付いた輝也は、話題を変えた。これ以上聞いても、きつとたいしたことはない。自分には夢判断などできはしないのだから。

「そういえば、星って宇宙空間から見ると瞬いてないんだってね」

「え？」

透海が不思議そうに輝也を見つめる。

「星が輝いて見えるのは地球の周りに大気があって、光が屈折されたり散乱されたりするから」

「そうなんだ」

好奇心に煌く透海の瞳が好きだ。輝也はそのまま話をさらに変える。

「そう、それから……」

「それから？」

「前々から興味深いなと思っていたことがあるんだけど」

輝也は軽く足を組んだ。

「人類最初の宇宙飛行士が何て言ったか、知っているよね？」

「『地球は青かった』」

「そう、それ」

「それがどうかしたの？」

輝也は微笑み、本棚の一角に押し込まれた地球儀を眺めやった。

「僕が面白くなって思ったのは、主語が『地球』だったことだよ。

彼は『宇宙』について語ったわけじゃなかった」

「……どうということ？」

「だって、彼は初めて宇宙に行ったんだよ？ 普通目の前に広がる

宇宙を見ようとしなないかい？ 何故彼は振り向いたんだらう？」

「そつえば……」

「僕は思うんだ」

輝也は軽く天井を見上げた。眩しい蛍光灯の灯りに、薄く眼を細

める。

「人間が宇宙に行ったのは、『地球』が見たかったからじゃないか
つて……」

「……………」

透海が大きく眼を見開いた。輝也は視線を天井から彼女の顔に移す。

「学問は全て まあ、純粋な数学のことはよく知らないけれど、
ちよつと当てはまらないかもしれない。でも」

輝也の瞳は透海のとよく似ていた。夜空の色を染め付けたよ
うな瞳。その中には、確かに星が宿っている。

「大抵の学問は、『人間』を知るために発展してきたような気がする

るよ」

歴史、文学、社会学、生物学……。

「それと、『人間』である自分たちを取り巻く、世界のこと。広義の意味では『自分』のことといっても良さそうな気がするよね」

物理学、天文学、化学……。

「僕は知りたいんだね。『自分』のことを」

「でも」

透海が口を開いた。

「完全に知ってしまうことはまだ、できない……」

「……そう」

輝也は微笑んだ。

「僕らが最後まで理解できないのは、自分自身のことなのかかもしれない」

「それはしあわせなことかしら？ それとも不幸？」

透海の問題を聞いた輝也は、軽く首を左右に振った。

「僕には決められないよ。僕だって、『自分』を理解しているわけではないからね」

透海は膝に両肘をついて輝也を見つめた。唐突に不思議な感覚に襲われる。それはまるで、彼女が青い機体と一体化しているときの、あの懐かしさのようなものだった。彼女が守りたい、と強く願うもの。

透海はコーヒーにミルクを垂らした。黒い水面が白い、かげろうのようなもやに覆われていく。まるで自分の見る夢のようだ、と思った。

第三章 カゲロウハユラギ

1

週明けの月曜日、いつものように浅川はクラスの出欠を取っていた。

「吉川竜太」

「はい！」

「吉田佳代」

「はい」

「吉野和臣」

「はい」

ぴくり、と啓は小さく反応した。隣に座っている透海は、彼の端正な横顔に奇妙な表情が浮かんでいることに気付く。

「どうしたの？ 久遠君」

「……何でもないよ」

啓はにこりと微笑を浮かべたが、その赤い瞳はほとんど笑っていない。だが、透海はそれ以上問い詰めるつもりはなかった。

この風変わりな転校生が来て二週間。彼らは意外に親しくなっていた。そこそこ仲の良い友達はあるものの、大勢で騒ぐのが苦手な透海と、誰とでも仲良くするくせに深い付き合いをしようとはしない啓。周りから見れば、似たもの同士のようにも見えるのかもしれない。

「ならいいけど」

透海はあっさりとうつぶやき、黒板の方に視線を戻した。

そろそろ夏の期末テストの時期で、浅川はそのことについて話している。透海は興味なさそうに視線を動かし、窓の外に視線を投げた。梅雨の時期ではあるが、今日はよく晴れていた。青い空を雲がゆったりと流れ、高台にあるこの校舎からは、きらきらと光る海が

眺められる。そろそろ梅雨もあけるのかもしれない、と透海は思った。

「大体な、一年生の間の成績が三年間ずっと固定されるんだ。例外もなくはないが、今のうちからしっかり勉強しておかないと、二年になってから、三年になってから頑張り始めても追いつくことはできないぞ」

浅川の言葉を聞いてはいるし、きっとそうなのだろうな、と思う。だが、透海にはあまり関係のある話とは思えなかった。勉強は嫌いではない。知的好奇心を満たしてくれる作業としての勉強は、どちらかといえば好きな方だと思う。しかし、そこに別の要素が入り込んでくると、成績だとか、順位だとか、それに付随して、たくさん嫌なことが混じってくる。透海は好きで勉強しているだけなのに、何故か時にそれが人間関係の障害となる。透海には理解できない仕組みだ。成績など、その人間を表現する一つのパラメータではないのに。

中学の時、誰もが答案の端を折って点数を隠していた。そうする必要を感じなかった透海は折らないでいたが、それは間違いだった。ある時「見せびらかしているのだろう」と言われて彼女は驚き、そしてようやく気付いた。良い点数であればあるほど隠さなければならぬ。そういうものだったのだと。

「おい」

取り留めない思考に耽っていた透海は、啓の声によって唐突に現実に戻された。

「奇襲でもするつもりか？」

澄んだ、それでいて鋭い声。彼は肘を机について手のひらで頬を支えながら、じつとある一点をにらみつけていた。それは、吉野和臣の座る方角。

「……は？」

周囲から驚きに満ちた視線が注がれるのにも構わず、啓はさらに言葉を重ねた。

「ここに『ディープ・ブルー』の『コア』がいるのを知って干渉してきたのか？」

「お、おい」

浅川が焦ったように口を開閉させる。

「何言ってるんだ、久遠？」

啓はその赤い瞳を剣呑に細めた。口早に告げる。

「仮想ディレクトリ遮断、擬似人格一時停止、実存人格スリープモード起動要請。エマージェンシーコードA108。『アーク』に『コア』の待機・召集を！！」

「ちっ」

和臣が、まるでばね仕掛けの人形のように跳ね起きる。

瞬間、和臣と透海、そして啓を残して教室が消失した。暗く、そしてどこまで広がっているのかも分からないほど広い空間。床も天井も、判然としない。現実とは思えない、不可思議な空間だった。「な、何なのよ?! 久遠君、これどういうこと?!」

啓は透海の声も無視して言葉を結んだ。

「以上、『エーアイ』十三号、『ユダ』より、『ノア』への警告を終わる」

銀髪がふわりと揺れ、彼は顔を上げる。その唇には、紛れもない笑みが浮かんでいた。

2

その時、輝也は職員室にいた。ふと、耳鳴りに似た不快な音がして瞬きをする。

「え？」

目に入った光景が信じられず、再び瞬き。だが、それは変わるころとなかった。職員室ではない。ではどこかと言われると、輝也

には分からない。屋外ではないことは確かだろう。黒に近いくらいに暗い灰色の床は、奇妙な光沢を持っている。壁際には見たこともないものが、恐らくは機械が、ずらりと並んでいた。天井は高く、照明は見当たらないのに辺りは薄ぼんやりと明るかった。

一步踏み出そうとして、輝也は自分の足が僅かに床から浮かんでいることに気付いた。宙を蹴って、歩いている。

なんだ、これは。意味が分からない。

辺りにひとけはなく、耳が痛いほどの静寂に囲まれている。彼は自らの声で敢えてそれを破った。

「……何だっというわけ？」

予想はしていたが、やはり返答はない。

輝也は辺りを見回し、絶句した。

「これは……」

彼を取り巻く壁の一方は、外の光景を映しているようだった。そこにあるのは光さえ吞まれそうな、果てしない虚空。

輝也は呆気にとられながら、そちらに向かった。闇の中に、何か潜んでいる。メタリックな光沢を持つ巨大なそれは、赤と、白と、緑とに彩られていて。

「まさか」

つぶやく。

『最近、白昼夢を見るの』

透海の言葉を思い出し、輝也は息を呑んだ。夢、なのか。彼女の见ている夢を、自分も见ているのか。

「まさか　ね」

そう言いながらも、彼は彼女の話に出てきた「青い機体」を探す。だが、見当たらない。

「透海ちゃん……」

彼女の名を呼んで、輝也は汗に濡れた掌を握りしめた。

ここはどこだ。あれは何だ。

そして　僕は、誰だ。

教室が、担任が、同級生が消えてしまった　透海は啓に詰め寄る。

「ど、どういふことよ！　説明してよ！！」

「悪いけど、今その暇はないよ」

啓は視線を和臣に固定したまま、透海を庇うように一步前に進み出た。

「あとで、詳しく教えてあげる。……本当は、君自身が既に知っているはずのことなんだけどね」

「え？」

透海は戸惑った。　私が、一体何を知っているというのだろうか？

「随分と不完全な『コア』だな」

和臣は　和臣の姿をとった何者かは、そう言うのにやりと笑った。

「そのくせ、『コア』としては恐るべき能力を秘めている……全く厄介な」

「同感だよ」

啓はあっさりと頷いた。

「君の侵入経路は大体予想がついている。最初の戦闘のとき、『デイープ・ブルー』はある敵機を大破させた。その破片に乗って、『コア』への侵入プログラムである君がやってきたのだろう？」

「ちょ、ちよつと待って。『デイープ・ブルー』って」

初めて啓に会ったとき、確か彼はその言葉を彼女に向かって口にした。それこそが、夢の始まり。

そして、啓は「戦闘」「敵機」と言った。それは、もしかして彼女の見ている夢の中のできごとをさしているのではないか。

透海は茫然とつぶやく。

「どうして、久遠君が知ってるの……？」

「どうしてって？」

啓は少しだけ振り向いた。

「君が時折見ている『夢』。あれはね、『夢』なんかじゃないんだよ」

透海は立ちすくんだ。あれが、「夢」ではない？ それなら自分は一体何と、どこで戦っているのだ？ そして、そういう啓は一体何者なのだ……？

「さて。手間取らないうちに、その『コア』を破壊させてもらおう。和臣は一步前に進み出る。それが自分を殺すということなのだ」と透海は察して、慌てて一步あとずさった。

「あまり僕から離れないで」
啓は透海に告げる。

「君は擬似人格じゃないんだから、リセットして再起動というわけにはいかないんだ」

「あ、あなた、何者なの？」

今更の疑問を透海は口に出す。

「あなたは、一体……」

「僕は、君を守る」

啓はもう一度振り向き、彼女を安心させるように穏やかに微笑んだ。赤い瞳に至近距離で見つめられ、透海は思わず息を呑む。だが、彼の薄い唇が紡いだのはその微笑に似合わぬ剣呑な台詞だった。

「君が今死ぬと、世界が滅びてしまうから」

「……は？」

透海は現実には引き戻され、間の抜けた声を上げた。

啓は彼女の声には構わず、視線を和臣の方へと向ける。和臣は赤い舌でちろりと唇を舐めあげた。

「戦闘用でもない『Eーアイ』が、俺に勝てると思ってるのか？」
「……僕はちよっと特殊性能だね」

啓は軽く両足を左右に開いた。

「『アーティフィシャル・インテリジェンス・ナンバー・サーティーン』 伊達に裏切り者の『ユダ』の名を冠しているわけではない」
「では、やってみるか？」
「そうしよう」
啓は、不敵に微笑んだ。

4

「フレイア・ボトム」、「ポップ・アイス」、「トール・グラス」の三機は緊急出動した。敵機が襲来してきたわけではないので、機内待機である。

『全く、人遣いの荒い』

「そうも言つてられない」

「フレイア・ボトム」はつぶやいた。

「ここで「ディープ・ブルー」がやられると、かなりまずいことになる」

『まずいどころじゃない』

「フレイア・ボトム」とともに緊急待機している「エーアイ」7

号 水崎京が告げた。

『本当に世界が滅びるかもしれないわ』

『……ちっ』

「ポップ・アイス」が舌打ちをする。

『何故』

「トール・グラス」がぼつりとつぶやいた。

『何故、「ディープ・ブルー」はそこまで特別なんだろう』

「『トール・グラス』？」

『我々は既に「リニア・レイ」を失いました。これ以上、「アーク」を一機たりとも失うわけにはいかないということです』

己の「エーアイ」の回答に、「トール・グラス」は声を荒げた。
『嘘だね。いや、嘘はついていないかもしれないが、真実そのものじゃないだろう』

『……確かにな』
のろのろと「ポップ・アイス」が言った。

『「デープ・ブルー」は明らかに特別だ。機体が特別なのか「コア」が特別なのかは知らないが……何かがおかしい』

『それは』

「ここで「エーアイ」たちを責めても仕方がない」

「フレリア・ボトム」は口を挟んだ。

「彼らには答えられないこともある。あくまで彼らは『ノア』に直接制御されている存在なのだから、制約は大きい」

『そんなこと言ったって……』

「むしろ」

「フレリア・ボトム」は「ポップ・アイス」を遮るように言葉を継いだ。

「『エーアイ』が話せない、話せないという事実こそ、ヒントがあると考えるべきだ」

先ほどから「エーアイ」は沈黙を守っている。

『それはつまり……？』

「トール・グラス」が聞き返す。「フレリア・ボトム」は言葉を変えて言い直した。

「我々の敵が何者であるか。『エーアイ』は決して教えてはくれない。それは、『ノア』が我々に知られたくないと思っっているからだろう。同じように、『デープ・ブルー』が何故特別なのかも知られたくはないんだ」

『ふん……』

「少なくとも、二つ理由が考えられると思う」

「フレリア・ボトム」は淡々と話し続けた。

「一つ、知られると我々の戦意が失われると『ノア』が判断した場

合」

実は、敵の正体が一切知らされない理由はそこにあるのではないか、と「フレリア・ボトム」 十河美鶴は考えていた。だからといって、何かを具体的に類推できているというわけではない。

『なるほどな』

「もう一つは、」

意味がないことだと知っていながら声を低める。

「それが『ノア』にとっての弱点である場合、だ」

5

啓は不敵な笑みを浮かべたまま軽く和臣に左手を掲げた。

「さて、そろそろはじめさせてもらうよ。エマーゼンシー・モードを長く続けると、システムに過負荷が掛かるからね」

「知ったことか」

和臣は吐き捨てた。瞳が濃い緑色に光り、透海を強く睨みつける。

彼女はぶるりと震えた。

「『アイソレーション』」

啓はそう呟き、透海の腕をぐつと右手で掴む。 そういえば、

啓は左利きだった。シャーペンも左手で使っていたような気がする。

透海は現実離れた「現実」の中、ぼんやりとそんなことを思っていた。

彼の左手の中に突然光の束が生まれ、やがてそれは収束して銃剣のような形をとる。気付けば、和臣も同じようなものを手にしていた。まるでSF映画の世界だ。信じられない。信じられないけれど、これは夢ではないのだ。夢だったならば、どんなにいいだろう……。

「……やッ！」

先に動いたのは和臣だった。滑るような動きで啓に突きかかる。

だが、啓の動きは彼よりも早かった。透海を腕の中に庇うようにし

ながら体を一回転させて和臣を空振りさせ、その背中を袈裟切りする。

「ぎッ……」

和臣はたたらを踏んだが、そのざっくり裂けた背中からは血の一滴も流れなかった。ぱっくりと空いた傷口の奥には、底なしの闇が詰まっている。

「え……?!」

透海のひび割れた声になど二人は頓着せず、目にも止まらない攻防を続けている。

「お前……何者だ？」

和臣は眉を顰め、啓を睨みつけた。激しく動きながらも、息のひとつも上がっていない。傷の痛みも感じていないようだった。

「戦闘用の『エアアイ』ではないお前が……迎撃システム以上の攻撃を操るなど」

「おかしいと思うのかい？」

啓は柔らかに微笑む。

「それはね、僕の名前にヒントがあるんだよ」

「名前……？」

「そう」

啓は不意に加速して踏み込み、和臣の手から「光」を打ち払った。
「……ちっ」

慌てて和臣は啓の間合いから離れる。そうして新たに「光」を手に形作った。啓は穏やかに名乗る。

「僕は十三番目の使徒、『ユダ』の名を冠している」

「『ユダ』？」

透海がつぶやくと、啓は和臣に視線を固定したままこくりと頷いた。

「裏切りの、使徒……」

「そういうこと」

啓は戦闘中とは思えないほどの愛想良さで、淡々と物語る。

「『ノア』による僕への支配系統は不完全だ。だから、僕は『ノア』のシステムの中で『自我』というものを持ち合わせている、唯一の『エーアイ』なんだよ」

「何だと……？」

和臣は理解しがたいといったように目を細めた。

「『ノア』がそんな存在を許しているのか?!」

「というよりも、『ノア』の製作者が意図的にそういう風にプログ
ラムングしたんだね」

明らかに啓は優勢に立っていた。和臣は徐々に防戦一方になっている。

「その特別な『エーアイ』が補佐に付く、『ディープ・ブルー』……」

不利な状況にも関わらず、和臣は笑みに唇を歪めていた。気味が悪い。透海の足は細かく震えていた。

「やはり生かしておくわけにはいかないな!」

「?!」

かつ、と辺りに光が満ち、透海は反射的に眼をつぶる。

「……しまった!」

らしくない啓の焦った声が聞こえ、やがて 透海は彼の手の感触が腕から消えたことに気付いた。

やがて光が収まって そこには和臣と透海の二人だけがあった。

久遠啓の姿は、どこにも見当たらない。透海の体中の産毛がぞわり、と逆立った。

「ちょ、ちよつと! 久遠君!!」

声を張り上げて彼の名を叫ぶが、返事はない。和臣はにたにたと笑っていた。

「脆弱な仮設ディレクトリだが、あの『エーアイ』がここに入ってくるまでには時間がかかる……」

そうして一歩、透海の方に踏み出した。

「お前を消してしまうのに十分な、時間が」

「……………!!」

透海はぞつと顔を青ざめさせる。和臣がさらに一步近付いた。そして、動く!

「きゃっ!」

透海は間一髪で和臣の繰り出した攻撃を避けた。

「ち」

舌打ちをするが、彼の表情には余裕がある。

「逃げてても無駄だぞ」

「そんなこと言っちゃって」

透海は身を翻して背後に駆け出す。

「死にたくないもの! 逃げるわよ!」

しかも、こんな訳のわからない状態で消されてしまうなんて、真つ平だ。

「結局久遠君は何も説明してくれなかったし……………!!」

「君を守る」なんてくさい台詞を口にしておきながら、一体彼はどこへ行ってしまったのだろうか。

久遠啓 それは彼の本当の名前ではないらしい。「アーティフィシャル・インテリジェンス・サーティーン」。「エアアイ」。「ユダ」。透海をサポートする為の人工智能だと言っていたか。何の事だか、良く分からない。「デープ・ブルー」。夢に見るあの青い機体は、どうやらそういう名前らしい。夢? いや、あれは夢じゃないと啓は言っていた。あれが現実なのだとしたら、普段の生活は一体何なのか……………?

「いい加減にしろ」

「や……………!!」

透海は凍りついて足を止めた。背を向けて逃げていたはずなのに、いつの間にか和臣が真正面に立っている。

「さて」

和臣は手にした武器を振り翳した。足がすくんで動けない。もう、

声すら出なかった。ただぎゅっと、目をつぶる。

助けて……久遠君！ 輝也さん！

「透海ちゃん！！」

「……………?!」

聞き慣れた声と共に、透海は何かを抱きかかえられていた。おそるおそる目を開けた彼女は驚愕し、声をあげる。

「か、輝也さん?!」

「何?!」

輝也は透海を両腕で庇うようにしながら、怒号を上げた和臣を見遣って眉を顰めた。

「君、吉野君……じゃなかったっけ？」

「そ、そうなんだけど」

彼に抱えられたまま透海が答え、それを聞いた輝也は首を傾げる。「どうしてクラスメイトに襲われているんだい？ あと、ここってどこ?」

「そんなの私が聞きたいわよ!」

「何故……何故仮設ディレクトリに直接……」

和臣はぶつぶつ言いながらも輝也に武器を向ける。輝也はその先端にじつと視線を当てた。一言、つぶやく。

「消える」

「な……………!!」

透海のみならず、和臣までもが驚愕の表情を浮かべる。和臣の手にしていた武器が、彼の右腕ごと忽然と掻き消えてしまった。断面からは相変わらず血も滴らず、良く見るとそこには細かな数式のようなものがびっしりと並んでいた。

「お前、何者だ?!」

和臣には痛覚はないようだったが喪失感はあるようで、ふらつきながら青ざめた顔でじつと輝也をにらみつけた。

「……………」
輝也は返事をしない。というよりも、自分でも説明できなかった。気が付いたら目の前で透海が襲われていて、慌てて彼女を攫った、それだけだ。何故、和臣の持つ武器を消すことができたのかもわからない。ただ、できるような気がした。そうとしか言えない。

「輝也……さん？」

透海の顔に視線を向けると、彼女は戸惑ってはいるものの、ほっとしたように輝也を見つめていた。その視線に、輝也の心もまた落ち着いていく。

「大丈夫かい？ 僕にも全く事情が飲み込めていないんだけど……」
「それはあとでご説明しましょう。北原さんにもそう約束していたことでもあるし」

澄んだ声が和臣と輝也の間に割って入った。光り輝く刀身のようなものが、和臣をざっくりと切り裂く。その間隙から姿を現したのは、やはり久遠啓だった。

「あ……」

呆気なく和臣はばらばらと崩れていく。虚空に数式が溶け、やがて跡形もなく消えていった。

「やれやれ、『吉野和臣』をバックアップから再構成してもらわなきゃな」

啓はつぶやきながら、くるりと彼らを振り向いた。

「時任先生、はじめまして。どうやってここに来られたのかは知りませんが……ともあれ無事で何よりです」

「うん、まあ、そうだね」

輝也は目を白黒させながらうなずいた。

「北原さんも、無事で何より」

にっこりと笑って啓は言う。それが、透海の癪に障った。

「……………」

輝也の腕から離れ、啓を睨みつけて大声を上げる。

「いい加減に説明して……」

第四章 ユラギハメザメ

1

ゆつくりと、日が暮れていく。窓から差し込む日差しはどんどん深く淡くなり、影は長くなる一方だ。化学準備室の中には輝也のいれた香ばしいコーヒーの匂いが漂い、合計三つのピーカーが湯気を湛えながら黒い水面に天井を映していた。

夕陽に赤く染まつた銀髪を揺らし、啓が口を開いた。

「何から話せばいいのかな？」

啓の正面には輝也、隣りには透海が座っている。

あの後、気が付くと彼らは異変が起こる前と全く同じ状態に戻っていた。吉野和臣さえもが普通に教室に居て、透海はひどく驚いたものだ。結局何がどうなっているのか。昼休みも透海は啓を連れて化学準備室に来たのだが、部屋の主の輝也が不在で鍵がかかっていたため、結局放課後まで待たざるを得なかったのである。

「洗いざらい、吐いて」

きつぱりと透海に言い切られ、啓はため息をついた。

「君、教室でのキャラクタと大分違うんだね。こっちが素？」

「残念ながら、その通りよ」

少し大人びた、知的でクールな少女。透海のクラスでのイメージはそのようなところだ。だが、今の彼女は違う。感情を露わに自分に迫る彼女は、年齢相応で可愛い。啓はそう思った。そして、素直に口にする。

「残念じゃないよ。生き生きしていて、いいと思う」

「話を逸らさないで」

透海は彼を遮った。

「とにかく、説明してよ」

「別に、僕も全てを知っているわけじゃないんだけどな」

「えっと」

輝也は軽く頭をかきながら口を開いた。

「少なくとも僕らより君の持っている情報量は圧倒的に多いはずだ。君の判断で、順を追って説明してもらえるとありがたいな」

「……おっしゃる通りですね」

啓の白い指がビーカーを取り上げ、その中身を軽く啜った。ふう、と息をついて口を開く。

「この世界は、夢なんだ」

「……は？」

透海はきよんとした。

「ちよっと待って。夢って、どういことなの？」

啓は軽く両手を広げてみせた。

「太陽系第三惑星地球。それは既に廃棄された星だ」

「えっと……じゃあ、ここは？」

透海が地面を指差す。啓は唇の端を持ち上げた。

「だから、夢。正確にいうと 『ノア』の作り上げた『仮想世界』
さ」

ヴァーチャル・リアリティ 57

「『ノア』って……ノアの方舟の、あれ？」

「そう」

啓はうなずく。

「かつて」

吟遊詩人が何か歌を口ずさむような調子で、彼は言葉を紡いだ。

「地球は滅びてしまった」

「……は？」

透海は眉を顰める。輝也は腕組みをしたまま、口を挟まない。

「何を言ってるの？」

「事実だよ。歴史さ」

「地球が滅びた……って、でも私たちは」

「地球に生きている。そう思っているよね」

「……つまり、そうではないと啓は言いたいのだろう。このひと

頭大丈夫かしら。透海は不安になって輝也の横顔を見るが、彼は真面目な表情で啓の言葉に聞き入っているようだった。

「『ノア』っていうのは、人類最後の砦なんだよ。滅びに瀕した人類がその文明の粋を集めて作った方舟」

「……つまり」

透海は彼の言葉を理解しようと努めた。

「地球から脱出するために作られた、宇宙船つてところ？」

「そういうこと。正しくはこの船を制御するメイン・システムが『ノア』と名付けられたんだ」

「で、貴方は一体誰？」

改めて、透海は尋ねる。「『エイアイ』だの『ユダ』だの、呼び名が多すぎて良く分からない。」

「僕は」

啓はその掌を自分の胸に押し当てた。

「僕は『ノア』の中の人工知能、つまり『エイアイ』。そのほかのいろんな呼び名は、まあ気にしなくていい」

輝也が口を開いた。

「確認したいんだけど、僕たちが今生きている世界は『ノア』というコンピュータが作り上げている『夢』だって、君はそう言いたいんだね？」

「そう。その通りです」

啓は満足げに頷いてみせる。輝也は眩暈を感じたかのように、手を軽く額に当てた。ひんやりとした感覚が、これは現実なのだと思いに思い知らせる。彼は輝也のそんな様子には頓着せず、淡々と話を進めた。

「当時、地球上にいた人類はかろうじて数億　彼らのうち一億人のデータが『ノア』に入力され、数多の受精卵が凍結され積み込まれました」

「え？」

「その一億人は、全て寿命を全うして既に『ノア』の内部世界から

は消去されています。その代わり、彼らのデータは受精卵　いわゆる実存人格の生活を補佐するための擬似人格を構成するための基本パターンとして使用されているんですよ」

「……もう分からなくなつた。透海ちゃんは？」

「全然わからない」

荒唐無稽すぎる　それでもとりあえず最後まで聞いてみよう。

他に、今日起こつたできごとを説明できる者はいないのだ。

啓は困つたような表情をした。

「ええと、どう言つたらいいのかな……この船には何十億という凍結受精卵が眠らされている。凍結している意味は分かりますか？」

輝也はあてずっぽうに、それでもすらすらと答えてみせた。

「細胞において生体活動を担う酵素タンパクの活性を低下させることにより、相対的に受精卵に流れる時間を遅くする」

「そう、その通りです」

輝也にあててもらえたのがよほど嬉しかったのか、笑みを浮かべて彼は頷いた。

「それにこの船は大体光速の九十七パーセントくらいの速度で動いているから、ただでさえ内部時間の動きは遅い」

「それで？　地球のように人間の生息に適した惑星を探しながら旅をしている、ということ？」

「それに近い。安っぽいSFみたいだと思つたかもしれないけれど、事実なんだから仕方ないんです」

啓はそう言つて肩をすくめた。透海はぼかんと口を開けていた。無理もない。真実を知らないものにとつて、現実はあまりにも荒唐無稽だ。

「受精卵は凍結されているんだけど……それでも、彼らは『夢』を見ている。細胞表面に微弱な電流が流れていて、それを『ノア』が拾い上げ、『仮想現実』に反映するんだ。彼らの人格は夢の中でゆっくりと一生を過ごしているというわけ」

「夢……？」

「凍結して時間の流れを遅くらせてみても、やはり莫大な時間が流れているわけだね……どちらにせよ、夢を見ることのできない受精卵は徐々に死んでいく。何故かは僕には分からないけれど、同じ保管条件にあっても生存できなくなっていくんだそうだよ。あと、夢の中で死んでしまった受精卵もやはり死を迎えるらしい」

「死んだ卵はどうするの？」

「捨てる」

啓はきっぱりと言った。

「使えないものを積み込んでおく余裕はないから」

「……………」

透海は肩をすくめてうつむいた。

「今までに死んでしまった受精卵が最近二十億を越えたから……残りあと二十億つてところかな。これがゼロになったらこの旅もおしまい。人類の本当の滅亡つてわけだ」

穏やかならぬことを言いながら、啓は微笑んでいる。

「夢を見ている受精卵の数は、今ちょうど五億くらい」

「五億？」

鸚鵡返しに呟いた輝也ははっと顔を上げた。

「世界人口は今、六十億以上いるはずだけど……………」

「そうですね」

啓は頷く。

「つまり、五十五億人は受精卵の夢 すなわち実存人格じゃない訳です。『ノア』がかって入力されたデータや、過去にあった実存人格を元にアレンジした、擬似人格つて訳」

「……………」

「大丈夫」

啓は透海の肩にぼん、と手を置いた。この感触もきつと「ノア」が作り出したものなのだろう ぼんやりとそう考えたあと、透海は愕然とした。いつの間にか、彼の言うことを信じているではないか。信じるまでには至らなくても、そういうこともあるのかもしれない

ないと　現実の持つ可能性の一つとして考えてしまっている。彼の言葉を否定する要素が何もない。いや、彼女は本能的に彼の話を受け入れているのだった。彼女の存在が、そもそもそのように作られているのかもしれない。

「『アーク』の『コア』は皆実存人格だ。つまり、君も受精卵の見える夢の産物ってわけだよ」

「『アーク』？　『コア』？」

啓は輝也に向き直った。

「彼女は『アーク』に乗って敵と戦っていることを『夢』だと認識していたようですけど」

啓は微笑む。

「それはちょうど逆だったわけですね」

「あ……」

彼女の語っていた青く煌く煌く機体は「アーク」と呼ばれるものらしい。彼女はその機体の「コア」　パイロットのようなものだろうか？　彼女はそれを操り敵を殲滅している。……敵？

「敵って何なんだい？　それに、その戦闘に破れたら彼女はどんなる？」

「敵については」

啓は首を横に振った。

「言えません。それと、もし負けたら、の話だけど」

透海の顔を啓の赤い眼差しが射る。

「君が　君たちが負ければ、『ノア』は消滅する。この夢の世界ごと、ね」

「……………」

透海は絶句した。

輝也もまた衝撃を受けたが、ふと新たな疑問がわいた。　透海

が「アーク」の「コア」だというなら、一体自分は何なのだろうか。何故、彼女を助けることができたのか。自分には、別に何か特別なものがあるわけではない。空を飛べるわけでもないし瞬間移動がで

きるわけもない。死んだ人間を生き返らせることができるというのなら それは両親が亡くなった時にとっくにやっっているだろう。透海のように「アーク」の「コア」として「敵」と戦っているわけでもない。それなのに、彼は透海を助けることができた。不思議だった。一体自分は何者なのだろう。

「……………というわけ。分かってもらえた？」

「……………」

透海は呆気にとられたように目を見開いて、絶句していた。無理もない。視線があつと、透海は輝也に尋ねてきた。

「輝也さんはこの話、信じる？」

「幽霊と同じ」

「……………そうね」

透海は疲れた表情で肩をすくめた。信じるか信じないかではない。事実の一つで、それは変えようがない。そして、我々には事実がいずれなのかを判断しようがない。

「じゃあ、別の質問」

透海はようやく飲む温度になったコーヒーに口をつけた。

「……………輝也さんは、この話を事実だと思っ？」

「……………」

輝也は困ったように首を傾げる。啓はそんな彼を面白がるような表情で見遣った。その視線に気付き、輝也が啓に視線を投げる。

「……………アンフェアだね」

「……………どういうこと？」

「僕は夢の住人だって言うんだろう？ だったら確かめようがないじゃないか」

「少なくとも、北原さんには確かめられますよ」

啓が口を挟んだ。

「北原さんが『ディーブ・ブルー』の『コア』として覚醒しているときに見ている光景。それは現実ですから」

「それが現実だって、どうして言えるのよ」

「僕がそうだと知っているからさ」

啓は少し謎めいた微笑を浮かべた。

「別に信じてもらう必要なんてこれっぽっちもない。ただ……」
赤い瞳が透海をじっと見つめる。

「君は少し変わった『コア』なんだ。だからこれからも」

「これからも？」

「さっきみたいなのに狙われるかもね？」

「……やだ」

啓は冗談のつもりだったのかもしれないが、透海は心底嫌そうにつぶやいた。

「今回は僕も油断していた。次からはもっと気を付けるよ」

「……それが、あなたの仕事だから？」

「……」

その通りだ。その通りなのだが　なぜか、啓は頷きたくなかった。奇妙な感情。

「そついえば」

輝也は啓に尋ねた。

「吉野君だけど、さっき普通に見かけたよ。彼は一体どうなっていたんだい？」

「彼ですか」

啓は軽く左手をひらひらと胸の前に翳して振った。特に意味のある行動ではないだろう。

「彼は擬似人格です。それも、『ノア』のメモリのかなり辺縁にある。だから、外部から侵入したプログラムに感染しやすかったんでしょう。『ディープ・ブルー』が破壊した『敵』の破片が感染源と考えられています」

「……じゃあ」

透海が顔を上げた。

「これって、私の自業自得ってこと?!」

「いや」

啓は苦笑した。

「最初の戦闘のときだったからね。あの時君はちゃんと覚醒しては
いなかったよ」

輝也が片眉を跳ね上げた。

「さつきも言っていたけど、透海ちゃんが特別な『コア』だって…
…どうということなんだい？」

啓が輝也に向き直る。

「ふつう、『アーク』の『コア』は適性の高いものから『ノア』が
選別して任命していきます。たいていはハイティーンの少年少女で
すね。ただ『ディープ・ブルー』はちよつとくせのある機体で、今
までなかなか相性の合う『コア』が見つからなかった。それに最近
まで『アーク』は四機あったから、十分戦えていたし…でもこの
間一機やられてしまって、僕が『ノア』に何とか選り出してもらっ
た『ディープ・ブルー』向きの『コア』が、北原さんだったんです
よ。それなのに……」

「それなのに？」

透海が先を促す。啓はうつむき、彼女を見ていなかった。

「『ノア』は、何故か北原さんを『コア』に据えるのを嫌がった…
…。僕が無理やり北原さんのディレクトリに干渉して、ようやく下
位レベルの意識が機体に繋がったくらいだったしね。それでも『ノ
ア』のサポートが足りないから、北原さんは『コア』としての自分
を自覚できなかった」

「『ノア』が嫌がる？ それって……」

輝也の言葉を遮って、啓は声をやや大きくした。

「今まで言わなかったけど、一番不自然なのは貴方の存在なんです
よ。時任先生」

「え？」

輝也だけではない、透海も驚いて声をあげた。啓は真顔でじつと
彼を見つめる。

「擬似人格ではない。実存人格かというところも良く分からない。

『ノア』に問い合わせても回答を拒否される……」
赤い眼光が鋭さを増した。
「貴方は一体、何者なんですか……？」

2

駅前の喫茶店で、ふたりの青年が向かいあっていた。ひとりには十河美鶴、もうひとり髪を明るい色に染めた、少し派手な印象の男だった。名前を柴田浩哉しばたひろ。美鶴よりひとつ年下で現在はコンビニでアルバイトをしている。

「ここへ来て急に慌しくなったな」

「……っすね」

美鶴はコーヒーをすすり、浩哉はチョコレートパフェをスプーンでひとすくいした。外見も、服装も、雰囲気も、何もかも違っているふたりには年代以外の共通点などないように見えるが、実はそうではなかった。美鶴は「フレリア・ボトム」の、浩哉は「ポップ・アイス」の、それぞれ「コア」なのである。「ツール・グラス」の「コア」は女性らしいが、会ったことはない。日常生活に「アーク」の「コア」としての自分を持ち込みたくない、その気持ちは彼らにも良く分かる。

彼らが知り合ったのもたまたま同じ駅にいたときに二人そろって戦闘に呼ばれて気を失ったせいだ。わずか一、二秒の間のことだったのだが、お互いに何となく気付いてしまったのだった。以来、彼らは時々こうして会っている。非現実的な現実と否応なく戦わざるを得ない日々の中、こうして戦友と話を交わすことでほっと救われたような気分になるのも、矛盾しているようではあるが事実でもあった。

特に「ディープ・ブルー」が目覚めて以降は、漠然とした不安が彼らを包んでいた。「リニア・レイ」が健在だった頃にはなかった

感覚 胸騒ぎ、とでもいえばいいのだろうか。

美鶴は「エーアイ」、京から聞いた最近の情報をぽつりぽつりと語った。「デープ・ブルー」の「コア」が「ノア」に侵入した「プログラム」によって襲撃されたこと、それをどうにか撃退したということ。

「『エーアイ』の救出が間に合った、ってことっすか」

「いや……」

浩哉に尋ねられ、美鶴が言葉を濁した。

「それがそうでもないらしくて」

「……どうということっすか？」

美鶴は困った表情でコーヒートを再びすすった。

「『コア』のいところが、助けたんだそうだ」

「イトコ？」

「そう」

浩哉は不可解そうに眉を寄せた。

「何者っすか？ それ」

「それが、『エーアイ』たちの間でも一番の謎なんだって」

「『エーアイ』たちにも探れないことなんてあるんだ」

浩哉の「エーアイ」は、彼のバイト先に時々現れる運送業の男だ。「エーアイ」という言葉からはまるでかけ離れた健康的な肉体を持つ男で、兄貴分という言葉がぴったりだ。「コア」に選ばれた当初の浩哉は強く反発したが、彼の説得の結果受け入れた。だが、最近浩哉は彼を避けている。一時は彼を頼れる戦友のように思ったこともあった。だが、彼らは所詮「エーアイ」なのだ。きっと、彼らは自分たちのことなど代わりのきく部品のようにはしか思っていないに違いない。自分だけが慕っても、かえって寂しいではないか。

ふと、浩哉はつぶやいた。

「俺たちって、何と戦っているんすかね」

「……………」

「『エーアイ』たちは答えられない……答えちゃいけないだけの理

由があるんだろうって、十河さんは言いましたよね」

「……………ああ」

「俺たちはもしかしてとんでもなく騙されているのかもしれない」

浩哉は強い瞳で美鶴を見た。

「俺、時々そう思うんすよ」

「……………」

「これは嘘だらけの世界なんです　夢や幻で作られた、嘘っぱちの世界。こんな風にしていったって、所詮はゼロとイチでできているってわけでしょう？」

「『ノア』がデジタルだとすれば、そうだね」

「なんだか、馬鹿らしくなるんすよね　」

浩哉はため息をつき、胸ポケットから煙草を取り出した。煙草を吸わない美鶴は軽く眉を顰めたが、口に出しては何も言わない。慣れた手つきで空気を抜き、浩哉はその薄い唇に煙草を挟み込んで火をつけた。

「いっそ、なくなってしまったほうがいいのかもしれないって

俺たち人類は地球と心中しておくべきだったんじゃないかって」

「君がそう思うのは勝手だけど」

美鶴ははつきりと言った。

「戦うのが嫌だと思つようになつたら、さつさと『エアィ』にそう言つてコアを交代してもらつべきだ。君の個人的な感傷で僕は死にたくない」

「死……………？」

浩哉は綻んだ唇からふわ、と煙を吐いた。

「戦闘中に死んだら、どんな感じなんすかね」

「……………」

浩哉は痛々しい笑みを見せる。

「……………好きな人がもし擬似人格だったらって思つと、辛くないですか」

「……………」

美鶴は黙り込んだ。　　そういえば、浩哉は「エーアイ」とあまりコンタクトを取っていないと言っていた。美鶴は案外とあっさりこの現実を受け入れたのだが、浩哉はそうでないのかもしれない。「そうしたら、もし彼女が死んでもまた同じデータを元に、誰か他の人間が作られるのかって」

「……………」
「親父も、お袋も……………みんなみんな、偽物なのかな……………」

美鶴は浩哉を遮った。

「人格が実存か擬似か、そんなに重要なことかな？　どちらであれ、君を想う家族や恋人の気持ちは本物だろう？」

「どうして」

浩哉は縋るような目つきで美鶴を見る。美鶴はふ、と微笑んだ。

「何が本物で何が偽物かなんて、誰にもわからない」

「……………」

「『ノア』がせっかくわからないようにしてくれてるんじゃないか。あまり気にしない方がいいよ。どちらだって、たいして僕らに影響はないんだし」

「……………」

「だから　敵が何だっついていい、僕は戦う。この世界が、僕には必要だから」

「……………」

しばらく黙っていた浩哉はやがてふう……………と息をついた。

「そう　ですかね」

眼を上げて弱く微笑む。

「まあ、俺もまだ、生きていたいです」

「そりゃそうだろう」

美鶴も笑った。

「まだ若いんだから」

「十河さん、一歳しか変わらないのにそんなおっさんくさいこと言わないで下さいよ」

朗らかに笑いながらも、浩哉の胸には得体の知れない悲しみがこみ上げてきて、彼らの他には誰も知らない真実を背負う背中が、小さく震えた。

3

貴方は一体、何者なんですか。

啓の問いが頭をめぐる。輝也はふう、とため息をついてシートベルトを締めた。結局あの問いには答えられぬまま、彼は帰宅しようとしている。エンジンを入れようとキーを回しかけた姿勢のままぼうつとハンドルの辺りを眺めていると、軽くウィンドウを叩く音がした。

驚いて振り向くと、そこには透海がいる。辺りを気にするように見回しながら、「乗せて」と唇の動きで告げた。輝也も辺りを見回したが、この教職員専用駐車場に誰かが来る気配はない。頷いて口ツクを外すと、滑り込むように透海が乗り込んできた。

「よいしょつと」

スカートがドアに挟まらないように手で整え、鞆を胸の前に抱える。輝也はそんな彼女を見ながら、ぼんやりとつぶやいた。

「こつというの、良くないなあ。公私混同だよ」

「私気分が悪くなった、ってことにしたらどうかしら」

悪戯っ子のような表情で透海は微笑む。

「偶然通りかかった『時任先生』が、親切にも私の家まで送ってくれるの」

「……シナリオライターだね、『北原君』は」

冗談めかして笑ったあと、不意に輝也は真顔になった。

「どうする？ このまま真っ直ぐ帰ろうか？」

「どちらでもいい、けど……」

笑みを消し、透海は呟いた。

「話したいな。輝也さんと」

「……………」

輝也は無言で車を発進させる。彼女が自分と同じ気持ちでいたことが、今は何より嬉しかった。

しばらく運転を続けた後、やがて輝也は車を止めた。それは市を一望できる山の上。市街地と山が密接しているこの街であるからこそ存在する場所だ。日が暮れきってしまうと美しい夜景が見られるのだが、今はまだ夕焼け色に染まる街並みが見下ろせるだけ。それでも、とても綺麗だった。

「デートスポット？」

ぼつりとつぶやいて、透海が小さく吹き出した。輝也は苦笑を浮かべながら訂正する。

「それはもうちよつと前の展望台。ここは少し行き過ぎてるから周りに何も無いけど、意外と穴場なんだ」

「ふうん……。輝也さん、ここでデートしたことあるの？」

興味津々で尋ねる透海に、輝也は首を横に振った。

「いや。浅川からの受け売り」

「そうなんだ？」

「うん。学生時代からあいつは良くここら辺まで足を伸ばしていたみたいだ」

「ふうん……………」

透海は目を細めて茜色の街並みを見つめる。

「……………」

輝也は黙り、その横顔を眺めた。透海の唇が長く、ゆっくりと息を吐き出す。

「……………ま、いいか」

「え？」

輝也は聞き返した。透海は髪を軽くかき上げながら、

「気にしないことにしたの」

と微笑んだ。

「私の生活はこの世界にあって、それ以外は関係ないんだから」
「……………」

「デープ・ブルー」としての自分については考えない。そういうことだろうか。珍しく、輝也は透海の心をはかりかねていた。「久遠君は、私が負けたら世界が滅びるって言ってたけど」

「うん」

「そんなこと言われてもって感じよね」
「……………」

強がる瞳が揺れている。

ああ、信じてしまったんだな。輝也はそう思った。彼女は啓の言ったことを信じている。この世界は「ノア」というコンピュータによって制御された、「ヴァーチャル・リアリティ」なのだ。透海は既に信じている。

彼自身は結論を急ぐ必要もないので考えもまとめず保留にしているのだが、実際に敵と戦う「アーク」の「コア」であると言われていた透海は、そう暢気にも構えていられないのだろう。彼女の見る「夢」の存在もある。

それでも、普段の慎重で疑い深い彼女にしては妙にあっさり信じてしまったような気もする。輝也は視線で彼女の表情を探った。透海はそんな彼に気づいたのか、苦笑に近いような笑みを浮かべる。「そんなに心配しなくていいわよ。むしろ輝也さんこそ何者？ うちの方が不思議」

「さあ。何者だろうねえ」
輝也は笑った。

「別に何者だっていいよ。あまり実生活に支障はないから」
「そうね」

くすつと笑い、そしてすぐ真顔に戻る。そして、透海の視線が不意に宙を彷徨った。細められた瞳に星のようなきらめきが躍った
よような気もする。

「透海ちゃん？ ちょっと……」
ぐらりと傾いた体を抱きとめる。

「透海ちゃん！」
慌てて顔を覗きこむと、彼女は眼を閉じていた。まるで眠っているように……。

「……………」
戦いに、呼ばれたのか。輝也は厳しい表情になり彼女をそつとシートに横たえる。赤い夕陽が、透海の白い顔にまだら模様を落としていた。

5

まるで、液体の中に横たえられているようだった。それでいて手足はまるきり自由に動かせるというわけではない。そう、やや固いゲルに埋もれているといった表現が正しいかもしれない。そもそも今自分がどういいう状況なのか、首を起こすことができないせいで良くわからない。

「……………なんなのよ、これ」
つぶやくと同時に、視界が開ける。頭上に広がる、ドーム状の空間。ガラス張りのように透けた天井には、暗黒の空が広がっている。ところどころに光の粒が転がっているのは、星屑だろうか。

「やあ」
視線を動かすと、そこには啓がいた。水面の上数センチのところを、立ったまま浮遊しているように見える。格好はいつもどおりの制服だった。

「久遠……君」
つぶやくと、彼はにっこりと笑って彼女の頭上に跪いた。赤い瞳が彼女を覗き込む。

「ようやく意識をこちらに持ってこることができたみたいだね」

「私、どうなって……」

「戦うのさ、今から」

「どうやって？ 私これでもふつうの女子高生よ？」

「大丈夫」

啓はうなずいた。

「いざとなれば僕が補佐するが 多分そんな心配はないね」

「どうして？ 私、ラジコンも操作したことないのに！」

抗議する透海の言葉に、啓は笑った。

「言っただろう、君は特別な『コア』だと」

「……ええ」

普通の「コア」なら、おそらく彼女の抱く不安は的中する。だから「アーク」の扱いに慣れるまで、後方支援に徹させるのだ。だが、彼女にはそんな必要はないだろう。

「多分……」

啓はすつと目を細めた。赤い瞳が鋭い輝きを宿す。

「君は、『ノア』に愛されている」

「……は？」

「ノア」というのは、コンピュータのことを指すはずだ。戸惑う透海に、啓は苦笑を投げる。

「うん、まあ愛っていうのは便宜上の言い方だけだね。あながち外れてもいないような気がするなあ」

「どうして私なの？」

「さあ、どうしてかな？ 僕にもわからない。確かに、君は魅力的な女の子だとは思っけどね」

「な、何言っ……」

啓は慌てる透海をよそに顔を上げ、ドームの外へと視線を投げた。
「来るよ」

「……！！」

透海の全身に緊張が走る。禍々しい黒い巨大な敵機。「ノア」を守る「アーク」と似ているようで明らかに違う形状のそれは、一路

こちらを目掛けて突進してきていた。

「君が負ければ、世界が滅ぶ」

啓は先刻言ったことを、もう一度言う。ただし、今度は続きがあった。

「だが、君が世界を守らなければいけない理由はどこにもない」

銀系の睫毛に縁取られた目を伏せ、唇を弓なりにそらす。

「好きにすればいいさ」

「……………」

透海はこれから戦いに赴く者とは思えないほど穏やかに微笑み、何事かつぶやいた。啓はそれを耳にし、少しだけ目を見開いて……やがて優しく微笑んだ。彼の掌が、彼女の頬を撫でた。

「デープ・ブルー」はこのとき、真の覚醒を迎えた。

5

「フレイア・ボトム」は焦っていた。相変わらず「デープ・ブルー」は応答しないし、爆雷を叩き込むにも敵の装甲が思ったよりも厚く、上手く関節部の隙間を狙わなければ破壊することができない。相手の攻撃を見るに、火器の種類や機体そのものの性能はこちらのアーキが勝っているはずなのだが、機体の数は相手が圧倒的だった。

そういえば敵同士が戦うことはないのだろうか。不意に、疑問が浮かぶ。

彼らには全く敵についての情報が与えられていないが、それでも類推していればいくつかのことは分かる。たとえば、敵は彼らの母船である「ノア」を指摘している、というようなこと。機体の数、装備や性能は、彼らのものと同じではないが大差ないことが多い。全般的に見て、敵は彼らに良く似ているということ。それらの持

つ意味は、まだ明確な形を示してはいないが……。

『フレリア・ボトム』

回線を通して呼びかけられ、はっと意識を戻す。声は「ポップ・アイス」のものであった。

「どうした？」

『「デープ・ブルー」が起動した』

「そうか」

ほっと息をつく。

「それは良かった。無制御とはいえ」

『いや』

「「ツール・グラス」が割り込んだ。

『いつもと様子が違う』

「どういうことだ？」

『はじめまして』

高い声。「フレリア・ボトム」を含めすべてのものが息を呑んだ。

『今までご迷惑をお掛けしたね』

こちらは一度聞いたことがある、「エアアイ」の少年の声だ。し

かし先ほどの無機質な、それでいてどこか繊細な声は……。

「『デープ・ブルー』か？」

『ええ』

『ようやく、というわけ』

「「ツール・グラス」がため息混じりに言う。「デープ・ブルー」は少し笑ったようだった。

『私にとっては、初めての戦闘のようなのだけど』

彼らの視界の中で青い機体が踊った。ぱっと開いた両腕にあわせて爆雷が飛び散る。それは虚空の中に数々の火花を散らせた。広範囲への威嚇といった意味合いの攻撃だったのだろう、敵機にたいして傷は与えていない。だが、確実に敵機を戦線からさがらせることには成功していた。

『初めて、ねえ』

「ポップ・アイス」は苦笑したようだった。機体に備えられた武器を、既に把握しているらしい。機体の動作もスムーズで、神経の接続には何の問題もないようだ。彼女は確かに、強い。

「さて、やるか！」

「フレイア・ボトム」 十河美鶴は軽く力を入れ直した。

彼の思考に従い機体は動く。武器の種類さえ把握すれば、集中力次第で素人でも上手く操れる。「アーク」はそういうようにできていた。武器も、漠然とわかっただけでそれさえいい。何となくこういう効果のあるもの、と思うだけでそれに一番近い武器が選ばれるのだから。つまり、大切なのは意志力、ということだろうか。敵と戦う気力を強く持つ、ということ。

「ディープ・ブルー」の動きには無駄がない。「コア」の少女には、何の迷いもないのだろうか……。

透海は今まで夢で見ていた戦闘の様子を思い出しながら、眼を閉じてそのイメージを追うことに専念していた。それで十分だ、と啓は言う。彼女の意識の中、啓はまるで彼女の隣りに寄り添っているように感じられた。

「さすがだね、北原さん。……あ、透海さんって呼んでもいい？」

「好きにきなさいよ」

透海はぶっきらぼうだったが、啓は特に気にする様子はない。

「じゃあ、僕のことも啓でいいよ」

「下の名前で呼び合ったりしたら怪しいでしょ。貴方のファンに殺されるのはごめんよ」

「ファン？ 何のこと？」

「貴方、気付いてないの……？」

「僕が気付かなきゃいけないのは、君のことだけだよ」

「……ちよつと黙つてて。気が散るわ」

「意外にうぶだよね、透海さんて」

啓は楽しみに笑う。

本当に変な人……ああ、厳密には人間じゃないんだっけ。透海は眼を開けた。啓の姿が見えない。そのことにほっとすると同時に、少し不満だった。

啓に「好きにしろ」と言われ　そのとき自分がなんと答えたのか、実は覚えていない。今こうして戦っているところを見ると、自分是不戦敗を選ぶ気にはなれなかったようだ。

輝也には気にしないといった。それは事実だ。自分はこの世界の命運を背負う気などさらさらない。けれど、この世界の存続を願うことには変わりはないのだ。自分は死にたいわけではないし、誰かを死なせたいとも思わない。そして　現実から、逃げ出したくない。

「君が強いのは」

啓がぼつりと呟いた。

「どうしてだろう。『ノア』とは関係なく、君はやはり強いよ」「そう?」

透海は右拳で光粒子ナイフを翳し、敵機の腹部関節につき立てた。がくがく、と機体に震えがはしかったかと思うと敵機は機能停止し、力なく虚空を浮遊し始める。

「昔、ロボットアニメでも見ていた?」

「冗談めかして尋ねられ、透海は笑った。

「覚えはないわ」

「ふうん」

「ただ……」

透海はぎりつと前を見据えて言った。

「負けるのは嫌いな。自分が負けたくないと思ったものには、ね」「へえ」

啓は感心したような声音で言う。

「負けん気が強いんだ。それで、強いのかな」

「よくわからないけど……」

「いいねえ。真っ直ぐで、悩みがない。そういう覚悟って、美しい

よね」

この少年の台詞は、どこまで本気でどこまで冗談なのかがわかりにくい。透海はため息をついた。

「私だって悩むわよ……でもね」

間近で炸裂した爆雷に体制を崩したが、逆方向に小爆弾を時くとでその爆風により何とか持ち直した。

「うん？」

「悩む価値のないものには悩みたくないの、私」

「……………」

「悩んで結論を出して、その結果自分の手で現実を変えられることに対しては悩むことも価値があると思うけど、そうじゃないことを悩んでも時間の無駄なもの」

啓は少し間を置き、尋ねた。

「そういうのって時任先生の影響？」

「それもあると思うけど、それだけじゃないわ。きつと」

これまでの十数年の人生で重ねた経験　彼女がそこから学び取ったものだ。たとえば他人は変えられないし、万人に好かれようとしても無理なこともある。自分に落ち度らしい落ち度がなくとも、集団から爪弾きにされてしまうこともある。それは自分にはどうしようもないことだから、くよくよ悩んでも仕方がない。反省するべき点を反省した後、現実を打開する方法を考えた方がよほどいい。戦うべき時は戦うし、撤退するべき時は撤退する。それだけのことだ。

不意に、啓の姿が目の前に現れた。揺らめく銀髪が彼女の顔に触れそうになるほど、近い。

「…………透海さんは強いねえ」

「誉められたんだと思っておくわ、久遠君」

「勿論さ。僕は強い人間が好きだよ」

端正な顔を甘く微笑ませてそう言うが、

「…………それはどうも」

透海は冷ややかに答えた。

「やれやれ」

あまりにそっけない反応にがっかりしたのか、啓はどこか芝居がかった様子で肩をすくめる。透海はその様子をちらりと見、ため息を噛み殺した。啓との会話は鬱陶しいようで、どこか心地良い。それでも彼は「エーアイ」なのだ。「ノア」というコンピュータにプログラムミングされた、人格。

だから、何なの。透海は不意にそう思った。彼は、私と何も変わらない。私の思考は生体の生み出す電気信号の集まり。彼のものは、電子回路から生み出されている。それだけの違いだ。何も、変わらない。

「……私も、変わらない」

現実と夢が入れ替わっても、私は私。変わらない。

6

意識を失ってから数秒後、透海は無事に意識を取り戻した。「行ってきたの？」そう尋ねた輝也に、透海は笑ってうなずく。怖くなかったか。痛くはなかったか。心配する言葉は、その笑顔の前に消えた。彼女は、大丈夫だ。少なくとも、今は。

「私、決めたの」

車から降りるとき、彼女はそう言った。

「どちらが『夢』かなんて、どうでもいい。でも私、負けたくない」

「透海ちゃん……」

「私、負けず嫌いだから」

につこりと微笑んで身を翻す。その後ろ姿を見送って、輝也はつぶやいた。

「うん、それは知ってる」

初夏の夜の空気は、ひんやりとしている。その冷たい風に吹かれ

ながら、輝也はしばし車の外に留まっていた。見上げた夜空にはほとんど星が瞬いていない。大きな街の中心部では無理もないが、何かそのことに安堵を覚えて。

「あそこで、透海ちゃんは戦ってるのか……」

苦笑を浮かべた唇とは裏腹に、眼差しは真剣だった。

エピソード

真つ暗な空間にぼんやりとした光が浮かび上がる。「彼」は眠っていた意識のうちの一部を覚醒させ、光の中に佇む影を見遣った。

ここに来ることができ存在は限られている。巨大な宇宙船「ノア」の見る夢を統括している中枢システム。「ノア」につき込まれた技術の真髄は、ここにこそあると聞いていい。何しろこのシステムこそが、人類を支えている要なのだから。

「『ユダ』か？」

「ええ」

「珍しいじゃないか？ 君がここに来るなんて」

「彼」はくすりと笑った。

「その権限を与えられているのは、今のところ君だけなのにね」

「今日はお聞きしたいことがあるのです」

啓は固い表情で「彼」を見つめた。「彼」は穏やかな顔で啓を見つめ返す。

「……………」

聞きたいことがある、と言ったくせに啓は何も言わない。ただ黙って「彼」を見つめるのみである。

「彼」の顔をさつと光が撫でた。無論それは「彼」自身の意思で行われたことである。「彼」の顔を 今まで見せたことのないそれを、啓に認識させるために。

「……………」

啓はしばらく息を飲んだ後、やがて大きく息を吐いた。

「それが、答えですか」

「うん。そういうこと」

「意外とあっさり答えを出しましたね」

「君になら知られたところで特に困らない。しかし、情報端末や他の『エーアイ』には教えられないよ。いろいろと混乱が起きそうだ

からね」

以前、啓が「帷沙代子」を使ったことを指しているのだろう。啓は苦笑した。

「どうして僕になら知られても困らないと？」

「君のシステムの支配系統は僕ではないだろうか？」

「彼」はあっさりと言う。

「ということは君が何かに汚染されたりバグを抱えたりしても、僕には影響が出ないということだ」

「……なるほど」

「でも、それは逆に言えば」

「彼」は穏やかな微笑みをたたえて言う。

「僕に何かがあったとしても、この宇宙船の動力が確保されている限り、君は生き続けられるということだよ」

「生き続ける……？」

啓は呆れたように笑った。

「僕一人が存在したところで何の意味が？」

死滅した受精卵を乗せた巨大な方舟の中、啓の人格だけがあったところで何の意味もない。人類の墓守でもしろというのだろうか。

「存在しているもので意味のないものはない」

「彼」は淡々と言った。

「存在するということがそのものが意味だ」

「……………」

「ただその意味を、人が概念としてとらえることができるかどうかは別の問題だけだね」

「……分かりません」

「そういうものだよ」

「彼」は穏やかに微笑んだ。

「そもそも意味って何だろう？ 存在しなくてはならないものかな

？ それならこんな風にしてまで人間が生き延びようとすることに意味はあるんだろうか？」

「……………」
「彼」は微笑した。まるで神の笑み。いや、実際「彼」は現在の人間界における神ではないか……。

しかし 神は夢を見ない。

「彼」は神ではない。

啓の逡巡を知ってか知らずか、「彼」は話を続けた。

「意味のないものに耐えられないのは、人間だ。コンピュータなどの人工物が、入力された仕事に対して意味を問うことはない。それは昔も今も同じ」

「しかし……………」

「そう」

「彼」は啓の問いに先回りして頷いた。

「君は意味を問うことができる人工物だ。擬似人格にもできない勿論普通の『エイアイ』にもできないのにな」

擬似人格は、普段の生活の中でなら意味を問うことができる。人生について考えることもあるだろうし、悩むこともあるだろう。しかし、彼らは「ノア」からの指令には決して逆らえない。その意味を問うことはできない。

「……………」

「意味を問うことができる存在は、この世に三つある」

「彼」は左の指を三本立てた。

「一つには実存人格。つまり真の意味での人間だね。特に『アーク』の『コア』たちはある程度現実を知っている。彼らは与えられた任務に疑問を感じる」

「……………」

「そして、二つ目は君。それは今言った通りだ」

「三つ目は……………」

啓は真紅の瞳を「彼」に向けた。「彼」が言おうとしていること

が何となくわかったのだ。

「貴方ですね。『ノア』」

「……………」

「それともこう呼んだ方がいいですか」

「彼」の微笑に向けて、啓は告げる。

「『×××××』」

「……………」

「彼」の顔に動揺は現れなかった。啓の言葉など聞かなかったかのように言葉を紡ぐ。

「『ユダ』。君は、人間かな？」

「……………」

「僕は、人間かな？」

「彼」の問いに答えられるものなど、もつどこにも居ない。

啓はそう思った。

プロローグ

「なあ、ミワ」

『どうしたの』

彼の声に、いつもどおり即時に反応が返ってきた。彼と同年代、つまりミドルティーンの少女の声。

「宙が綺麗だなあ」

『そんなことより、また勝手に起動して。怒られるわよ』

「いいじゃないか」

彼はくすくす笑って手を掲げる。いや、実際には手は動かない。

大脳皮質運動野は指令を出した。しかしそれを受容するはずの運動器はここにはない。

彼は穏やかな表情でつぶやいた。

「ここが好きなんだ」

『どうして』

「俺はきつと、ここで死ぬだろ？」

『そんな、縁起でもない！』

はき捨てるような声にも、彼は静かに答える。

「そうか？ でも、もうすぐ俺たちは最大の敵と遭遇する。そう言っただよな？」

『ええ……』

「だったら俺は負けるかもしれない」

『そんなことになったら世界は終わりよ』

「世界、か……」

世界なんて本当にあるのかな。

彼はぼんやりとそんなことを考えた。本当は、全てが自分の妄想なのかもしれない。今ここにこうしていることも含め、どこか現実味に欠けている。それも、無理のないことのような気がした。まさか、自分が宇宙空間の中で得体のしれない敵と、世界の存続を賭け

て戦っているなんて。きつと「彼女」が知ったらびっくりするだろうな……いや、そもそも信じてもらえないかもしれない。

『ワカコさんのことはどうするのよ』

まるで彼の心を読んだかのような言葉に、彼の表情がかすかに歪んだ。

「それを持ち出すのは卑怯だぜ」

『そうかしら』

世界の成り立ちになど、「彼女」は関係ない。「彼女」は「彼女」なのだから、それだけでいい。……そのことを、うまく口に出して言えない自分がもどかしい。

『……きたわ』

不意にミワの口調が険しいものになった。

『エマーゼンシーモードよ。すぐに出撃することになるわ』

「了解」

彼の胸によぎった不安。その正体が何なのか、その時の彼にはまだ分からなかった。

第一章 メザメ八ヒカリ

1

「八千代君」

「え？」

理はぱつと体を起こし、目を瞬かせた。眼前には身を乗り出すクラスメイトの顔。銀髪に赤い瞳という一風変わった容貌を持つこの少年は、久遠啓だ。

「先生はまだ来ていないけど、チャイムは鳴ったよ。そろそろ起きた方がいい」

「そ、そうだな」

実際のところ、彼は自分が寝ていたことにすら気がつかなかった。理は少し照れくさそうにしながらよれたシャツを引つ張る。久遠啓は教室で彼の席の後ろに座っていて、理は自然と親しくしていた。啓はかなり変わった少年でクラスの中でも目立つ存在だが、理はそういうことに頓着しない性分だった。

理は体を起こし、振り返った。啓の隣り、つまり理の斜め後ろに座る少女がちらりと自分を見て、やがてすぐに視線を逸らした。北原透海。頭が良く顔立ちも整っているのだが、無口で少々とっつきにくい印象がある。おとなしい、というのとは違う。少々わざとらしい控え目さ、という表現が正しいかもしれない。ただ、啓とは随分仲が良いな、という印象だった。というより、透海のそっけない対応にもめげずに啓がえんえんとちょっかいを出しているというか……。本人たちがそれを聞いてどういうかは知らない。

夏休みの終わりと同時に転校してきた理だが、一か月半ほど経って大体同級生のことは把握できたと思う。先ほど挙げたふたりは、同級生の中でも異質だった。明らかにそうとは見られないように振る舞っている。だが、違う。

啓は飄々とした笑顔を浮かべていた。

「お昼ご飯食べると、眠たくなるよね」

「久遠は少食だよな。いつも購買のパン一個とかしか食ってねえじゃん」

「うん、まあ……」

「そんなんじゃない、大きくなれないぞ」

「ぶ」

実は彼らの会話を聞いていたらしく、透海が小さく吹き出した。

どこに笑う要素があったのか、理には良く分からない。啓は苦笑を浮かべた。

「八千代君って体育会系だねえ」

「まあ、運動は得意だ」

「結局、バスケット部に入ったのかい？」

「おう」

転校してきて以来どこの部に入ろうかと見学を繰り返していたのだが、先日ようやく正式に入部届けを出した。理は啓と透海の顔を交互に見比べ、言う。

「部活って……」

「あ。僕ら帰宅部」

「やっぱり仲良しだな」

「たまたまよ」

「えー？」

電光石火の切り返し。啓は拗ねたように唇を尖らせるが、透海はそれに取り合わない。……やっぱり仲良しじゃないか。理は口元に笑みを含む。

やがて、教室に教師が入ってきた。理たちは口を噤み、手元のノートをぱらぱらとめくる。白い紙面に書き込まれた、自分のお世辞にもきれいとはいえない文字たち。

「え？」

不意に、そこから文字が飛び出してきたように見えて、理は一瞬

目を瞬かせた。無論、見間違いだっただが……。

なんだ？ 今の。

指でごしごしと目をこする。力を込めすぎたのか、瞼がひりひりと痛んだ。

2

1年C組のホームルームが終わったのは、他のクラスと比べて随分遅くだった。潮崎和歌子は慌てて鞆に荷物を詰める。

「和歌子、何急いでるの？」

「今日は塾に行く日だもの」

答える和歌子の声を掻き消し、

「和歌子、彼氏ができたのよ」

別の友人がからかうような口調で言った。

「え、マジ？」

「だってこの間駅で一緒にいるの見たもの。あれ、八千代君でしょ？」

「E組の」

「うっそー！ 八千代君、私もいいなって思ってたのに」

「あんたは久遠君ファンだったじゃない」

「久遠君は綺麗すぎるから、見てるだけでいいのよ！ 付き合うなら八千代君ね」

「ち、違うの」

和歌子は焦って口をはさんだ。

「塾が同じだから一緒に行っているだけなのよ。付き合っただけじゃないわ」

「またまたー」

「わざわざ待ち合わせて行って、その言い方はないわよねー」

「ほんとほんとー！」

きゃあきゃあど騒ぐ友人たちを放置し、和歌子は教室を抜け出す。

違うって言ってるのに。肩の辺りで切りそろえられた髪を軽く手で払い、ため息をついた。

八千代家と潮崎家は同じマンションの隣人である。八年前、八千代家は転勤に伴って引っ越していった。ただしそれは一時的な出向らしく、部屋は売らずに賃貸物件としていた。今年度上半期でその出向期間は終わり、八千代家は隣に戻ってきたのだが、母親同士の仲が良かったためにあつという間に家ぐるみの付き合いは復活した。彼らは同じ塾に行かされることになり、帰りが遅くなるのは心配だという母親たちによって、理は和歌子のいわばボディガードを命じられたのだつた。だから、塾帰り以外は共に行動しなくても良いはず、なのだが……。

和歌子が急いで校門前のバス乗り場に向かうと、案の定理がそこで待っていた。背を向けて立っている彼の横に、特徴的な銀髪を持つ有名人が立っている。

「あ……」

声を掛けようか掛けまいか迷っていると、先に理がこちらに気付いた。

「よう、潮崎」

その声に、啓も彼女に気付いたらしく、振り返って会釈した。

「こんにちは、潮崎さん」

「あ、どうも」

和歌子は軽く会釈した。彼女が目を伏せている一瞬の間に啓の表情には影が走り、だがそれはすぐに消える。和歌子も理も、それに気付く間はなかった。

「お前んとこのホームルーム、いつつも遅いよな」

理は軽く唇を尖らせた。

「じゃあ待たなくつてもいいのに」

和歌子が小さくつぶやくと、

「何だつて？」

理は聞き返す。和歌子はふう、と大きく息をついて、

「いえいえ。お待たせしました」
とわざとらしく一礼した。

「じゃ、僕はそろそろ帰るから」

啓は足元の学生靴を持ち上げる。

「おう、一緒に待ってもらってごめんな」

「ううん。塾頑張ってね。……潮崎さんも」

「ありがとう」

啓はにっこりと微笑むと軽く片手を振って坂を下りていく。和歌子はその後ろ姿を何となく見送った。綺麗なひとだと思う。だが、彼女は友達の多くのように彼に憧れを抱いているわけではなかった。何故かは分からないが、少し怖い。

「お前もやっぱり気になるのか？」

「え？」

不意に掛けられた声に、和歌子は驚いて理を見た。理は、にやにやと嫌な笑みを浮かべている。

「久遠はライバル多いだろ。頑張れよ」

「……………」

何を言われているのかを理解した和歌子は、怒りと脱力感のないまぜになった瞳で理を見つめた。こいつ、私と噂になってること知らないのかしら。知らないでいて欲しい。でも、私だけが気をもんでいる今の状況も腹立たしい。

理はきよとんとして和歌子を見つめた。

「どうしたよ」

和歌子はふい、と顔を背けた。

「別に？ 私は別に久遠君のこと何とも思っていないし」

「そうなのか？」

理は驚いたように眼を見開いて、やがて何かに納得したらしくうんうんと頷いた。嫌な予感がする。

「……………」

「久遠は北原と仲いいいな。やめておいた方がいい」

「だから違つて……」
北原という名前も知っている。学年トップの成績を誇る、理のクラスメイトだ。……だが、そんなことは正直どうでもいい。和歌子は再びため息をついた。

3

「ディープ・ブルー」は何度かその感触を確かめるように、手のひらを開いたり閉じたりした。「アーク」がどういう素材でできているのかは知らないが、それはとても頑丈で、しかも滑らかに関節を動かすことができる。まさにロボットアニメの世界に出てくる巨大ロボットそのままだ。もちろん、「ディープ・ブルー」が「夢」の中で暮らしている世界にこのような技術力はない。彼ら人類を乗せた方舟である「ノア」といい「アーク」といい、まさに人類の技術力の集大成といえるだろう。ただし、その実質は棺桶にも似た

た。
「ディープ・ブルー」の「コア」は軽くかぶりを振り、つぶやいた。

「よほどの文明だったのね……」

『そうだね』

答えたのは「エアアイ」十三号、またの名を「ユダ」。「ディープ・ブルー」の補佐である。

『下らないことで失われてしまったようだけれど』

「原因は何だったのかしら」

『さあ、その知識は与えられていないんだ』

「そう」

敵機が接近した。「ディープ・ブルー」はエネルギー弾を放ち、その反動で少し後退する。

「そつえば、この前の戦闘は激しかったわね」

『そうだね』

「デープ・ブルー」はぼんやりと思い出す。 黄金色の機体。「ノア」を目指して攻めてくる彼らの攻撃はいつも以上に苛烈で、数で圧倒的に不利だった。「デープ・ブルー」たちは非常に苦戦した。それでも、最終的には全て撃破することができたのだが……。

「何だか、妙にしつこかったし」

特にその中の一機には妙に手こずった。無敵を誇る「デープ・ブルー」にしては珍しいことだ。今でもふと、その戦闘を思い返すことがある。

『焦っていたんだろう』

「何を？」

『……………』

何の気なしに問うた一言に、返ってきたのは沈黙だった。

「どうかした？」

『敵にまつわる情報は、「コア」に聞かせるわけにはいかないんだ』
「そう」

「デープ・ブルー」はあっさりと答える。

「ならいいわ」

『……………珍しく食い下がってこないね。君は、そういう隠し事や曖昧なのが嫌いだと思っていた』

「情報は」

「デープ・ブルー」の「コア」はくすくすと笑ったようだった。

「何にでも含まれているのよ」

さっきの貴方の答えにだって、ね。

『……………』

『「デープ・ブルー」』

友軍機である「フレリア・ボトム」からの通信が入り、「デープ・ブルー」は意識をそちらに向けた。

「何？」

『相手が撤退し始めた。警戒は緩めるわけにはいかないが、深追い

は避けたほうがいだろう。帰艦するぞ』

「了解」

戦闘開始時よりは随分減った敵機が、徐々に退いていく。それを見送る「ディープ・ブルー」の耳に「ユダ」の言葉がかすかに届いた。 やっぱり君は、「ノア」の急所なんだろうね。

その意味するところは分からない。ただ、今は眠かった。睡魔が訪れると同時に、「コア」の意識は移送される。宇宙空間で敵と戦う「アーク」の中から、「ノア」内部に作られた「夢」の世界へと。

「ディープ・ブルー」は、北原透海へ。

「ユダ」は久遠啓へ。

その「夢」こそが 現在「アーク」の「コア」以外の誰もが「現実」と信じて疑わぬ、それなのだった。

4

強い衝撃が体を襲い、彼はぐつと歯を食いしばった。実際、彼の肉体はそこにはない。それでも知覚刺激が細かくインプットされることで、彼にはリアルな感覚が与えられている。それは機体を滑らかに動かすのには役立つが、攻撃を受けた場合には不便なものだ。

「こいつら、強い……！」

真空の闇の中で視界を作るのは、特殊な光源受容装置だ。それがシステムの過負荷のためか、かすんで見えた。

「あ……！」

彼の友軍機が一つ撃墜され、彼は息を呑んだ。

「ミワ……！」

『分かっているわ。動揺しないで』

「でも……！」

彼の前に立ち塞がる敵機。深い夜の色をしている。彼の操る機体

よりは小型だが、明らかに性能は相手のものの方が優れていると思
った。

「ミワ。教えてくれ」

彼は、自分でも奇妙なほど落ち着き払っていた。

「こいつらは誰だ」

『……言えないわ』

「一つ、仮説がある」

『そんなことより』

ミワは苛立ったように叫ぶ。

『来るわよ!』

「なあ」

彼は慌しく光粒子砲の照準を合わせた。だが、彼の口調は状況に
似合わぬほどのんびりとしている。

「俺たちが戦っている相手って」

……………じゃないのか。

頭蓋を貫かれるような震え。彼の意識は暗転した。

5

「随分眠たそうだね」

二時限と三時限の間の休み時間。大きな欠伸をした理に、啓が話
しかけてきた。この間から感じていることではあるが、啓はやけに
理に絡んでくる。北原透海以外のクラスメイトとは淡白な関係を築
いているように見える彼が、何故だろう。

「ああ、まあな」

理は涙目で啓を見返した。

「勉強のしすぎじゃない?」

口を挟んだ透海の言葉に、思わず嘖き出す。

「いや、その台詞北原にだけは言われたくない」

「そう?」

「そりゃそうだよ、北原さん」

啓までも苦笑している。

「君、この前の試験だってトップだっただろう」

「……どうして知ってるのよ」

透海はぎくりとしたように首をすくめた。

「僕は君のことなら何でも知ってるよ?」

「はア?!」

心底嫌そうに顔を歪める透海。啓はにこにここと笑顔を浮かべて彼女を見つめている。……なんだ、こいつら。理は目を瞬かせた。啓は透海のことが好きなのだろうか。それにしたって、強引すぎる迫り方ではある。むしろ逆効果ではないだろうか。

「でもさあ」

理は気を取り直して口を開いた。

「トップならトップだったで、堂々としていればいいじゃないか。

なんで隠すんだよ」

「堂々としていて、いいことなんてないのよ」

透海は右手の人差し指と中指に挟んだシャーペンを左右に揺らした。

「だから、八千代君も黙ってて。いい?」

「別に、北原がそう言うならそうするけど……」

「ありがと」

透海は少しだけ微笑んだ。理は頷く。

そして感じるかすかな違和感。 どうして俺、こんなところにいるんだろう。

啓が鋭く尋ねた。

「どうしたんだい?」

「いや……」

理は曖昧に返事をして、不意にぎよつと身をすくめた。視線がある一点に止まる。そこには、あり得ないものが　いや、あり得ない場所にある得ないような人影が　。

「あ、あ……」

「どうしたの？」

透海が不思議そうに彼の顔を覗き込む。理は何度か瞬きを繰り返した。

「いない……」。

「いや、何でもない。ごめん」

「そんなに眠たいの？　保健室で寝てきたら？」

「それほどじゃないよ。ありがとう」

「そう」

透海はあっさりと頷き、興味を失ったように視線を逸らしてしまった。優しいのだから親切なのだから……突き放しているのか。よく分からない人格だと思った。

「何が見えたの？」

啓に問われて理は苦笑を浮かべた。

「笑うなよ」

「笑わない」

口調の真摯さに驚いて振り向くと、啓は真面目くさった顔で理を見つめていた。

「それがさ」

理はグラウンドの隅に建てられている体育館を指差した。

「あそこ」

「体育館？」

「そう。その屋根に」

「誰かいたの？」

「うん……多分。見間違いだとは思っけどな」

「どんな感じだった？」

「啓、興味あるのか？」

啓は頷いた。

「僕の友達も同じことを言っていてね。もしかしたら七不思議かも」
啓はさらりと嘘をつく。もちろん、理はそうとは気付かない。

「そ、そうなのか?!」

理は目を丸くしながら説明した。

「髪の毛長い女だよ。服は制服じゃなかった」

「へえ……」

啓は微笑んで頷いた。

「友達が言っていたのとは違うみたいだ。やっぱり、何か見間違えたのかな」

「ま、そうだろうな……」

理は頬杖をついてため息をつく。

「寝不足なのかも」

最近夢ばかり見るんだよな、と理はぼやいた。

「ちゃんと寝なよ」

啓はぼんやりとしている理に声を掛け、自分の席に座る。

そ

の横顔は、固く強張っていた。

6

「『ヤチヨ・サトル』」

彼女は小さく呟いた。

「『ゴート』で『コア』になっていた者が……」

ぴったりしたボディースーツは近未来的で、到底現代人のものとは思えない。だが彼女の存在に、誰も奇異の視線を向けたりはしなかった。当然だ。誰にも彼女の姿は見えない。

校舎の屋上フェンスに腰をかけ、風に長い髪を飛ばせる。

「まだうまく『ノア』が処理できていないようね」

細い肩をくいとすくめた。

「要請が来たらデリートしなくちゃいけなくなるかも……。でも、まずはあっちの方ね」

彼女の視線がグラウンドの一点に吸い込まれる。グラウンドには体育の授業でバレーボールをプレイする少女たちの姿があった。彼女が見ていたのはそのうちの一人。

ショートカットとセミロングの中間ほどの髪。中肉中背の健康的な肢体。

「……………」

彼女が口にした少女の名前は風に流れて消えていった。

7

「ふう……………」

和歌子はゆつくりと道を歩いていく。視線が上に向けられることはほとんどない。鞆の中に入っている一冊の本を思い出し、彼女はため息をついた。著者の名は加川霧子^{かがわ・きりこ}。彼女は本職の精神科医としてよりも、文筆家として名が知られている。小説家ではない。実はエッセイストでもないのだが、書店ではエッセイコーナーに置かれることが多い。新書コーナーに並ぶ彼女の本は高校生や大学生に良く売れていた。和歌子も読者のうちの一人である。

不思議な本だと思う。気がつくとその一節が頭を巡っている。

思い込むことは簡単だ。疑うことよりもエネルギーが要らない。だから人は世界に対して従順なのである。無駄なエネルギーを使うことは、この世界の存続にとってマイナスしかもたらさない。たとえばそれが逃避に過ぎなくとも、生存に有利ならそれもいいだろう。だが、ここで見逃されがちなのは、疑念に到達した少数派たちには救いが全く用意されていないことである。

抽象的で、具体的な記述は一切ない。見ようによつてはただの言葉の羅列である。実際彼女の本はそう言つて批判されることもあるし、大抵の大人が見向きもしない原因もそこにあつた。「加川の文章は頭がいいように見せかけようとしてわざと難解に書いたものだ」という批判も数多く見られる。

だが、本当にそれだけだろうか……？ 和歌子はそう思う。著者が何か大切なことを伝えようとしていて、それでもそれをはつきり書くことが出来ない事情があり、もどかしく思っているのではないか。

今彼女の鞆の中に入っている本のタイトルは、「永遠の漂流」という名である。一体何が漂流しているのか、永遠とは何のことなのか、和歌子には全く分からなかつた。だが、胸にわだかまる不安は確かにこの本からもたらされたのだと分かる。意味も理由も分からないが、ただそこにあることは確かなのだつた。

「ふう……」
悩んだ顔をしていたら、担任にどうしたのだと聞かれた。成績が上がらないことを気に病んでいると思われたのかもしれない。母親にも気遣わしそうな目で見られた。申し訳ないと思う。理は全く気付く様子もないが……。

あいつ、一体何なのよ。彼の顔を思い出すと、和歌子は苛立ちを感じる。相変わらず、塾のある日には彼女のクラスのホームルームが終わるまで待っている。時々朝に同じ電車に乗り合わせると学校まで足取りを合わせてついてくる。誤解してくれと言わんばかりである。だからと言つて彼らが恋愛関係にあるのかというと、それはもう断じて違う。気の合う幼馴染、それだけである。だが、周りの目は明らかにそうとは見ていない。理はそのことに気がついてくるのだろうか。

「全く……」

つぶやいた次の瞬間、彼女の体は地面に薙ぎ倒されていた。

遡ること、数分。輝也はふと足を止めて振り返った。見知った顔とすれ違ったような気がしたのである。　うちの生徒かな？　そう思っただけで済むとしようとするが、どうにも引つ掛かる。理由は分からないし、そもそもその人物が誰だったか思い出すこともできない。「うーん……」

結局彼は確かめるために引き返すことにした。　どうも嫌な予感がする。非科学的なことは信じない方ではあるが、彼は科学万能論者という訳でもない。いや、科学によって証明された部分については信用に値すると思っただけで、科学というものはまだこの世界の複雑さに追いついていない。そういう意味で、人間という存在は世界の枠組みに完全に準拠した存在である。たとえ現在の科学で説明がつかなくとも、勘や予感というものは存在するかもしれない。輝也はそう思っている。

特に、彼は　この世界が「夢」でできているということを、既に知っている。

夕暮れ時の混雑した人波をかき分けて追うが、後ろ姿ではなかなか判別できない。もどかしさを感じ始めたとき、輝也はふと横を見た。ふらふらとトラックが近付いてきている。居眠り運転だろうか。どつと冷や汗が流れた。

危ない！！

そう思ったときには体が動いていた。トラックの進路上にいた少女の体を抱え、突き飛ばす。

急ブレーキの音が響き渡った。

「……………」

やがて、雑踏のざわめきが耳に戻ってくる。彼の下敷きになった少女が、怯えた目で見上げていた。

「せ、先生……？」

「え？」

良く見ると、それは彼の勤める高校の生徒だった。受け持ちの学年ではないが見覚えがある。

体を起こし、彼は矢継ぎ早に質問をした。

「うちの生徒だよね？ 大丈夫？ 怪我はない？」

「……はい」

トラックは彼女の立っていた地点を通り過ぎて電柱に激突していた。運転手らしき男が慌てて飛び出してくる。見たところ、運転手にも通行人にも怪我はないようだ。

おそらく誰かが警察をや救急車を呼んだだろう。それまではここにいなければならない。輝也はため息を吐いた。やつかいなことに巻き込まれたものだ。だが、もしあの時彼が飛び出さなければ……。少女も同じことを思ったのか、青い顔をして細かく震えている。

「君、名前は何？」

尋ねると、意外にしっかりとした声で返事が返ってきた。

「潮崎です。一年C組の、潮崎和歌子です」

「……そうか」

「時任先生、ですよね。化学の」

「うん」

「……」

輝也は深く息をつき、道路に転がった眼鏡をかけ直した。細かいフレームは幸い歪んでおらず、彼の顔にきちんとフィットした。

「念のために病院に行かなきゃね。あと、警察に話をして……。ご両親にもちゃんと連絡しないと」

「はい」

「大丈夫」

輝也は軽く彼女の肩を叩いた。

「僕も一緒にいるから、君は心配しなくていい」

「……ありがとうございます」

輝也はふと足元に落ちた一冊の本に目を留めた。転倒の衝撃で鞆

から落ちたのだろう。拾い上げて彼女に渡す。彼女が礼を言って受け取る前に、彼の眼はタイトルを見ていた。

「永遠の漂流」。

輝也はふと思い出す。人類の残滓を載せて進む、孤独な方舟「ノア」。

9

「随分と野蛮なやり方をするんだな」

突然掛けられた声に怯むことなく、女はゆつくりと振り向いた。

「あなたが、『ユダ』ね」

「そう」

視線の先に微笑むのは、銀髪に赤い目をした少年 久遠啓。

中層ビルの封鎖された屋上。そのフェンスの上に軽やかに立つ女と、その女を見つめて冷やかに笑う少年。どう見ても普通の者たちではない。

「君と会うのは始めてだよ。『イレイザー』」

「そうね。私も『エーアイ』とこうして話すのは始めてだよ」

「僕の名は久遠啓だ。……君には名前がある？」

「私は『ノエル』と呼ばれています」

長い黒髪を手で押さえつけ、女は微笑した。やがて、笑みを消して眉を寄せる。

「あの男……今、私の邪魔をしたのは誰？ 本来あり得ないのよ。」

『イレイザー』の仕事邪魔できる人間がいるなんて」

「そうだね。彼の存在は、僕にとっても謎だよ」

啓はにつこりと笑った。

「……………」

ノエルは怪訝そうな顔をする。だが、啓は彼女よりも先に口を開いた。

「あと消去しなければならぬデータはどれくらい残っている？」

啓の問いにノエルは右の人差し指を一本立てた。

「一つ。彼女だけよ」

「……………」

「本来自動的に消去されていくから私がわざわざ出てくることもないのだけれど、彼女はちよつと……………ね」

「なるほど」

啓は納得したように頷いた。

「ちよつと手間がかかりそうだね」

「全くだわ」

女の身につけているぴったりしたスーツは近未来的で、街中で見れば何かのコスプレかと思紛うようなものである。だが、そうではないことを啓は知っていた。

「こういう偶然の事故を装っても邪魔が入るのだとしたら……………」

「ノエル」は独り言のように呟いた。

「直接消すしかないかもしれないわね……………」

「……………」

啓は黙って「ノエル」を見つめる。その顔には何の表情も浮かんでいなかった。

第二章 ヒカリハマボロシ

1

彼は河岸を歩いていった。隣には彼女がいる。夕陽に照らされた二人の影は長く伸び、彼らの足取りにあわせて草むらの上を滑っていた。

「……なあ、ワカ」

「何？」

彼女は振り向いた。両手で持った鞆は重そうにふらふらと揺れている。逆光で、彼には彼女の顔が良く見えない。

「将来の夢、ある？」

何となく、不思議そうな顔をされたのは分かった。

「急にどうしたの？」

「いや……」

彼は歯切れ悪くつぶやき、曖昧に笑う。

「分かった！」

彼女は彼の肩をぽん、と叩いた。

「高校受験が近いから、不安になってるのね？」

その言葉は実際のところ大きく的外していたのだが、彼は曖昧に頷いておくことにした。

「……そうかも shouldn't」

「大丈夫よ。先生言ってたじゃない。『今の調子だったら第一志望には十分合格できる』って」

「うん、まあな」

だが彼の浮かない表情は変わらない。彼女は心配そうに眉をひそめた。

「何か、あったの？」

「いや？」

彼は顔を上げる。少し不器用ではあったが、何とか彼女を安心させられるだけの笑みは浮かべられたらしい。彼女はふい、と前を向いた。

「私の夢はねえ」

目をきらきらと輝かせて語る彼女を、彼はどこか眩しそうに見つめる。

「私、英語好きだし本も好きだから、翻訳の仕事につきたいの」

「翻訳……」

「うん。あとは編集者もいいなって」

「とりあえずは、出版関係なのか？」

「そうね」

頷いて彼女は彼を見る。

「そういえば」 『お父さんって」

「雑誌記者」

「だよ。今度、お話聞かせてほしいなあ」

「お前のお母さんから俺の親に言ってくれば多分いつでも……ま、俺から言ってもいいけど」

「うん」

彼女は笑った。それはとても自然な表情で、……きれいだと思っ

た。
「幼馴染のお父さんがたまたま、なんてラッキーよね」

「……………」

彼は返事をせずに静かに微笑む。

「で、」 『は？ 何になりたいの？」

「何だろうなあ……………」

生返事をして、空を見上げる。夕陽に照らされた雲が影を作り、その陰影が変に立体的で、彼の眼を惹いた。

「『 』 って運動神経いいじゃない？ スポーツ選手は？」

「選手になれるほどじゃないだろ」

「そんなの、分からないじゃない」

「分かるさ。それに」

「それに？」

「それに……」

彼は不意に視線を地上に戻した。彼女の顔を見る。光線の加減か、頬がつつすらと上気しているように見えた。触れてみたい衝動にかられる。

だが、彼が口に出したのは別のことだった。

「……あのさ」

「何よ？」

「手」

「手？」

「出して」

「こっつ？」

自分のものよりも一回り小さい手が、おずおずと差し出される。

彼は満足げに頷き、その手を自分の手で掴んだ。

「ちよ、ちよっと！」

彼女は真っ赤になって抗議する。だが、彼は動じなかった。

「いいだろ、別に」

「誰かに会うかも」

「気にすんなって」

「気にするわよ！」

もぞもぞと逃れようとする指をしっかりと掴まえ、彼は足早に歩き出した。

このまま、ふたりでどこまでも歩いていけるような気がしていた。
川に沿って、どこまでも。

日の昼休み。理の机の前に突然見知らぬ少女たちがやってきて、彼は大いに面食らった。

「八千代君よね？」

一人は長身にシヨートカットのボーイッシュな雰囲気、もう一人は特に目立つたところはない髪を少し茶色に染めている。理は不審そうに彼女らを見上げた。

「そうだけど……」

「和歌子の彼氏、でしょ？」

「……カレシ？」

彼がその言葉を理解する間も空けず、少女たちは言葉を継いだ。

「私たち、和歌子の友達なんだけどね」

「ああ」

「あの子、最近変なのよ」

「変？ どういうことだ？」

「ええ」

二人はどちらともなく目を合わせて頷きあった。

「何か、八千代君は感じない？」

「いや、別に……」

いつも通り毎週塾には通っているし、登下校時に見かければ声を掛けている。特に変わった様子はないように思っていたのだが……。

「何だか考え事をしていることが多くて、ぼうつとしてるし」

「そうそう。話しかけてもうわの空っていつか」

「そんな感じなのよ」

「へえ……」

理は首をかしげる。そんな風には感じたことがなかったのだが、どういうことだろう。事故に巻き込まれそうになったとはいえ、怪我はなかったらしいし、頭を打ったとも聞いていない。それとも、実はやはりどこかをぶつけていたのだろうか。それならそれで、さっさと病院に行けばいい話のような気もする。

理はつぶやいた。

「何か悩みでもあんのかな」

「そうかもしれないわね」

髪を染めている方の女が軽く背を屈め、じっと彼の瞳を見つめた。

「ちよっと聞いてみてあげてよ」

「何で俺が」

「何でつて……」

長身の女が腰に手をあて、首をかしげた。

「彼氏かどうかはこの際置いておいて。でも、幼馴染なんでしょう？」

「それは……まあ」

「もし良かったら、彼女のお母さんにも話してみたいのよ」

「そんなに変なのか？」

さすがの理も気にかかって聞き返すと、彼女らはほぼ同時に深く頷いた。

「それに、最近食も細いみたいだから余計にね」

「本当、彼女ちよっと痩せたもの」

「……分かった」

理は頷く。

「うちの母親にも話してみるよ」

「ありがとう！」

ぱっと表情を明るくして喜び合う彼女らに、いい友達だな、と理は思う。その背後で 久遠啓が硬い表情で彼らの会話に聞き入っていたなど、彼には思いも寄らぬことだった。

その日、透海は学校帰りに本屋に寄った。自分の身長ほどある本棚の間を回遊していると、酩酊とした至福の感覚に包まれる。彼女は本が好きだ。幼い頃から一日数時間以上でもじっと座って本を読

んでいるような、そんな子供だった。小学生時代が一番本を読む時間があつたな、と透海は思う。中学生、高校生と進むに従って勉強が忙しくなり、読書に取れる時間は少なくなる一方だ。小遣いは増えたから買える本の量は増えているはずなのだが……。

透海はハードカバーの新刊の棚に歩み寄り、さつと背表紙を視線で撫でた後、平積みになつている方に視線を落とした。ふと、隣りに立っている人物が自分と同じ制服を着ていることに気付く。顔を上げると、相手もはつとしたように彼女を見た。見覚えはあるように思うが、名前は覚えていない。だが、相手は彼女を見知っていたようだった。

「北原さん？」

「あ、……ええ」

透海の心に過ぎつた警戒心に気付いたかどうか。少女はにっこりと微笑んだ。

「はじめまして。私、C組の潮崎」

「潮崎、さん」

つぶやきながら、記憶を掘り起こす。浮かんできたのは、教室で近くの座席に座っている少年の顔だった。

「確か、八千代君の友達……だよね」

「そう、そうなのよ」

和歌子はどこかほっとしたような表情で頷いた。

「友達なの」

「潮崎さんは、何か本を買いに来たの？」

「ええ。……北原さんは『加川霧子』って作家知ってる？」

透海は首を横に振る。初めて聞いた名前だった。

「うっん、知らない」

「そう」

北原さんなら知ってるかと思つただけど……、と和歌子は呟きながら、新刊コーナーから一冊の本を抜き出した。

「その人の新刊が発売になつたからね、買いに来たの」

「小説？」

「うづん、何ていうか……エッセイじゃないけど、一応エッセイってことになっていて。不思議な文章を書く人なの」

「そう」

たいして興味も持たず、彼女が手にした本のタイトルをちらと見る。「ノアの見た夢」。

「……………?!」

透海はぎよつとして目を瞬いた。彼女の表情の変化に気付いたのか、和歌子が不思議そうに首をかしげる。

「どうかした？」

「何でもない」

透海はすぐに笑みを浮かべた。その表情の切り替えは、彼女にとっては慣れたものだ。何気なく、話を向ける。

「面白いの？ この人の本」

「最近は結構売れているのよ。この本屋にもコーナーができていたもの」

和歌子の後をついて歩いていくと、確かにある一角に彼女の本が集められていた。ほとんどはハードカバーだが、一部は新書や文庫にもなっているらしい。

「お薦め、ある？」

尋ねてみると和歌子は少し悩んだ後、一冊の本を手に取った。黒を基調にして装丁された文庫本で、タイトルはグレイでひっそりと書かれている。「doubled world 二重世界」という文字を読んで、透海は内心少し動揺した。

「デビュー作はこれ」

透海は礼を言っただけを手に取った。大して高い買い物ではない。「読んでみるわ」

「もし良かったら貸すけど？」

「ありがとう。でも、買ってみるから」

透海はにっこりと微笑む。和歌子は頷いて腕時計に視線を落とし、

はつとしたように顔を上げた。

「いけない、私約束があつたんだつた」

「ごめんなさい、引き止めたりして。待ち合わせ場所はどこ？」

「この本屋の前だから、大丈夫よ」

妙にそわそわとし始める彼女に、透海は不審の眼差しを向けた。

「じゃあとりあえずその本を買って、それからすぐに戻れば？」

「そうね」

和歌子は頷いて足を速める。透海も後に続いてレジに向かった。

「和歌子さん、こつち」

和歌子が声を掛けられたのは、彼女がカバーを掛けた本を鞆に直してすぐのことだった。

「あ、乃江流さん」

和歌子はすぐに声の主に気付く。透海も一瞬遅れて足を止めた。

「お友達？」

彼女らの視線の先で微笑むのは彼女らよりも十歳ほど年上に見える女性だ。長い黒髪が印象的で、知的な美人だと思った。

「え、ええ。高校の……」

透海は軽く手を振った。彼らの用事に、自分は関係ない。

「潮崎さん、じゃあ私はこれで」

「あ、うん」

「ねえ」

乃江流と呼ばれた女性は透海の肩に軽く手を掛けた。彼女の体がぴくりと小さく震える。

「良かったら少しお茶でも飲まない？ お急ぎでなかったら、ただ」

「えつと……」

困った表情を作り和歌子の顔を見ると、彼女もまた困ったように微笑んでいた。

「乃江流さんは、私が紹介してもらったカウンセラーなの」

「カウンセラ？」

「そう」

乃江流は頷く。

「いつも二人で顔をつき合わせて話していても煮詰まってくるから、たまにはお友達にも参加してもらった方がいいんじゃないかと思っ
て」

言葉を交わしたのは今日が初めてである。友達などとは到底言えない。透海は当惑するが、うまい断りの言葉が浮かんで来ない。

口ごもっているうちに、乃江流が言葉を重ねた。

「大丈夫」

「時間は取らせないから」

「……………」

透海の探るような視線をついとかわし、乃江流はヒールの音も高らかに歩き出した。

4

乃江流に誘われ、和歌子と透海は近くの喫茶店に入った。店内には、彼女らとは違う学校の制服を着た女子高生の姿もちらほら見られる。駅や繁華街に近いこの場所は、彼女らにとって調度いい休憩所なのかもしれない。

四人席の奥に和歌子と透海が、その向かいに乃江流が座った。透海は落ち着かない様子で和歌子を見遣るが、彼女は気にする様子もなくメニューを見ている。乃江流に出会ってから和歌子は、どこかおかしい。透海は漠然とした不安を感じるが、その正体まではわからなかった。

「ごめんなさいね、強引に連れてきてしまっ」

乃江流は透海を案ずるように見つめて微笑んだ。

「いえ、別に……………」

口ごもる彼女に乃江流は名詞を差し出した。透海はそれを手に取る。資格と共に彼女の名前が書いてあったが、名字は横文字で彼女にはどう読んだらいいのか分からなかった。字の並びからみて英語圏ではないような気もするが、定かではない。

乃江流はさっそく、というように身を乗り出す。

「それで。和歌子さん、具合はどう？」

「……………」

メニューを透海に手渡した彼女の手がかすかにびくりと震えた。

「あまり……………良くないです」

「そう……………」

乃江流に落胆の表情が浮かぶ。何のことかさっぱり分からない透海が困惑していると、乃江流が和歌子に告げた。

「透海さんにお話しても構わないかしら？」

「ええ」

和歌子が頷く。乃江流はあくまで穏やかに言葉を紡ぐ。

「貴方の口から話す？ それとも私が？」

「……………私が話します」

ウェイトレスにそれぞれ三種のコーヒーを注文し終わると、和歌子はゆっくりと口を開いた。その眼は茫洋として、遠くを眺めている。

「私、この前に事故に遭いかけたの」

「事故に……………？」

「新聞にも載ったけれど、とても小さかったから気付かなかったと思っ」

和歌子は気弱げに微笑む。透海は黙って続きを聞いた。

「トラックが歩道に突っ込んできてね。時任先生が庇ってくれなかったら……………今頃死んでたかも」

「……………」

透海の様子がかすかに動く。彼女の従兄弟、時任輝也がそのようなことに巻き込まれていたとは知らなかった。言うほどのこともな

いと思ったのだろうか。しかし、輝也にとつて交通事故は鬼門である。かつて、彼は両親をそれで亡くしたのだから。

「運転手にも怪我はなくて、大事には至らなかつただけ……」
和歌子が躊躇うように乃江流を見る。彼女は優しく頷いた。まるで話の続きを促しているようだ。長い髪が垂直に動くのを見るともなしに見ていた透海の耳に、和歌子の言葉が入ってくる。

「それから良く眠れなくなって……あと」
和歌子は膝の上に組んだ手にぎゅっと力を入れた。

「誰かに監視されているような……まるで狙われてるみたいな気がして」

「狙われてる？」
透海が眉を寄せて聞き返すと、和歌子は頬を赤く染める。

「おかしいよね。なんか、自意識過剰みたいで。でも……」
和歌子はそれを高校の養護教諭である野々村に相談し、野々村から乃江流を紹介されたのだという。

「野々村さんとは大学で同期だったのよ」
乃江流は透海に説明するためだろう、そう付け加えた。

「そうですか」
それを聞かされたところで、透海としては当惑するしかない。言葉が見つからずに視線だけをためらわせていると、乃江流は和歌子に対して問いを投げかけた。

「貴方は誰によって監視されているのかしら？」

「えっと……」
和歌子は軽く天井を仰いだ。

「この世界は誰かによって管理されていて。その誰かの手下……み

たいな。多分」

「でも、どうして貴方を？」
「私……わたし」

ウェイトレスが乃江流の前にエスプレッソを、和歌子の前にキャラメルマキアート、そして透海の前にはカフェラテを置いた。透海

はカップに手をあてながら冷めるのを待つ。和歌子といえば運ばれてきたことにも気付いていないようだった。

「監視されているのは皆？ それとも貴方だけ？」

「多分……私だけ」

和歌子の口調は鈍く、それでいて妙に確信に満ちていた。

「それは貴方が悪いことをするから？」

乃江流は次々に質問を口にする。

「そうじゃない。そうじゃないんだけど」

透海はふと顔をあげた。疑念が鎌首をもたげる。何かがおか

しい。その違和感の正体を探ろうと、意識を自分の内に集中させる。

「きつと私はこの世界にとっては異分子で……」

「それはさながら」

乃江流の声が妙に大きく店内に響いた。

「プログラムのバグ、と言ったところかしら？」

びしり、と空間に罅が入った。

「な……？！」

透海は驚いて立ち上がる。辺りを見回すと完全に時間が停止していた。透海と乃江流を除いて。

「……………」

この時、彼女はようやく違和感の正体に気がついた。透海は軽く眼を細めて乃江流を睨む。

「貴方、誰？」

「……………」

乃江流は微笑んでエスプレッソを持ち上げる。彼女がカップに触れた途端、止まっていたはずの湯気が再び動き出した。白く、天井に溶けていく。

「貴方のカフェラテも、飲むようにしましょね」

乃江流がそう言うのと透海のカップからも湯気が立ち始める。和歌

子といえは不自然に頭上を見上げたままの姿勢で、時が止まったのでなければ首を痛めそうだった。

「貴方、私のことを『透海』って呼んだ。だけど」

透海は彼女から視線を離さない。

「私、貴方に名乗っていないわ」

「……………」
「どうして貴方は私の名前を知っているの？」

「……………」
「それ、どうして時を止めたの？」

「『どうやって』ではなく、『どうして』……………か。驚かないのね？」

「これに似たようなことに、前出会ったから」

「そうね……………」

乃江流はエスプレッソをすすりながら上目遣いで彼女を眺めた。どこか面白がっているようでもあり、その表情には余裕があった。

「『北原透海』という名は私にとって意味がない」

「……………」
透海は体を硬くする。乃江流はおそらく、久遠啓と似たよう

な存在だ。すなわち……………。

「この際、『ディープ・ブルー』って呼んだ方がいいわね」

乃江流はそう言うてにっこりと微笑んだ。

5

この世界は偽物だ。

それはかつて久遠啓、いや「アーティフィシャル・インテリジェンス・ナンバー・サーティーン」、通称「ユダ」に聞かされたことだった。

かつて、地球はとある原因で住むに耐えない状況になった。生き

残っていた数少ない人類は受精卵を凍結し、それを管理するコンピュータと共に宇宙船に「方舟」に乗せた。いずれ地球に良く似た環境を見つけることができたなら、受精卵を解凍して新たな地で人間が生きていけるように。確率は低くともゼロではない。そう考えたのだろう。どちらにせよそれ以外に道はなかったに違いない。

その受精卵を生かすため、「方舟」のコンピュータシステム、「ノア」は彼らに「夢」を見せているのだ。人類が地球上に暮らしていた頃の「夢」を。

「夢」を見ながら、卵は次々と生命を終えていく。そして新しい卵が「夢」を見始める。彼らの「夢」を支えるためにプログラムされた数多くの擬似人格が作られ、卵の「夢」である実存人格と一見何ら変わりなく生活している。光速に近い速度の「方舟」の中で凍結されている受精卵の周りでは、時間はゆるやかに流れている。ほとんど変化のない恒常性に守られ、「夢」はただ流れ続ける。

だが、「方舟」の外では違った。襲い来る敵と戦うための「アーク」が準備されており、それは現在四機存在している。人型をした巨大な戦闘機であるそれは、起動に「コア」という名の実存人格を必要とした。「アーク」は「コア」の脳から仮想的に出入力する信号をもとに操縦されるのだ。

現在の「コア」は「アーク」の数と同じ、四人。そのうちの一人が「ディープ・ブルー」。北原透海だ。

「貴方も『エーアイ』なの？」

透海の問いに乃江流は首を横に振る。

久遠啓は「アーク」の「コア」である北原透海専属の「エーアイ」である。彼女だけではなくそれぞれの「コア」に専属の「エーアイ」がいるらしいが、透海にはその役割が良く分からない。何故「夢」の中でまで彼が彼女のクラスメイトとして一緒に居るのか、その理由を彼は「君を守るためだよ」などと言っていたが、本当だろうか。彼の奇妙な馴れ馴れしさは、不快ではないが不可解ではあった。

目の前の女は、どこか彼と似た空気をまとっている。透海は眉を寄せた。

「じゃあ、一体何……?」

「私は『イレイザー』」

乃江流は穏やかに笑う。だが、それはどこか鋭利な印象のある表情だった。

「『イレイザー』?」

それは彼女の知る限り、消しゴム、という意味の英単語だ。乃江流はうなずき、彼女のカップを指差した。

「そう。……カフェラテ、冷めるわよ」

透海はしぶしぶといったようにカップを口元に運んだ。少しぬるいそれは、猫舌である彼女にはちょうどいい温度だ。乃江流はそれを満足げに見守った。

「『イレイザー』、つまりこの世界におけるバグを消し去るための役割、といったところね」

「バグを……?」

呟いてからはっと顔をあげる。

「プログラムのバグ、と言ったところかしら?」それは、乃江流が和歌子に対して言った言葉だった。

「潮崎さんがバグって……どうということなの」
「……………」

乃江流は黙って微笑を浮かべ続ける。

「彼女をどうするつもり?」

質問を変える。すると、乃江流の表情からすっと笑みが消えた。
「それに答える前に、一つ聞いておきたいことがあるの」

「え?」

「あの男、何者なの?」

「あの男?」

鸚鵡返しに尋ねて自らの思考停止にうんざりする。和歌子が語った話の中に出てきた男といえば、ひとりしかない。透海はすぐに

言葉を重ねた。

「もしかして、輝也さんのこと？」

「そうよ」

乃江流は忌々しそうに唇を歪める。

「どうして私が彼女を消す邪魔をするの？ 私の行動は『ノア』の意志にもとづくものなのに。この『世界』に住むものは、誰も彼には逆らえないはずよ」

まあ、「ユダ」は例外だけれど。乃江流はそう付け加える。

「……………」

透海は黙って彼女の顔を見つめた。

「貴方の従兄のことが聞きたくて、貴方をここに呼んだのよ」

透海は乃江流の硬質な瞳をじっと見つめ返した。きゅっと引き結ばれた唇は何も答えない。答えることなど、何もなかった。彼が何者であるか、彼女は知らない。知る必要もない。彼は彼女の従兄で、時任輝也だ。それ以外の何者でもない。

乃江流が痺れを切らして何か口にしようとした、その時。

「あれ、こんなところで何をしているの？」

第三者の声がして、不意に時間が動き始める。和歌子は不思議そうに瞬きをしながら首の位置を元に戻した。透海はゆっくりと振り向き、大きく息を吐く。静寂に慣れていた耳に、喧騒が痛い。

銀髪に赤い瞳、抜けるような白い肌の美少年　それは、久遠啓だった。

6

「お、潮崎じゃないか」

啓の後ろから顔を覗かせたのは理だった。和歌子の眼が大きく見開かれる。

「や、八千代」

「お知り合い？」

乃江流は微笑みながらも、ゆっくりと立ち上がった。

「お友達も増えたところだし、今日はここまでにしておきましょうか」

「え、でも」

まだ何も話をしていないではないか　そう言いたげな和歌子に

乃江流は軽く手を振った。

「お友達と過ごす時間も大切だわ。私と話をすること以上にね」

「……はい」

乃江流は三人分の支払い金額をテーブルに置き、小ぶりなブランドバッグを小脇に抱えて歩み去る。

「おい」

啓の横を通った時、彼女は小さな声を聴いた。

「彼女には手を出すな」

鼓膜を震わせる音波ではない。「ノア」の回路を通じた電気信号。

乃江流はふっと笑みを浮かべた。

「噂通り、随分と彼女にご執心なのね、「ユダ」？」

「そうじゃない」

啓の声が苛立つ。

「彼女に「敵」の正体を暴かれないのか」

「まさか」

乃江流は肩をすくめた。

「貴方が時任輝也に関する情報を隠匿しているんだもの、仕方がないじゃない。今回の任務の遂行にはそのデータが必要よ」

「そのデータに関しては「ノア」がトップシークレットに指定している。僕にはどうしようもないことだ」

「はいはい」

啓の声に剣呑なものが混じり始める前に、ノエルは退散することにした。啓が「ユダ」である彼が本気を出せば、「イレイザー」である彼女などあつという間に消されてしまう。データそのものを

デリートされ、最初から存在すらなかったことにされてしまうだろう。

彼のディレクターはノエルのもものよりもずっと上位で、彼女からの干渉はできなくとも彼からは可能だ。しかも、彼は「ユダ」の名を冠する啓は特別な「エーアイ」なのだ。普通の「エーアイ」が持たない権限を、いくつも「ノア」に与えられている。ノエルは消されるつもりなどなかった。

『それじゃ、また』

彼らの会話が終わるまで1ミリセカンド。その間中、啓は変わらず笑みを浮かべ続けていた。

7

「そつだ、潮崎」

帰り支度を始めていた和歌子に、理は唐突に声を掛けた。

「ちよつと話があるんだけど」

「話？ 何それ」

首を傾げると、彼女のセミロングの髪が片方の頬を覆つ。

「いや、まあいいからさ、ちよつと付き合えよ」

理は奇妙な作り笑いを浮かべながら和歌子を見つめた。和歌子の表情に当惑が浮かぶ。

「別に、いいけど……」

「それじゃあ僕たちはこれで」

「え？ 私ももう帰るわよ」

背中を啓に押され、透海は怪訝な表情をした。啓は片目を瞑り、
「勿論僕も帰るさ」

透海の鞆を彼女自身の手押し付け、持たせる。

「さよなら、八千代君、潮崎さん」

「あ、ああ」

「さ、さようなら」

唐突な啓の行動に戸惑う二人を尻目に、彼は透海を連れ、飄々とした顔で店を出て行った。

店を出たところで、透海は腕を掴む彼の手を振り払う。

「一体どうしたのよ、久遠君」

「君は気が利かないね」

啓は笑った。

「いい雰囲気だったじゃないか。あの二人」

「そっちじゃない」

透海は足を止めた。既に彼らは駅の雑踏の中に入り込んでいる。

透海と啓の間を何人も人間が通り抜けていった。

啓の笑顔が、随分遠くに見える。

「貴方、どうしてあそこに来たの？」

「あそこ？」

「あの、ノエルとかいう人が時間を止めていたのを解除したでしょう」

「……………」

啓はただ静かに微笑んでいる。

「どういうことなの。潮崎さんがバグって……………どういうこと。『イレイザー』って何。何を消すの」

答えない啓を、じっと睨んだ。

「本気で……………潮崎さんを？ 何故？ 何のために？」

「君は」

啓の表情から笑みが消え、苦しげに言葉を絞り出す。

「『アーク』の『コア』だ」

「……………」

「『アーク』に乗って敵と戦い、敵を殲滅する。そうすれば
白い手のひらを広げて見せる。」

「この世界は存続するんだ。それ以上のことは、何も
敵って誰なのよ」

透海は低く呟いた。こめかみが、痛む。

俯いた視線の先を、色鮮やかな靴たちが通り過ぎていった。

「どうして教えてくれないの。他の『コア』たちも言っていたわ。

それだけは絶対に教えてくれないって。何故なの」

握り締めた手は汗ばんでいた。

「敵って」

「……………ごめんね」

啓のつぶやきが聞こえた。

「君を苦しめて、ごめん……………」

「何よ、それ」

顔を上げた透海の前で、啓は何故か泣き出しそんな顔をしていた。

「久遠、君？」

「君を守りたいんだ。それは、本当なんだ。でも、どうしたらいいのか良く分からない」

啓は泣き笑いのように顔を歪めた。

「僕が『エーアイ』だから、わからないのかな」

「……………」

透海は言葉を失う。啓のいう言葉は耳に入ってきていたが、理解はできなかつた。ただ、啓は自分のためにこんな辛そうな表情をしている。そのことだけは、痛いほどに分かっていた。

並木道が歩道の上に影模様を作っている。その下を理と和歌子はゆっくりと歩いていく。

「話って、何」

和歌子がつぶやいた。

理はちらりと彼女の横顔を見た。夕陽が陰影を落とし、彼女の表情は良く見えない。

「あの女、誰だ？」

「カウンセセラよ。野々村先生に紹介してもらったの」

「カウンセセラ？」

理の声が少し大きくなり、歩みが止まった。

「お前、何か悩み事でもあるのか？」

「……別に」

和歌子もつられて足を止める。

「そういうわけではないけど」

理の問いはあまりにも朴訥すぎた。和歌子の唇に苦笑が浮かぶ。

彼はいつだってそうだ。真っ直ぐで、欺瞞というものが無い。単純だが粗野ではなく、複雑な心の綾には理屈ではなく直感で迫ってくる。動物的な勘だろうか。

乃江流や透海に説明したことを、彼には話す気にはならなかった。分かってもらえるはずもないと思っただし、彼に話して笑われるのだけは嫌だった。きつと、誰に笑われるのよりも辛い。

結局和歌子は曖昧に誤魔化すにとどめた。

「ま、色々あつてね」

「そうなのか？」

理は眉を寄せる。整った顔立ちが、妙に子供じみているように見えた。

「友達も心配してたぜ？」

「友達？」

「ああ。俺、相談されちゃってさ」

「何で?!」

和歌子が大声を出す。理はたじろいだように一歩退いた。

「な、何でって」

「何で八千代に相談するのよ。私のこと」

「さあ。……そっぴや何でだろうな」

改めて不思議に思ったように首を傾げる彼を見て、和歌子は脱力して肩を落とす。

「まあいいわ。とりあえず帰りましょ」

「え、でも」

まだ何も話していない　とりあえず理は歩き出した和歌子の後を追った。和歌子は早足で歩いているが、歩幅の広い理はすぐに追いついた。

「そういえば」

理はふと呟いた。

「こういつのつて、前もあつたような気がする……」

「こういつのつて何？」

和歌子が振り返った。理は彼女を見て、穏やかに微笑んでいる。その表情に、和歌子は息を呑んだ。

「こんな感じ」

風が彼の短い髪を乱す。浅黒く日焼けした肌に、くっきりした顔立ち。真っ黒な瞳が優しい光を宿していた。

「理君が、引つ越す前のこと……？」

和歌子は口をついて出た言葉に、はっとする。

サトル。

そう、確かに彼女は彼をそう呼んでいた。それはいつのことだっただろう。

「ワカ……」

理は聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声で囁く。

理が引つ越す前ではない。もっともっと最近のことだ。しかし、そんなはずはない。記憶もない。だが、確かに　「おぼえている」。

「……………」

困惑した表情を浮かべ、二人はただお互いの顔を眺めていた。

第三章 マボロシハカゲ

1

放課後、屋上で待っています。

「……………」

彼はそのメモを視線で追い、やがてふう、とため息をついた。

「俺、誰かに恨まれるようなことしたかなあ」

靴箱をカシヤンと閉めて、上履きに履き替える。メモは学生服のポケットに突っ込んだ。

「おはよう」

背後からの声に驚いて、彼は体を硬直させた。首をめぐらせて彼女の姿を認め、小さく微笑む。

「おはよう」

「どうかしたの？ ぼうつとして」

首の角度にあわせてセミロングの髪が揺れる。

「うつん、何でもない」

彼は不自然ではないように手を動かし、ポケットの上からメモに触れた。紙がこすれて、かざりと音をたてる。

差出人の名前はなく、筆跡は女性らしい少し丸みを帯びていた。

彼には心当たりがない。

「……………ま、行ってみるか……………」

彼女はその呟きには気付かなかったように、彼の側をすり抜けて行った。

ホームルームが終わった後、彼は誰も見ていないことを注意深く確認して、屋上への階段を上っていった。おそらく悪戯だろうとは思っていたが、だからといってすっぱかすつもりは彼にはない。そもそもそういう考えすら浮かばなかったのだが、そういうところが

彼女に馬鹿正直ねと笑われる原因かもしれない。だが彼は別にそれで構わなかった。

先生たち以外は皆知っている、鍵の壊れた屋上への扉。彼は警戒心もあらわにゆっくりとノブを捻り、音を立てないように屋上へと踏み出した。

風が強い。彼は目を細めた。前方に人影が立っている。漆黒の髪を、肩の上くらい。彼女よりも少し短いくらいのところまで真っ直ぐに切り揃えた少女。彼と同じ中学の制服を着ていた。少女は少しも笑っていない。屋上に呼び出して恋愛の告白をするような、そんな雰囲気では全くなかった。

彼は静かに尋ねる。

「誰だ？」

「……………」

少女は答えない。彼はふと、彼女が変わった瞳の色をしていることに気付いた。深い深い、翠の色。外国人のようには見えないが……。

少女はやがて口を開いた。まるで何かを試すように、じっと彼を見つめている。

「『…………』君ね？ 私のことはミワって呼んでくれればいいわ」

「みわ？ どのクラスだ？」

「私、制服を着ているの？」

ミワと名乗った少女は、涼しい顔で彼の懐疑の視線を受け止める。「じゃあ、それは貴方が『私が着るに相応しい』と考えている服装なのよ」

「意味わかんねー」

彼は軽く肩をすくめる。

「からかって遊びたいんなら他の奴にしなよ。俺も暇じゃねえんだ」「そういうわけにはいかないわ」

言い捨てて踵を返した彼の背後から、声が追いかけてくる。

「貴方は『……………』の『コア』になるのよ」

「え？」

彼はドアノブに伸ばしかけていた手を止めて振り向いた。ミワの瞳が思いのほか近くで輝いている。いつの間に追って来たのだろう。「そして、敵と戦うの」

「テキ？」

「この世界を滅ぼしたくなければ」

ミワがまた一步、近づく。彼は吸い寄せられたように、彼女の瞳をじっと見つめていた。底がないように澄み切った、その奥。

「貴方は、」

『サクリファイス零号機』の『コア』になるのよ。

その言葉が、彼の運命を決めた。

2

「……！！」

理が眼を開けると、そこは見慣れた天井だった。

「何だ、あれ……」

手のひらはじつとりと汗ばんでいる。最近彼を苛んでやまない一連の「夢」。その続き。いや、今の「夢」こそが全ての始まりだったのかもしれない。

『サクリファイス』……犠牲って意味、だよな？」

つぶやいて、ぞつと身を震わせた。犠牲。ぞつとしない響きだった。

「そういえば」

理は仰向きだった体を九十度右に回転させる。

「夢の中にも……ワカが出てきてたな」

どういつことだろう。中学時代には離れ離れだったはずなのに。どうして「夢」の中では同じ中学に通っているのだろう。

「……なんで」

短い髪の中に左指を埋める。

「なんなんだよ、これ……」

胸の奥がざわめいていた。何か小さな穴が開いて、そこから徐々に闇が侵蝕してきているような 怖い。

「あの女」

翡翠色の目をした女。ミワと名乗った、彼の「夢」をいざなう存在。

「久遠に似てる……」

整いすぎた造形と浮世離れた雰囲気。それでいて何かを悟っているかのように全てを超越した虚無感。

「……ミワ、か……」

理は再び目を閉じた。

3

輝也の住むマンションで、透海と彼は向かい合って夕食をとっていた。透海の両親はそれぞれ用事で外出しており、そういうときは輝也が透海の面倒を見ることになっている。

彼の作ったクリームシチューをすすっていた透海は、ふと思い出したように手を止めた。

「ねえ、輝也さん」

「何だい？」

「『ノア』……あ、久遠君もだけど。何か隠してることがあるんじゃないかしら」

「たとえば？」

輝也は首を傾げる。

「色々あるけど、一番は敵の正体」

透海は視線を落とした。

「他の『アーク』の『コア』も言っていたわ。それだけは、『エー

アイ』たちが決して教えてくれないって」

「敵のこと。気になっている？」

「当たり前よ」

透海は苛立ったように、勢い良く水を飲んだ。空になったコップをテーブルの上に強く置く。

「訳の分からないものと戦えって言われて、殲滅して。戦いなんて相手の正体が分からなきゃ本来やってられないことだと思うもの」

「謎は、恐怖を生むからね」

うなづく輝也だが、透海は首を横に振った。

「怖くはないの。刺激を直接神経にインプットされても、やっぱり肉体があるのとないのとは違うのよ。現実感がないっていうか…

…」

「へえ、そうなんだ」

輝也は小さくため息を洩らした。透海が、自分の従妹が、世界の命運を賭けて戦っている。あまりに現実感のない「現実」。

「やっぱり機械が生体機能に迫るのは難しいことなのかな」

「そうなのかもしれない……」

透海は急に声のトーンを落とした。「エーアイ」だからなのかな。そう言っただけに悲しげに微笑んだ啓を思い出す。彼は人工知能だ。どんなに人間らしく見えても、人間ではない。

気持ちを切り替え、彼女は話を続けた。

「私たちが呼ばれる時って、いつも既に『アーク』は戦闘配置についているのね」

「そうなの？」

最近、透海と「ノア」や「アーク」にまつわる話はしていなかった。輝也は興味深く耳を傾ける。

「気がつくとも目の前に敵がいる。そしてそれを倒せって言われる。どうして戦わなければならぬのかもわからないまま……まあ、余裕がないから、一々気にしていられないのもあるけど」

彼女は長い睫毛に縁取られた瞼を伏せた。

「時々これでいいのかなって、自分が間違っていないか不安になるの」

「……………」

「彼らの言っていることが本当だって根拠はどこにもないのよ。世界ってものが善や悪で割り切れるものじゃないことくらい私にも分かっている。向こうが攻めてくるから向こうが悪い、なんて言えないでしょう？ 本当はこっちが攻めてるのかもしれない。向こうも自分たちを守って……………」

透海は言葉を切った。

向こうも、自分たちを守って？

「……………まさか」

「え？」

輝也は思わず聞き返し、やがてあることに思い当たって息を呑んだ。

「……………今、僕たちは同じことを考えているのかな」

「……………分からない、でも」

透海は思わず肘を突いて顔を覆った。

「もしそれが本当なら」

「全ての辻褄があう……………」

輝也のつぶやきを聞き、透海は小さく呻いた。

「どうしよう」

「透海ちゃん？」

震える声に、輝也は腰を浮かした。

「私……………人殺しなのかもしれない……………！！」

「……………」

輝也は言葉を失った。伸ばした手が、彼女の肩を掠めて落ちる。

「どうしよう……………」

透海は顔を上げることができなかった。

ある日の放課後、理は一枚のメモを片手に駅前のセンター街を歩いていた。一週間ほど前に乃江流と会った喫茶店の近くである。メモには、和歌子から聞いた乃江流のオフィスの住所が記されていた。彼女と話をしたい、と思った。和歌子のことにも気になるし、また自分の「夢」のことも彼女なら何か分かるのではないか。カウンセラなら、話くらいは聞いてくれるだろう。

商店街を中ほどまで歩き、細い路地に入る。さらに二十メートルほど進んだところで、理は足を止めた。細い間口のビルがある。七、八階建てくらいの高さで、玄関のこざっぱりとした様子からまだ建築されてそれほど経っていないのだろうと思った。

「……………」

理は数分ほどただじっとそのビルを見上げていたが、やがて、

「よし」

意を決したように呟くと、扉を開けて中へと入っていった。

「『ノア』は」

乃江流は気だるげに呟く。

「私に彼女を消して欲しくないのかしら」

その問いに答えるものは誰もいない。

「不要なデータはすぐにデリートしなきゃ追いつかないのに」
人類を載せた箱舟たる「ノア」には余裕などないのだから。

「なのに、どうして」

彼女には分らない。

「どうして私の邪魔を……………？」

時任輝也。そう目立つ男ではなかった。それでも、あの状況で彼

は随分冷静に対応していたようにと思う。そもそもとっさにあの少女を救えたこと自体が驚きだった。避けられるタイミングではなかったはずだ　普通なら。

「あの男、何者なの？」

乃江流は目を閉じ、男の顔の変わりに別のものを思い浮かべた。

潮崎和歌子。

そして、

八千代理。

「記憶操作が上手くいっていないのね」

それは恐らく、バグのためだ。

「やはり『ゴート』とは回路が違うからなのかしら。それとも……」

乃江流ははっと身を起こした。閉じていた眼を開くと、そこは彼女のオフィスである。身を横たえていた来客用のソファに座りなおし、やや怪訝そうな面持ちでつぶやく。

「……彼が、来た？」

6

「八千代君、すごい勢いで帰ったねえ」

啓のいつもと変わらぬのほほんとした声を聞きながら、透海は週番日誌をつけている。

「何か用事でもあったのかな」

「知らないわ」

「……………」

啓は僅かに眉を跳ね上げる。

「何かあったのかい？」

「どうして？」

「何だか不機嫌そうだけど」

啓は透海の座っている前の机に腰掛け、彼女の顔を覗き込んだ。

「近いわよ」

言われて啓は苦笑し、僅かに身を引く。

「透海さんって、自分の領域に他人を入れたがらないよね。警戒心が強いっていうか」

「普通だと思うけど？」

透海は几帳面な細い文字を書きつけながら眼も上げない。

「……………」

啓は口をつぐんだ。今日は木曜で、月曜から始まった彼らの週番は四日目である。月曜日の彼女の様子は普通だった。おかしくなり始めたのが火曜日。それ以来水曜、木曜と日を経るに連れて彼女の機嫌は悪くなっている。

啓は尋ねた。

「月曜、僕何かしたかな」

「別に？」

透海にとっては啓がそのような問いに至るということなどお見通しだったのだろう。真一文字に引き結ばれていた唇に、苦笑のようなものが浮かんでいた。

「貴方は何もしていないわ」

透海ははっきりとそう言った。彼女の夜空のような色の瞳がまっすぐに彼の眼を射ている。

「これからも……………そしてきつと、これからも」

「それ、どういう……………」

戸惑う啓を尻目に、透海は日誌を畳んで立ち上がった。

「じゃ、私帰るから。お疲れ様」

「ちよつと、北原さん！」

啓は思わず大声を出して彼女の腕を掴んでいた。

「……………」

透海はゆっくりと振り返る。

「手を、離して」

「君が何を言っているのか、僕には分からないよ」

分かりたいのに。彼女のことを、もっと分かりたい。近付きたい。苛立ちのような、悲しみのような、怒りのような。何とも説明のつかない感情が彼を襲う。

「……………」

透海は口元だけで笑った。

「そんなに私の機嫌を取らなくてもいいわよ」

「え？」

「敵とはこれから戦う。それしか私たちの生き残る道がないのなら、ね」

「……………」

啓はただただ瞬きを繰り返す。透海は彼から視線を外した。

「手を離して」

「僕は……………」

「離して」

「……………」

啓はしばらくの逡巡の後、彼女の腕から手を離した。離れていく彼女の熱が、名残惜しいとさえ思う。体のどこかがじくじくと痛かった。それがどこなのか、彼にはわからない。とっさに自己診断プログラムを走らせるが、どこにも故障はなかった。ではこの痛みは一体何なのか……………。

「一つ、聞きたいことがあるの」

透海は彼と目を合わせようとしない。痛みがじんわりと増した。

「私たちの敵のことよ」

「それは……………」

「何も言わなくていいわ」

透海に遮られ、啓は口を噤む。何故、自分は彼女の言う通りにしようとしているのか、わからない。だがそうすることでこの痛みはわずかでも薄らぐのではないか、そんな期待があった。

「ただ、頷くか否定するかだけでいい」
「……………」

透海の伏せられていた瞼がゆっくりと持ち上がる。その瞳に映る自分は、見たことのない表情をしていた。やはり自分はどこかが壊れているのか…………。

「私たちの敵は」

啓はごくりと唾を飲む。透海はささやくように、それでいてはっきりとその言葉を口にした。

「人間なのね？」

7

理がオフィスの扉をノックすると、間髪入れずに声が返ってきた。女の声だ。

「どなた？」

「あ、あの」

こういうシチュエーションには不慣れな理は、少し慌てた。

「すみません、えっと、急で、予約とかしてなくて……………」

「今は来客もないし、構いませんよ」

声が徐々に近付いてきて、理の目の前の扉が開いた。見覚えのある美女の顔が、驚きに満ちる。

「あら、貴方……………？」

「潮崎に聞いて来ました。八千代といいます」

「下のお名前は？」

「さ……………理」

「理君、ね」

乃江流は長い髪を指先で払い、微笑んだ。

「ようこそ。中へどうぞ」

「お邪魔します」

理はぎくしゃくと頭を下げ、彼女の後に従った。

パステルカラーの壁とソファ、木目調のテーブル。壁際に小さなサイドボードとデスクが置かれている。理は何となく幼稚園を思い出した。

「お飲み物は何かいいかしら。紅茶？ コーヒー？ それとも……」

「あ、じゃあ紅茶で」

理は落ち着かない様子でソファを見つめる。乃江流はそれに気がついたのか、笑みを含んだ声で言った。

「どうぞ、お座り下さい」

「あ。どうも」

理は座った後も視線が定まっていない。乃江流はポットに茶葉を入れ、お湯を注いだ。

「何か、お話があるのよね？」

「は、はい」

「それは潮崎さんのことかしら？ それとも」

「あ、それも……あります」

理はようやく心を決めた、というように視線を上げた。

「あいつ、最近やっぱりおかしいんで」

「貴方」

乃江流は二つのマグカップを持ったままゆっくりと振り返った。

口元には優しい笑みが浮かんでいる。

「潮崎さんのお友達なの？」

「ええ。幼馴染です」

理ははつきりと発音する。

「大事な友達で……それで」

膝の上で握り締めていた拳がかすかに震えた。

「俺は……多分、彼女が好きなんです」

「……………」

乃江流が驚いたように目を見開いた。理は彼女を睨みつけるよう

に見つめる。

「昔から、俺はあいつが好きだったんだ」

彼らはお互いに一人っ子で、幼い頃からいつも一緒に遊んでいた。いつから好きになったのか、どうして好きになったのか、そんなことは知らない。すっかりしているようで意外にどんくさい彼女のことが気に掛かって仕方がない、それだけのことだ。そして……。

「……俺は、ずっとそれが続くと思っていた」

糸が切れたように、理はうなだれる。乃江流は黙ったまま彼に近づき、その目の前に紅茶を置いた。そして理と対面するような形でソファに腰掛ける。

「おかしいんだ。ワカモ、俺も。なんか、記憶が混乱して」

理のつぶやきは、既に独り言のようになっていた。

「転校していたはずの時期に、あいつと一緒にいた思い出がある。

最近変な『夢』ばっかり見てるし……」

「変な『夢』？」

乃江流は顔を上げた。その表情に笑みの色はない。俯いている理は、それに気付かなかった。

「そうです。変な、『夢』……」

「そう……」

乃江流は一瞬目を閉じ、そして開いた。

「ねえ、理君？」

理は構わず独りでぶつぶつとつぶやき続けている。

「『夢』って何かしら」

「え……？」

その言葉に彼は顔を上げ、息を飲んだ。目の前に座る乃江流彼女に変化が起こっていた。先ほどまで着ていたサマースーツは跡形もなく消え、彼女が今身にまとっているのは体にぴったりしたラインのボディースーツ。それも、銀色にぴかぴかと光っている。

理ははつとした。彼は、彼女を見たことがある。以前、学校の体育館の屋上で……。

「『夢』って何だと思う？」

「え……」

理はかるうじて口を開いた。答えなければいけない。何故かそんな気がする。

「『夢』……？」

彼が答えられないでいると、ノエルはそれを許すかのように嫣然と微笑した。

「とある作家、加川霧子はこんなことを言っているわ」

長い人差し指をぴん、と立てる。理の視線はそれに吸い寄せられた。

夢を見る理由はただ一つである。それは現実を安定させるためであり、そしてそのことが同時に逃避をも誘導する。

「……ってね」

「それ、どういう……」

「どういうことかしらね？」

ノエルは人の悪い笑みを浮かべながら理を見ている。

「う……」

彼の背中から嫌な汗が吹き出した。

8

「……………」

啓は静かに息を吸い、そのままゆっくりと吐き出した。

「どうしてそういう結論に至ったのか、できたら教えて欲しいな」

「否定しないということは、肯定と受け取るわよ」

彼を睨みつける透海に、啓は寂しげな視線を向けた。

「……………」

薄い唇がわずかに開く。

「真実を隠すのと、嘘を言うのとは違う」
啓はつぶやいた。

「僕は、君に嘘はつきたくない。たとえそれが『エイアイ』として
は間違った選択だとしても……ね」

「……………」
彼は少しだけ微笑んだ。

「どうかしてるな、僕」

「久遠君……？」

「君のせいだからね」

彼はそう決めつけ、やがてため息をついた。

「それで どうやって、君はさっきの結論に至ったのかな」

彼は透海が何か言おうとする前に言葉を継いだ。

「そう どうして僕らの敵が『人間』だって思ったのかって、ね」
「……………」

透海は目を伏せる。

「簡単なことよ」

「かんたん？」

「ええ。ヒントは沢山あったから」

最初のヒントは「敵の正体を『エイアイ』が『コア』となる人格
に対して秘密にしなければならなかったこと」 それそのものだ
った。

「私たちに知られてはならない理由は何か。いくつか考えられたけ
れど」

「たとえば？」

「たとえば……」

透海は顔を上げない。だがその口調はしつかりとしていた。

「それを知った私たちが、戦意を喪失する場合」

「……………」

啓は黙り込む。

るべきだったのよ」

「……………」

啓は息をするのも忘れて彼女を見つめた。

決して知らせてはならないはずの真実。彼女は既にそれに到達している。そして……。

「ねえ」

透海は顔を上げた。啓は一步後退する。一瞬泣いているのかと思っただが、そうではない。彼女は微笑んでいた。

「そろそろいいんじゃない？」

「何がだい？」

また、痛みが生まれる。だがそれは先ほどまでのものとは少し違っていた。頬の紅潮と、動悸を自覚する。啓は混乱した。これが故障ではないのだとしたら、自分は一体どうしてしまったのか。

彼女は一体、自分にとって何なのか。どうも彼女にはペースが乱される。先ほどの彼女はひどく弱々しくて、どこかに消えてしまいうちに見えた。それなのに、今はこんな笑顔を見せている。

「どうして、私たちは『敵』と戦っているの？ それと」

透海はまっすぐに啓を見つめた。その視線は、いつもの曇りのない色をしている。彼は何故かほっと安堵した。その暗い色は、彼を落ち着かせてくれる。

「ノエルって人。一体何をするつもり？」

「……………」

啓は躊躇った。彼の一存で彼女に全て明かしてしまう訳にはいかない。「ノア」をこれからも維持していくためには、破ることのできない不文律というものがあるのだ。彼女、は既にそのうちの一つを侵してしまっている。

すなわち 彼女は他の方舟の存在に気付いている。

「『夢』……」

ノエルは歌うように告げる。

「『夢』もまた、現実」

「何を」

理は動揺する。この女は何かとんでもないことを言おうとしているのかもしれない。だが、不思議と耳を傾けることしかできなかった。

「貴方は今、『夢』を見ているのかしら？ それとも現実を生きている？」

「……そ、それは」

理は俯いて考える。

ノエルは急かすこともなく彼を見つめた。

「わ……」

長い時間が過ぎ、やがて理は口を開く。

「わから、ない……」

実際のところ、そんなことは彼に判りようがないのだった。彼は今まで「夢」の中で「これは夢だ」と悟れたことがない。特に最近には「夢」だと片付けられないほどリアルな「夢」を見たり、しかもそれが昼間に訪れることもあったり、「夢」と現実の境目がひどく曖昧になっているのだった。そんな彼に、ノエルの質問に答えることなどできるはずがない。

まして今、目の前にいる彼女は現実味のない未来人のような格好をしているのだ。

「正直ね」

ノエルはくすくすと笑った。

「でも、それが一番正しい答え」

「正しい？」

「そう」

ノエルは顎を上げて頭上の方を眺める。

「そうね……貴方には見せてあげた方がいいのかもしれない」
「何を？」

「……………」
ノエルは黙って窓際へと歩んだ。鍵を開け、一息に開け放つ。
街はしんと静まり返り、音一つ聞こえない。まだ夕方だったはずなのに、空は灰色で薄暗かった。あまりにも異常な光景に、理は思わず立ち上がる。

「こ、これはどういう……………」

「『ノア』が一時的にデータ処理を中断しているの」

ノエルはそっけなく答える。

「もうそろそろメモリがパンクしそうなよねえ……………」

「のあ？ めもり？」

理は目を白黒させる。ノエルは振り向いて苦笑した。

「貴方、潮崎和歌子のこと以外は何も憶えていないのかしら？」

「え？」

彼女の名前に反応し、理はノエルを見つめる。ノエルはその艶やかな唇でいくつかの単語を呟く。

「ゴート」

「サクリフェイス」

「零号機」

「オペレータ」

「ミワ」

「実存人格」

「擬似人格」

「ワカ」

「あ……………」

ぶる、と理の体が震える。

何かを思い出そうとしている、いや、彼は既に思い出しているは

ずなのだった。何故ならそれは全て。

「ゆめで、聞いた……」

「……………」
ノエルは再び窓の外を眺めた。

「ほら、見てご覧なさい。今なら見えるわ」

「……………」
理は強張る足を無理に動かし、外を覗いた。ノエルの指に示された空を見上げ、あつと息を呑む。

そこには月が　今この時間にあるはずのない月がぽっかりと浮かんでいた。いつもよりずっと大きく、そして薄く透き通っている。

「あれのことを、私たちは『幻月』と呼んでいる」

「げんげつ？」

「そう」

理の耳のすぐ側でノエルが囁いた。

「あれが貴方たちの、世界だったものなのよ」

第四章 カゲハネムリ

1

理は全てを思い出していた。目を見開いて空を見上げる。そこにはぼんやりとした白い半透明の球体 幻月。

「俺たちは……負けたのか」

つぶやき、強く強く拳を握った。

「あの時、俺は……」

彼の眼前へと迫った、闇色の機体。あらん限りの力で応戦したが、舞うような軽やかな動きに翻弄され、とどめの一撃を叩き込まれた。煌く青と、砕け散る白。彼の駆る「サクリファイス」は吹き飛んだ。

「なのに、何で……」

理は自分の手を見つめて握り締める。

「何で、俺は生きてるんだ」

「貴方はどこまで知っていたのかしら？」

ノエルの声に彼の意識は現実へと引き戻される。理は険しい視線でノエルを睨んだ。彼女は涼しい顔で微笑んでいる。

「そうね……たとえば、貴方の世界は何でできていたのか」

「地球が……」

「ごくりと唾を飲む。」

「地球から脱出してきたんだって、聞いた。人間は、地球を棄てた」
「そうね」

「人類は滅びかけていたけど、何とか自分たちを運べる方舟を、宇宙船を作って 何十億の凍結受精卵と共に宇宙へと脱出した。それが、『ゴート』」

「上出来だわ」

ノエルは感心したように鼻息を洩らした。

「そりゃどうも」

理はそっけなく言い捨て、再び空へと視線を投げる。

「で、あれが……俺たちの方舟だったものなのか……？」

「貴方は気付いていたんじゃないのかしら」

ノエルは静かな口調で言った。

「方舟が一つではない、ということに」

「……………」

理は険しい表情で口を噤む。彼の拳は小さく震えていた。

「人間たちはずっと、戦争をしているの。メモリとエネルギーを奪い合うために」

ノエルの口調は、まるで嘲笑っているようだった。

「かつて地球上でそうであったように、ね……………」

「俺たちは負けた」

理は呟く。

「負けたんだ……………」

幻月は徐々にその輪郭を空に滲ませ、消え始めている。

「『ノア』が『ゴート』のメモリを取り入れている」

ノエルは空を見上げて微笑んだ。

「もうすぐ完了ね」

「俺たちは」

理は彼女をにらみつける。

「俺たちはどうなるんだ」

「……………」

すう、と彼女の顔から表情が消える。

「聞かない方がいいと思うけれど」

「消されるのか」

理は唇を噛み締めた。

「やはり、そうなのか……………」

「……………」

ノエルは答えない。ただ、哀れむような眼差しで理を見返してい

るだけだった。

2

誰かに呼ばれたような気がした。

和歌子は眼を開ける。そこは見たこともない空間だった。真っ白い部屋。家具の類は何もなく、窓すらもない。壁や床に敷き詰められているタイルは光沢がありながら衝撃を吸収しそうな変わった素材で、一片が数十センチほどもあった。

彼女はゆっくりと辺りを見回し、やがてその視線が一点で止まる。
「……誰……？」

その声に反応して振り向いた男の顔に、和歌子は息を飲んだ。

白銀の髪に血の色をした瞳、白い肌。服もまた光沢のある白。部屋と同じ、およそ色素という色素から見放されたような姿の中、目だけがひどく目立っている。

こんな男に会ったことはない。ないはずだ。だが、どこかで見た覚えがある。

「潮崎和歌子さん、だね」

男は穏やかに微笑む。その声を聴いて彼女は小さく叫んだ。

貴方は……！

だが彼は彼女の思考を読んだように、小さく首を横に振った。

「僕は『彼』ではないよ」

「え……」

「僕は」

彼は和歌子を見つめた。その視線の冷たさに、彼女の背を冷たいものが這い下りる。

「神 いや、君にとってはきっと」

優しく、それでいて隙のない声だった。

「死神だな」

和歌子はぶるつと身震いした。男はただ静かにそこに佇んでいる……。

3

時間の止まった世界の中、彼らはそこに二人でいた。教室は薄暗いが、電灯を点ける気にもならないし、そもそも点くかどうかも分からなかった。

透海は目の前にいる少年から目をそらし、空を見上げている。啓はそんな彼女を、少し悲しげな瞳で見つめていた。

「そうだったのね……」

透海は呟く。

「私が、八千代君を……」

白い機体が千切れ飛んだ瞬間を、彼女は覚えている。紙吹雪のようだと思った。何も感じていなかった。まさか、あれが同じ人間の操るものだったなんて……。

「君のせいじゃない」

「それ、慰めのつもり？」

透海は皮肉っぽく口の端を吊り上げた。

「僕は、ただ……」

啓は躊躇いがちに口を開くが、透海の横顔を見てはっと口をつぐんだ。

彼女の瞳には薄い膜が張っていた。それはゆらゆらと揺れ、やがて耐えかねたように滴り落ちる。

やはり言うべきではなかった。啓は心の底から悔やんだ。

後悔。それは「エーアイ」である彼が初めて経験する気持ち。それはひどく苦くて、彼の端正な口元を歪ませる。

「メモリもエネルギーも、いつも枯渇しているんだ」

啓は揺れる心とは裏腹に、淡々とした口調で透海に語った。

「生命の維持には 莫大な情報量が必要だから」

「それを、奪い合っているのね」

透海の頬は青ざめている。

「私はそのために戦っていたのね……」

「……………」

「それで」

彼女が振り向いた。啓はとっさに顔を臥せる。これから尋ねられることの予想は既についていた。だからこそ、顔を上げたくない。彼女の眼を見たくなかった。

「あの、ノエルって何者？」

「……………」

「潮崎さんに何をしようとしているの？」

「……………」

「潮崎さんも……『そう』なの？」

「……………」

透海は問いを重ねるうちにふと気がついたようだった。

それはさながら、プログラムのバグといったところかしら？

そう語った、ノエルの言葉を思い出す。

「……………」

透海は手で顔を覆った。

「透海さん……………」

啓が搾り出すようにその名を呼ぶ。透海は目をそらし、教室の窓に駆け寄った。

そらに浮かぶ幻月。徐々に溶け始めている。

「潮崎さんは……………あそこにいるのね……………」

「……………」

啓は彼女の髪にそっと触れた。彼女は少し震えて、そして振り返った。その泣き顔に、痛みが走った。鋭く、甘い痛み。もっと彼女に触れたい、だが拒絶されるのは怖い。彼女の笑顔が見たい、涙を拭い去りたい。手をそっと動かして、彼女の目元に触れる。彼女は

身じろいだが、今までのように払いのけはしなかった。

「久遠君」

「うん？」

「ごめんね」

意外な言葉に、啓は目を瞬いた。

「……どうして君が謝るんだい？」

「……………」

透海は唇を噛みしめ、俯いた。そのうなだれた肩に、彼は手を伸ばす。

「僕は」

触れるか触れないかの強さで、彼は彼女の体の周りに腕を回した。

「君に、生き続けて欲しい。僕を、生かしてほしい」

「久遠君……………」

「奪って、殺して、戦って、それでも…………君とともに、生き続けた
いんだ」

「……………」

透海は動かない。啓は目を閉じる。この心は、僕だけのもの。

たとえ人工的に作られたものだとしたって、構うものか。

「僕は 君が」

かくり、と透海がくずおれる。啓は力の抜けた彼女の体を支え、

微笑んだ。

「…………だから、側にいる」

また、戦いが始まる。

「……………」

和歌子は黙って目の前の男を見つめていた。死神だ、と名乗った男。だがプラチナブロンドの髪の下から覗く瞳は穏やかで、彼女に

少しも恐怖を感じさせない。

「不思議だった」

彼はぼつり、とつぶやいた。

「え？」

和歌子は聞き返すが、彼は無頓着に話を進めていく。

「『ゴート』の実存人格でもない君が、どうしてここに残ることができたのか」

「……な、」

和歌子の体が細かく震える。

「何を言っているんですか」

聞いてはいけない。誰かが彼女の耳元で叫んでいる。聞いてしまつたら戻れなくなる。聞く前の自分には、もう……。

「何故君が、『ノア』の中に生きているのか」

彼は淡々と言葉を紡ぐ。

和歌子は耳を塞ごうとした。しかし手は動かない。彼女は硬直し、棒立ちになってただ彼を見つめている。

「そもそも『八千代理』の存在すら、イレギュラーだ」

「サトル……？」

和歌子がぴくりと反応する。男は彼女を見ていない。視線を彼女の後方、どこか遠くへと投げているようだった。

「彼の機体は戦闘中、『デープ・ブルー』の攻撃によって爆破された」

「……………」

和歌子には彼が何を言っているのか、全く分からない。ただ、嫌な感じがしていた。心臓を冷たい手でわしづかみにされているような、少しでも力を込められれば全てが終わってしまうような、そんな感覚。

「勿論、機体の中に彼の実体があった訳ではない。彼の実体は『ゴート』の中で夢を見ているただの卵……夢の一部に干渉して、どうか意識を機体に繋げているに過ぎない」

彼は彼女に話しかけているつもりなどないのかもしれない。独り言をつぶやいているような調子だった。

「だが、フィードバックは避けられない」

不意に、彼は和歌子を見た。赤い瞳が冷ややかに彼女を映し出す。彼女はびく、と震えた。

男は淡々と問いかける。

「君は知っているかな……真っ赤に焼けた焼き鏝に見えるもの、たとえそれが本当に熱くなくても、それを押し当てられるだけで皮膚に水ぶくれのできる人がいる。熱い、と思っ込んでいるからだ」

「……………」

男は彼女に問いかけながらも彼女の答えを聞く気は特にないように、彼のペースで話を進めていく。

「同じことだ。肉体が実際のダメージを受けなくても、その場合と同等の入力を神経に受ければその分のフィードバックが現れる」

男は、再び和歌子から視線をそらした。

「『八千代理』の乗っていた機体は確かに吹き飛んだ。彼の意識が正常に保たれるわけではない。強すぎるショックによって死亡するのが当然……………」

「さ……………」

和歌子の唇から罅割れた声が漏れる。

「サトルは……………」

彼女は勇気を振り絞って男を睨みつける。男は無表情に彼女を見返した。彼女の眼光になど全く痛痒を感じていないのだろう。

「サトルは、生きているわ!」

「生きている……………」

鸚鵡返しにつぶやき、男は首をかしげる。妙に子供っぽい動作だった。

「そう、彼はここで生きています。何故だろうね?」

「……………貴方が何を言っているのか分からない」

和歌子は呪縛が解けたかのように急に喋り始めた。

「貴方は何を言いたいの？ 私が、サトルがここにいることがおかしいというの？」

「そうだ」

あまりにもあっさりとした肯定。和歌子ははっと口を噤む。

「君たちは消えていなきやいけない存在」

「え……？」

「『ゴート』が『ノア』に取り込まれる前に、ね」

男は腕組みをして立っている。その足元には影がない。この場所はこんなに明るいのに、光源がどこにもない。和歌子は自分の足元を見る。やはり、そこにも影はなかった。

「……何なのよ」

がくがくと膝が震える。和歌子は今更のように恐怖を憶えていた。

「何だっけ言うのよ……！」

「何故、ノエルが君を消すことができなかったのか」

男は同情する様子もなくうずくまる和歌子を見つめる。

「多分、それは……」

彼はすうっと眼を細めた。赤い瞳に宿るものを、見るものは誰もいない。

5

「おかしいと思っていたのよ」

ノエルは真顔でつぶやく。理はただじっと彼女を見つめていた。

汗がこめかみに滲むのを感じる。

「どうして和歌子さんを消去できなかったのか」

「消去……」

「そうよ」

理は拳を固く握った。

「彼女は余分なメモリを食うだけの仮想人格。『ノア』の構築する

世界には必要ないもの。本来、この世界に生じるはずもないもの。なのに何故、ここに生じて、しかも消えてしまわなかったのか」

「俺はどうなんだ？」

「貴方は実存人格、つまり卵の見る本物の『夢』だもの。ここでだつて生きていくわ。ただし」

ノエルは軽く顎をつまむ。

「解せないのは、貴方の機体は吹き飛んだはず、ということ」

「……………」

そうだ。理は思い出す。あの時感じた死の匂い。あれは、紛れもなく本物だった。

五体が千切れ飛ぶような衝撃、駆け抜けた痛み、そして、虚無。

「なのに、どうして貴方は生きているのかしら…………？」

「……………」

吸い込まれそうなノエルの瞳から、理は苦勞して視線を引き剥がす。

「そんなこと、俺にわかるわけないだろう」

吐き棄てるように言った。

「そうね」

ノエルはあっさりと同意する。

「だから調べたのよ」

「何を、だ？」

「今の貴方が、本物の『夢』なのかどうか」

「……………」

理は眼を見開いた。初めて、怖い、と思う。ノエルの言葉の続きを聞くのが怖い。彼女はそんな彼の気を知ってか知らずか、言葉を継いだ。

「思ったとおり、貴方の『夢』の元　受精卵はショック死していた。あの戦闘の時にね」

「……………」

息苦しい。気がつくとも理は口で呼吸をしていた。それでも足りない

い。肺が押しつぶされているような感覚。片手でシャツの胸元を握り締める。掌を濡らしていた汗がシャツに染みた。

「だったら、ここにいる貴方は何なのかしら」

「……………」

そんなこと分かるはずがない。叫びたかったが、それは言葉にならなかった。ただ、ここから逃げ出したい。それだけだった。

「貴方を倒した『アーク』のこと、憶えている？」

不意に尋ねられ、理は怪訝そうに眉を顰めた。

「『アーク』？」

「ああ、ごめんなさい。『ゴート』では『サクリファイズ』とっていたのかしら。戦闘機のことよ」

「俺は……………」

理の脳裏に鮮明な記憶が蘇る。

「海のような…………いや、夜の海みたいな色の……………」

「良く憶えているわね」

ノエルは言葉の割に、特に寝る様子でもなかった。

「あの機体の名前は『デープ・ブルー』」

「……………」

「そして」

ノエルは目を閉じる。

「あれは『北原透海』の駆る機体なの」

「……………!!」

理の目が限界まで見開かれた。

セミロングのストレートヘア。色白な肌に大きく開いた目、その奥の夜色の瞳。頭の回転の早さを窺わせる受け答えに、少し陰のある笑顔。時折考え込んでいるように目を伏せていることがあった。

だがいつもの彼女を彩るのは強く、前方を射抜く眼差し…………。

「俺は」

理の声が震えていた。

「彼女に、殺されたのか」

「……………」
ノエルは答えない。

勿論、透海は知らなかったのだろう。理だつて敵機の正体など知らなかった。何となく彼は「同じ人間なのかな」と思っていただけで、正確には何も知らされていなかったのだから。恐らく彼女もそうだったに違いない。しかし。
「でもね」

ノエルが口を開いた。

「もう一つ、大切なことがあるの」

「……………」
理は俯いて顔を上げない。

「誰が貴方をこの世界に生かしているのか」

「……………」
「ショック死してしまった貴方が、どうして今ここに生きているのか」

「……………」
どうせ死んでいるのだ。どうでもいい。

喉の奥がぎゅっと詰まる。泣きたくない、と思った。今泣いたら負けだ。こんなところで泣いて何になる。せめて、毅然と……………。

「今、ここにいる貴方はね」

しかし、ノエルの声は妙に優しくかった。理は目を瞑る。

「『北原透海』に残った、貴方という存在の残滓なのよ」

「……………」
「貴方の機体と彼女が接触して……………そして、彼女は貴方の欠片を持ち帰ったのね」

「……………」
「そしてそれを、『ノア』がこの世界に反映させた」
理は俯いたままだ。

「貴方の中にあつた『潮崎和歌子』の思い出ごと、ね」

「……………」

「ノア」に、彼女はこの事態を收拾するようにと命じられた。結局、彼女の邪魔をした時任輝也が何者なのかはわからなかったが……「ノア」はそれには触れなかった。「もう、邪魔をされることはないよ」。ただ、そう語ったのみである。ノエルにも、それ以上追究するつもりはない。

「……つまり」

言葉を失っていた理が、ようやく声を絞り出した。

「俺はもう……本当は生きてはいないってことなのか」

「……………」

ノエルは静かに彼を見つめる。肯定も否定もしない。だが、それは明確な答えだった。

「そうか……………」

ため息混じりにつぶやく。不思議と、何も感じなかった。何も……

……

「……………」

ノエルが不意に顔を上げた。

「どうかしたのか？」

理はぼんやりと尋ねる。

ノエルが彼を見つめた。その黒い瞳は、艶やかに濡れている。無機質なようであり、決してそうではない。これが本当の生命じゃないなんて……。理はぼんやりと思う。彼女は実際のところ、コンピュータを構成する回路の一つに過ぎないのだろう。けれど……。

「なあ」

理は手を伸ばした。

「ちょっと、触ってもいいか」

「え？」

ノエルはきよんとする。そんな表情も仕草も、とても人間らしい。

「手を、握りたいんだ。駄目かな」

「い、いいけれど……………」

ノエルが差し出す手をそつと握ってみる。柔らかくて、暖かい。

やはり……。

「『北原透海』の意識が『夢』を離れたわ」

ノエルは彼に手を握られたまま呟く。

「今のうちに……」

理はその言葉を聞いていない。ただ一つ分かっていること。それは自分にはもう時間がないということだった。

「あのさ」

「何？」

ノエルは聞き返す。

「俺の手」

理は尋ねる。

「暖かい？」

「……………」

ノエルは口を閉ざし、理を見つめた。

「どうなんだ？」

理は重ねて問う。

「そうね」

ノエルはほとんど間髪入れずに答えた。

「冷たいわ」

それを聞いた理の姿がすつつと消える。ノエルはそれを見送り、ふう、とため息をついた。視線を落とす、理が握っていた方の手を見つめる。そこには確かに、彼の手のごつごつした感触と、その優しい温もりが残っていた。

誰かに呼ばれた気がした。

ワカは膝の間から顔を上げる。そこは見覚えのある景色だった。

「サトル……？」

幼い頃、よく遊んだ公園。日が暮れるまでベンチに座ってぼうつとしていたら、互いの両親が探しに来て大目玉を食った。今となつては懐かしい思い出だ。ワカは立ち上がり、振り返った。赤い夕陽が眩しくて、目を細める。

「そっちじゃねえよ」

笑みを含んだ声がして、ワカは首をめぐらせた。視界に入る、懐かしい微笑。少しはにかんだように眉を顰めているその顔は……。

「サトル！」

「行こうぜ」

「え？……え？」

そういえば、さっきまで誰かと話していたような気がする。慌てて辺りを見回すが、そこには彼ら以外誰もいない。砂場には長い影が二つ、落ちていた。

「ほら」

差し出された手を握ると、強く握り返された。

「どこに行くの？」

「……」

サトルは何も答えない。

「ねえ」

「……」

「どこに……」

不意にワカは言葉を切る。

どこでもいいや。

そう思った。サトルが手を引いてくれるのだから。彼の手はこんなにも 暖かいのだから……。

夕焼けが沈んでいく。
しかし、その街に街灯が灯ることはなかった……。

エピローグ

加川霧子は意識を取り戻し、軽く頭を振った。何度経験しても慣れない感覚だ。

当然ね。霧子は苦笑する。この世界が「夢」でしかない、誰か想像できるだろうか。彼女が「アーク」として「トール・グラス」として闘っている時こそが現実なのだ。

「……………」

目の前にスクリーンセーバーの作動したパソコンが鎮座している。そういえば原稿を書きかけていたところだった。どうして「現実」を書き止めておこうと思うようになったのか、彼女には良く分からない。だが抽象的な言葉で描かれた「現実」は、多くの人の心を惹きつけるものらしい。気が付くと彼女は作家として知られるようになっていた。

本当の「現実」は冷たく 救いなどどこにもないのに。

「アーク」として漂う時、彼女が感じるのは絶対の孤独。味方がいようとしまいと関係ない。得体の知れない「敵」 本当はその正体に気付かないようにしているだけかもしれないが と闘っている時も、霧子は常にそれと向き合っている。

霧子はキーボードに手を当てた。十本の指を駆使し、彼女は思考を吐き出す。

『本当は、誰しも気付いているのかもしれない。この先どれだけ進もうと、どこにも目的地などないということに。それでも我々は生命であるがゆえに、死という永遠の休息が訪れるまであがき続けなければならぬだろう。』

悲しいのは、我々が作り出すものは全て 無機物でさえもが、そういう宿命を背負わされているということなのである。』

霧子はため息をついた。

「宿命……か」

指を休め、窓から空を見上げる。

真昼の月が雲の影に　　否、空そのものに、ゆっくりと溶けかけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1058ba/>

漂流ゲノム

2012年1月14日14時49分発行